

平成 22 年度修士論文

知的障害者のスポーツ活動における
ボランティア環境に関する研究

指導教員 増田 貴人 准教授

弘前大学大学院教育学研究科
教科教育家政専修保育学

学籍番号 08GP213

氏 名 大山 祐太

第一章 研究の背景

第一節 知的障害者の生活の質と余暇、身体活動	2
第二節 知的障害者にとっての身体活動の効果	
第一項 身体的な面へ及ぼす影響	3
第二項 精神的・心理的な面へ及ぼす影響	5
第三項 発達に及ぼす影響	6
第三節 知的障害者のスポーツ活動	
第一項 知的障害者のスポーツ活動の実施状況と歴史的な背景	8
第二項 知的障害者のスポーツ活動への参加阻害要因	10
第四節 知的障害者のスポーツ活動におけるボランティア	
第一項 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティア	12
第二項 知的障害者との接触経験による意識の変化	13
第三項 ボランティア活動を通しての知的障害者との接触経験	15
第五節 ボランティア活動における先行研究による知見	
第一項 ボランティアの活用の現状とこれまでの研究	18
第二項 本論文におけるボランティア活動の定義	21

第二章 目的

23

第三章 研究一：知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの負担感の構造と活動継続の意思

第一節 目的	28
第二節 方法	
第一項 方法と調査対象	30
第二項 調査内容	31
第三項 分析	32
第三節 結果	
第一項 回答者の属性	33
第二項 負担感の構造の分析	37
第三項 負担感と活動継続意思との関係性	39
第四節 考察	41

第四章 研究二：知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの 継続参加の実態

第一節 目的	45
第二節 方法	
第一項 方法と採択理由	46
第二項 調査協力者の抽出	47
第三項 調査内容と手続き	49
第四項 信頼性の確保	50
第三節 結果と考察	
第一項 結果図の提示とストーリーライン	51
第二項 多様な参加動機	52
第三項 ジレンマの蓄積：ポジティブな経験	53
第四項 ジレンマの蓄積：ネガティブな経験	55
第五項 指導者としての使命感の形成	57
第六項 学生というレッテルで評価されることへの不満	59
第四節 小括	61
第五節 今後の課題	64

第五章 研究三：スポーツ指導をおこなうボランティアに対する 知的障害者の保護者の意識

第一節 目的	67
第二節 方法	
第一項 調査対象	69
第二項 方法と採択理由	70
第三項 調査内容と手続き	71
第四項 信頼性の確保	72
第三節 結果と考察	
第一項 スポーツ活動参加の背景	73
第二項 スポーツ活動参加後の子どもの変化	75
第三項 スポーツ指導者に必要な資質	78
第四項 ボランティアに対する意識：ポジティブな側面	80
第五項 ボランティアに対する意識：ネガティブな側面	82
第四節 小括	85
第五節 今後の課題	87

第六章 研究四：スポーツ指導をおこなうボランティアに対する
知的障害者の意識

第一節 目的 89

第二節 方法

 第一項 研究方法と採択理由 91

 第二項 観察の視点と分析 92

第三節 結果と考察

 第一項 ボランティアに対する個別評価の存在 93

 第二項 個別評価の背景 96

第四節 小括 100

第七章 総合考察 102

引用・参考文献 110

資料 120

第一章 研究の背景

第一節 知的障害者の生活の質と余暇、身体活動

生活の質（Quality Of Life、以下 QOL）の高い状態で日々を過ごすというのはすべての人にとって重要な視点であり、それは当然障害者にとっても同様である。つまり、ただ生物として生きるのではなく、いかにして人間らしく自分らしく生き、人生に幸福を感じることができるかという点が重要なのである。これまでの日本の福祉は「生きる」ということに関する保障に力を注いでいたが、その後「よりよく生きる」ための支援にも関与するようになってきた（草野,2004）。「どうすれば障害者も生活することができるか」ではなく「障害者もよりよく生活するにはどうすればよいか」、つまり日常生活動作（Activities of daily living、以下 ADL）から QOL へと、社会の意識が変容してきているといえる。

QOL を高めるためには余暇の充実というのは欠かせない要素となる。鈴木（2004）は、愉しみと癒しの機能を備えるレジャーを生活の中で活用するかしないかで、QOL に大きな差異を生じさせるとし、「余暇能力（leisurability）」をどう高めていくかが日本の社会のなかで求められていると述べている。また、1995 年に厚生労働省の障害者対策推進本部によって策定された「障害者プラン～ノーマライゼーション 7 か年戦略～」では、障害者の生活の質の向上を目指して、余暇活動の条件整備を推進している。

南條ら（2005）は、153 名の知的障害児（者）を対象に、生活の質とスポーツ・レクリエーション活動の関連について個人面接法による調査を行った。ここでのスポーツ・レクリエーション活動とは、アメリカ・スポーツ医学会の基準を参考に「一回 20 分以上、週に 3 回以上」と規定されている。対象となった知的障害児（者）は、施設職員、学校職員の協力のもと、会話によるコミュニケーションが可能で、質問内容に対して適切な言語理解及び表現ができる軽度の知的障害児（者）が抽出されており、面接者はラポール形成のために事前に対象者の施設や学校に訪問している。調査の結果、生活満足度、社会参加・活動、自立・自由度について活動群の方が全体的に高い数値を示していた。

また、金子・南條（2007）は、知的障害児（者）153 名を対象とし、「日本版 QOL 質問紙簡易版」を用いてインタビューを行い、レクリエーションや交流を楽しめるスポーツであるスポーツ・レクリエーション活動が生活の質に及ぼす影響について調査・分析を行っている。その結果、スポーツ・レクリエーション活動の活動群が非活動群よりも生活の質が高いという結果が得られていた。身体活動はその行為者となる知的障害者にとって、余暇を充実させる有効な手段であることがわかる。

第二節 知的障害者にとっての身体活動の効果

第一項 身体的な面へ及ぼす影響

ここで、知的障害者にとっての身体活動の意義についてまとめておきたい。身体活動は心身ともに様々な好ましい効果が期待できる活動である。身体活動によってもたらされる具体的効果の例を以下に概説する。

身体活動の効果について、「身体的な面への効果」と「精神的・心理的な面への効果」、「発達に及ぼす影響」の三つの側面から理解することができる。まず、身体的な面への効果としては、知的障害者は健常者よりも肥満傾向にあることが報告されていることから（原ら,2001. 我妻・伊藤,2002. 土屋ら,2004. 浜口,2006. 石倉・坂口,2009）、知的障害者にとっては肥満解消への効果が期待できる点が大きな意義をもつといえる。知的障害者の肥満の特徴について、原ら（2001）、浜口（2006）によると、知的障害そのものに起因するものと、知的障害の原因である基礎疾患の症状として見られるものがあり、具体的にみると以下の5つの問題が考えられる。

①肥満予防・治療にむけての意識・理解が乏しいこと、強迫観念・行動などからくるなおしにくい偏食があること、食べ物・食べることへのこだわりがあること、あまり咀嚼をしないで飲み込むことなどの、本人の食行動の異常の問題。

②家庭では食べ物が目に入ることが多くことや、パニックなどを起こした際食べ物を利用して收拾をはかる習慣があること、軽度から中度の知的障害の場合、自分で食べ物を調達できるため家族が管理しきれないといった、食環境の要因。

③家族自身肥満傾向の家庭では食事量の基準が多くなってしまうことや、家族が「(知的障害ゆえに) 食べることしか楽しみがない」「食事制限はかわいそう」という想いでいること、家族の肥満からくる健康障害への理解が低いなどの、家族の姿勢の問題。

④運動発達の遅れや、筋緊張異常による運動の拙劣、飽きやすい・遊べる友人がいないなどの理由から運動への意欲を持続することが難しい場合があること、義務教育終了後の唯一の運動機会であった体育の授業がなくなることなど、運動量の不足の問題。

⑤ダウン症候群やプラダーウィリー症候群、ターナー症候群など、内分泌異常がみられ、肥満と知的障害を伴いやすい基礎疾患があること。である。

肥満は単に体型が変化してしまうというものでは当然なく、健康状態が損なわれつつあることを示している。特に知的障害者における肥満は高度肥満が多く、Ⅱ型糖尿病、高血圧症、高脂血症などの生活習慣病が合併症として出現した場合、心臓血管障害や脳血管障害が引き起こされる危険性があり、知的障害者の急性死の原因に占める割合も高いため（浜口,2006）、適切な治療が求められる。知的障害者の肥満は上記のような様々な要因が影響しているため、食事療法や健康教育、医療的なケア、運動療法といった本人への直接的指導から、家族・学校が連携して肥満解消を目指すという周囲の環境作りなど、複合的な方法が実施されている（原ら,2001）。

北川（1985）はトレーニングの方法にもよるが、運動は、身体組成や体重に影響するこ

とは確かであると述べている。ただし、局所での筋運動によるトレーニングは、その部位に表在する皮下脂肪を減少させないことなどから、トレーニングプログラムが適切である必要性にも言及している。原（2006）は、運動指導の際には、適切な動機付けを行い、対象児の準備性に応じた指導を行うことの重要性にふれ、小児肥満に対する運動療法を成功させるには、保護者の協力や運動の重要性に対する社会の理解も不可欠であると述べている。また、具体的な方法として、知的障害者の肥満の予防・改善には、筋力・筋持久力を高める運動によるエネルギー消費量を高めることが効果的であることも示唆されている（土屋ら,2004）。さらに、知的障害者にスポーツ活動と競技会を提供する国際的組織であるスペシャルオリンピックスも、知的障害者は肥満傾向にあることを強調し、高度肥満からくる重大な危険な疾患が懸念されることから、参加者に検診と健康への意識付けを行うプログラムも提供している（Special Olympics Inc, 2001）。知的障害者の肥満の解消には、本人への指導のみならず、家族、学校や施設などの地域社会が一体となって問題に取り組む必要があり、そういった環境の中で適切に身体活動を行うことが重要であるといえる。

また、人間の体力を構成する筋力、敏捷性および持久性の三つの因子のうち、とくに全身持久性に貢献する心肺機能は、トレーニングにより改善し脱トレーニングにより機能低下するという可逆性があることから、機能の改善・維持には継続的な一定強度のトレーニング刺激が必要であるといえる（浅野,1985）。知的障害者は、前述したように、運動発達の遅れや、筋緊張異常による運動の拙劣、飽きやすい・遊べる友人がいないなどの理由から運動への意欲を持続することが難しいといった問題を抱えている。これらの理由で継続的な身体活動が行われないと、心肺機能は低下してしまい、機能の低下に伴う疲労感からさらに運動に対して億劫に感じてしまうといった、悪循環が生じることが考えられる。

さらに、骨や関節への影響について高沢（1985）は、これまで、運動が骨や関節に具体的にどのような影響を与えるかについては、データの集めにくさ（例えば、骨折は骨の強度よりも他の要因に多く左右されるため、運動により骨が丈夫になって骨折しなくなったなどのデータは集めにくい）もあり、過度の運動によって生じる障害面についての研究に比べ報告が見当たらないため、具体的な指摘は難しいとしている。しかしながら、骨は筋肉によってとりかこまれており、筋肉の収縮によって骨には力が加わるので、運動の結果骨の強度が増加すること、変形性関節症の発現の防止とその症状の程度を軽減化させるには、適度の運動の効果は絶大であり、筋肉の委縮を防止し筋力をつけることによって関節に適度の負荷を与えることが関節に効果をもたらすことから、適度な運動が骨・関節へ好影響を与えると述べている。知的障害者は食行動の異常や偏食などがみられる場合が多く、自閉傾向にある場合より顕著な場合が多い。栄養摂取に著しい偏りが有る場合、骨や関節の形成に悪影響を与えてしまうことが考えられる。また、ダウン症候群は関節の過伸展、筋力の弱さという問題がある。適度な身体活動は骨や関節の怪我・病気のリスクを低くするという点からみても、効果が期待できるだろう。

第二項 精神的・心理的な面へ及ぼす影響

また、精神的・心理的な面では、余暇における身体活動の実施は、職業性ストレス下にある勤労者のうつ対策において意義が有る可能性が示唆されている（甲斐ら,2009）。橋本ら（1991）も、運動は種目如何にかかわらず快感情の改善に寄与していることを明らかにし、感情の改善が媒介となってストレスを低減させることを推察している。また、本来人間の基本的な行動原理は「快を追い求め」「不快を避ける」ことにあるため、日常の生活行動をはじめ、すべての意思的行動は原則的には「快を追う」行動と解釈でき、快を体験するのに最も適しているのが、ランニングやサイクリング、ダンスなどできるだけ自分の気ままにできる運動であるという（朝比奈,1985）。

Winnick（1992）は、知的障害児の中には遊びのルールをほとんど知らなくても、音楽、ダンスやリズム活動があることで積極的に楽しむことができるものもいることについて触れ、知的障害児にとって特に積極的に楽しむことができる活動として、ハイキング、サイクリング、ダンス、トランポリン、水泳、釣りなどを挙げている。他にも適度な運動はうつを予防し記憶力を高め、自信をつけさせる効果があるという報告がある（原,2006）。また、現在 175 の国知地域において活動が展開されている、知的障害者スポーツの組織であるスペシャルオリンピックスも、知的障害者がスポーツ活動を通じて、友情を分かち合い、自信を高め、社会に参加することを理念として掲げている（スペシャルオリンピックス, 2006）。

一般的に障害児は自己肯定感が低い傾向にあると認識されている。それは周囲の期待や多くの健常者の活動可能な水準と、自らの実行能力とのずれから生じてしまうことが考えられるが、特に軽度の知的障害児の場合考慮すべき問題となっている。阿部・廣瀬（2008）は、軽度知的障害児は、障害ゆえに特別な配慮がなければ適切な愛着行動やソーシャルスキル、学習行動などを十分獲得できないという側面と、一見障害が軽度で言語使用にも大きな問題がないため保護者や周囲から過度に水準の高い要求をされるという側面の二つの相互作用により、子どもは失敗経験を重ね、不安が高くなり、自信を失い、自己肯定感を低下させると述べている。

知的障害児が、運動をすることで爽快感を得、自信を高めることができれば、より生き生きと日々の生活を営むことを可能とするのではないだろうか。

第三項 発達に及ぼす影響

また、発達の観点からみても身体活動の重要性は強調されるべきものである。Winnick (1992) は、全面的な発達を構成する発達の領域として、静的筋力・瞬発力・心配持久力などの『身体』、移動性運動・非移動性運動・バランス運動からなる『運動』、視知覚・聴知覚・ハプティック知覚からなる『知覚』、言語概念・数概念・科学概念からなる『学習能力 (教科)』、そして認知や表現・社会的相互作用などの『認知』を挙げた。同時に、これらの領域はそれぞれが独立した存在であるのではなく、直接的にも間接的にも、関係しあったり影響しあったりしているものであると述べている。つまり、身体を動かすということは、動かした身体部位の強度を高める・運動スキルを向上させるといった直接的な効果をもたらすとともに、他の発達領域にも影響し、延いては全体的な発達に繋がっていくことなのである。Bredekamp (1992) は、人間の発達領域において、運動発達や運動スキル学習はもっとも広く効果の確認・理解がされており、運動発達と他の発達や学習の領域との関連は、とりわけ幼児期において分離できるものではないとし、“Young children must learn to move, but they must also move to learn. (幼児は動くことを学ばなければならない、しかし彼らは、学ぶためにもまた動かなければならない。)” と述べている。

さらに、Weiller (1992) は、発達の適切な体育プログラムは、小学生が自身への敬意、他者への敬意、および運動スキルの成功経験を通してポジティブな自己概念を築くことを可能にするであろうと述べている。しかし、動きの世界は子どもの自己概念を築くことができる一方で、それを取り壊すこともできてしまう危険性について触れており、運動の環境を構造化する際には、子どもの社会的、情緒的な発達の特徴を考慮しなければならないこと、学校の教師や管理者、両親は、子どもの発達段階において博識で、ポジティブな自尊心の発達を促進する経験を与えるために努力しなければならないことを指摘している。人間が健全に発達するために身体活動は必要不可欠な活動といえる。

情緒－行動障害を示す者にとっての身体活動の重要性について、Winnick (1992) は次のように述べている。『①ゲーム、スポーツ、あるいは遊びは子どもの攻撃性、活動欲求を解消するための社会的に容認されうる手段である。②集団での身体活動、運動遊びは、仲間との共同活動から引きこもりがちな子どもが躊躇なく参加できる魅力を持っている。③遊びや身体活動は、学習の場ばかりでなく、日常生活においても楽しいものとなりうる。子ども同士だけでなく、大人も参加することで思いがけない効果が期待できるものである。④身体活動は、子どもの身体意識、自己概念を健全に育てるものである。⑤遊びを通した活動に参加することで、新しいスキルを身につけたり成功感を体験することができる。これは子どもの自身や自己評価を高めるうえでとても大切なものである。⑥身体活動は、社会的、情緒－行動的発達を促すための最適な学習基盤になる。そこに有能な指導者がいれば、情緒－行動問題児のいわゆる問題行動を、社会的に容認される行動に方向づけることが可能なのである。⑦身体活動に参加することで、無意味な刺激に惑わされずに注意を一点に向けることが比較的容易になる。⑧身体活動は子どもの生活の現実性を試す絶好の

場となりうる』。これらは、情緒－行動障害児を対象として書かれており、情緒－行動障害児は身体活動への参加を嫌う傾向があること、身体活動のタイプによっては仲間との共同活動や社会性が必要とされるものもあるので問題行動の軽減に有効であることに立脚したものである。知的障害児も、身体活動に対して忌避的な態度を示したり、コミュニケーション能力や社会性の獲得に困難を抱える傾向があるため、知的障害児にとっても大いに適応可能な部分があるのではないだろうか。

以上のことから身体活動は、身体的にも精神的・心理的にもポジティブな効果が期待でき、発達に欠かせない活動であると理解できる。しかし、ただ実施すれば必ずよい効果が生じるというものではなく、適切な環境・生活習慣の中で、個々の心身の状態や性質に応じた適切なトレーニングメニューをもって実施されることが重要である。

第三節 知的障害者のスポーツ活動

第一項 知的障害者のスポーツ活動の実施状況と歴史的な背景

身体活動の中でも、「スポーツ活動」は特に魅力的な活動である。一般的にスポーツ活動とは、一定のルールに則り勝敗を競うものであると認識されている。スポーツ活動は、それ自体生理的に快を経験できる他に、成功、勝利、栄光、名誉など、また逆に失敗、敗北、恥辱などの貴重な人生体験を現実のものとして手に入れることが可能であることが魅力である（朝比奈,1985）。また、Harada & Siperstein（2009）は、知的障害者がスポーツ活動に参加する動機は楽しみと満足に基づいており、障害がない者と同様に、スポーツ活動が重要な生活経験であると述べている。スポーツ活動は、レクリエーションのように活動そのものを楽しむ要素もありながら、ルールの下で競い合うことによる結果、様々な刺激的な経験をすることができるのである。競技の特性によって得られる効果にばらつきは生じるが、身体活動を前提としているので、当然前述したような身体活動特有の好ましい効果を期待することができる。

知的障害者の余暇の活性化にも、肥満の解消や健康の維持、自己概念の形成などにも効果が期待できるスポーツ活動であるが、我が国の知的障害者の余暇の傾向としては、多くはテレビ観賞や音楽鑑賞など室内で過ごしており、運動・スポーツ活動の機会が多くない現状にあることが報告されている（高畑・武蔵,1997、石黒ら,1999、中山,2000）。長い歴史をもち、組織・活動面ともに充実をみせている身体障害者スポーツに比べ、知的障害者スポーツはいまだ理解・振興を最大限に推進していく段階にあるといえるだろう（能村,1998）。

ここで、現在までの知的障害者スポーツの動向について整理したい。障害者スポーツは機能回復を目的とした医学的リハビリテーションを起源とするが、現在ではその姿を大きく変え、障害者のスポーツ活動は大きく 3 つに分類することができる（陶山,2006）。第一に、障害された運動器官の機能回復や残存機能の向上、身体の機能的予備力の向上により、日常の身体活動の拡大および確立、社会生活への適応養成などを目的とした「リハビリテーションスポーツ（医療スポーツ）」としての分類。第二に、心身の健康の維持・増進、心理的安定、仲間作り、社会参加など、生きがいと潤いのある豊かな社会生活を送ることを目的とする「生涯スポーツ（市民スポーツ）」としての分類。そして、パラリンピックなどに代表される、強さ・速さ・高さなどの記録への挑戦や、プレイヤー同士で競い合うことに意義を求める「競技スポーツ」としての分類である。

医学的リハビリテーションとして取り組まれた障害者スポーツ活動であるが、「障害者プラン～ノーマライゼーション 7 か年戦略～」において、ソフト面・ハード面ともに整備し障害者スポーツの振興を図ることが明記され、2002年に策定された「重点施策実施 5 か年計画」においても、生活支援という括りの中でスポーツ活動の振興が謳われている。また、「障害者白書」の中でも、毎年、「スポーツ・文化芸術活動の推進」という項目が日々の暮らしの基盤づくりという章の中に盛り込まれていることから、障害者にとっての身体活

動は自立・社会参加に繋がる大きな要因であることが窺える。しかしながら、長く社会的排除の対象となってきた障害者にとって、スポーツ活動に取り組むことの意義は認められながらも、「障害者がスポーツに親しみ、喜び楽しむ」ことの権利の享受に対する社会的認知や理解は歴史的にも浅く、支援体制や受け皿がまだまだ少ないのが現状である（渡邊,2006）。とりわけ、身体障害者スポーツに比べ知的障害者スポーツにおいてはその傾向が強い。

藤田（2008）は、日本における障害者スポーツの歴史を、4 期に分けて説明している。まずは、国際ストークマンデビル競技大会への参加、東京パラリンピックの開催、(財)日本障害者スポーツ協会の設立、第1回日本車椅子バスケットボール選手権大会開催など、今日まで障害者スポーツの普及発展をリードしてきた重要な団体の組織化され、その基礎が作られた時期である①障害者スポーツの基盤形成期（～1975年）。チェアスキーや視覚障害者のマラソン・柔道、車いすテニスなど様々な障害者スポーツが紹介され、実施されるようになり、その普及・多様化を支える指導者の育成が本格的に始まった時期である、②障害者スポーツ種目普及期（～1990）。長野パラリンピック開催を機に、ジャパンパラリンピック開催など選手強化が本格的に始まり、また、メディアでも障害者スポーツをスポーツとして扱い始めた、③競技志向化期（～1998）。そして、(財)日本身体障害者スポーツ協会が、(財)日本障害者スポーツ協会となり、身体・知的・精神障害を統合的に扱われるようになり、第1回全国障害者スポーツ大会が開催されるなど、統合化と競技の高度化が推進した、④高度化・統合化期（1998～）である。

ここでも確認できるように、知的障害者スポーツが注目され、その推進が図られるようになったのは近年になってからである。②種目普及期に、知的障害者のスポーツ大会が各地で開催されるようになってはいるが、各都市や民間レベルでの開催に留まり、全国的な動きとなるには至っていない。知的障害者スポーツの停滞は、やはり国の障害者スポーツ施策の不備にあるだろう。国が施策として知的障害者スポーツを推奨し始めたのは1990年代に入ってからであり、これ以前は民間団体を中心となり推進してきたのだが、当事者運動としての推進がみられた身体障害者スポーツに対し、知的障害者は自らの意思や考えを訴えることが困難である場合が多いため、当事者運動としての推進も難しかったことが推測される（渡邊,2006.）。

第二項 知的障害者のスポーツ活動への参加阻害要因

望月（2007）は、①経済的要因、②施設などの物的環境要因、③指導者などの人的環境要因によって、障害者はスポーツ活動への参加が妨げられていると指摘している。以下、この三点について知的障害者に該当するよう補足し概説する。

①経済的要因：「平成 17 年度知的障害児（者）基礎調査結果の概要」（厚生労働省,2007.）によると、月の給料が「ない」と「1 万円まで（1 万円以内）」である知的障害者は 48.2% とほぼ半数であり、障害の程度による内訳は、軽度が 17.2%、中度が 27.6%、重度が 32.8%、最重度が 13.2%、不詳が 9.1%となっていた。知的障害者全体における程度の割合が軽度 24.4%、中度 25.5%、重度 24.4%、最重度 14.9%、不詳 12.0%であったので、そこからすると、月 1 万円以下の給料は軽度の人の割合が低く、重度の人の割合は高いことになる。重度知的障害者は付き添う介護者がいなければ外出できない場合が多く、余暇保障はガイドヘルパーなど社会福祉の領域を視野に入れて考えていく必要があるため（丸山,2004）、軽度の知的障害者より出費が多くなってしまう重度・最重度の知的障害者にとっては、一層スポーツ活動への出費が難しくなっている。また、知的障害者の 58.3%が作業所勤務であることから、2006 年 4 月より施行された障害者自立支援法によって、障害者福祉サービスに原則 1 割の自己負担と光熱費や食費の負担が強いられたことは、自由に使える金額がさらに減額されることに繋がると言える。直接の生活費が切迫してしまえば、余暇・スポーツ活動への出費は後回しとなってしまうことが考えられる。

②施設などの物的環境要因：障害者が利用できるスポーツ施設としては、障害者が優先的に利用できる専用施設としての建設がなされ、現在までにはほぼ各都道府県には 1 箇所以上の施設が設置されるに至った（望月,2007）。身体障害者と比較した場合、知的障害者（身体障害を重複しない）は物理的な制限が少ないようにも思える。しかし、望月（2007）は、施設が構造上障害者の利用が可能であるだけでなく、施設の管理者が障害の内容に対する正しい知識を持ち、障害者スポーツに対して理解がなければ、障害者の利用は困難であると指摘している。その具体例として『ダウン症の女性（当時 16 歳）が、1998 年、民間のスイミングクラブへ入会しようとしたところ、「中学生以上の障害者は断っている。ダウン症の人は突然暴れることがあるので」という理由から入会を断られた』という例を紹介している。金子・南條（2007）は、知的障害児（者）153 名を対象とし、「日本版 QOL 質問紙簡易版」を用いてインタビューを行い、生活の質に及ぼすスポーツ・レクリエーション活動（レクリエーションや交流を楽しめるスポーツと定義しており、競技スポーツと区別している）の影響について調査・分析を行っている。対象となった知的障害児（者）は、施設職員、学校職員の協力のもと、会話によるコミュニケーションが可能で、質問内容に対して適切な言語理解及び表現ができる軽度の知的障害児（者）が抽出されている。調査の結果、知的障害児（者）は、スポーツ・レクリエーション活動を支援する組織が少ないと感じている者が多いという実態が明らかとなった。これは、次の人的環境要因も関係する問題でもあるだろうが、知的障害者が楽しく体を動かしたいと考えた際その受け入れ先

がない、または、あっても当人たちにその情報が行き届いていないということが考えられる。

③指導者などの人的環境要因：日本障害者スポーツ協会が障害者スポーツ指導者の養成に取り組み、障害者スポーツ指導員の登録者数は着実に増加しているが、未だ全ての障害者がスポーツに参加することを支えるだけの指導者数とはなっていない（望月,2007）。藤田（2004）は、全国の市の障害者スポーツ大会および教室・講座の担当組織に対して、障害者スポーツ関連の大会の開催状況、障害者スポーツ関連の教室や講座の開催状況、それらに対する障害者スポーツ指導者の関わり方の実態、その可能性に関するアンケート調査を行っている。その結果、障害者スポーツ指導者の存在の認知度が低いことや、障害者スポーツ指導者が障害者スポーツ関連の大会に組織的に関わっていない実態があること、障害者スポーツ指導者の関わりを推進するには、資金面の問題の解決や、調整・企画・運営等のマネジメント面の資質向上が必要であることなどが明らかとなった。安井（1998）も、地域の障害者スポーツイベントを開催する際、指導者の確保・育成が課題となり、特に在宅の障害者にとって指導者確保が難しいことを指摘している。

また、溝口・岩田（1999）は、全国の知的障害児施設 295 箇所に対してスポーツ活動の実施に関する質問紙調査を行った。知的障害者の入所施設では、比較的重度者が多い上に、知的障害者の運動プログラムや指導知識を持った指導員が少ないため、スポーツ活動を行うことが困難な現状にあるという。知的障害者が示す症状を一括りに扱うことは不可能であり、自閉症やダウン症などその行動様式や性向について比較的多くの知見が得られているものであっても、当然一括りに扱うことなど不可能である。指導の際の注意として、特に中重度の知的障害者は指導者の影響を受けやすいため、本人の意向が十分に反映されない危険性があるという問題もある（安井,2004）。障害特性、それに伴う心身の状態、興味の方向、生活スタイルなど、知的障害者個人の实態に即した適切なサポートが求められるため、スポーツ指導の際は専門的な知識や経験がなければ指導が難しく、それゆえに指導者の確保が十分にできていないということが課題となっている、

知的障害者は、これまで身体障害者スポーツに比べて目を向けられてこなかったという社会的な背景と、それによる制度の不備からくる経済的要因・物的環境要因・人的環境要因によってスポーツ活動への参加が阻害され、余暇活動としてスポーツ活動を積極的に選択することが難しい状況に置かれている。冒頭でも述べたように、余暇の過ごし方は一様ではなく、各人のニーズに合わせて選択されるべきである。余暇は必ずスポーツ活動をして過ごさねばならないなどというわけではないが、知的障害者は、心身ともに非常にポジティブな効果が期待できるスポーツ活動に参加したくても参加できない現状にあり、このことは看過することができない重大な問題であるといえる。

第四節 知的障害者のスポーツ活動におけるボランティア

第一項 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティア

知的障害者のスポーツ活動は、これまで国によってではなく、日本知的障害者スポーツ連盟やスペシャルオリンピックス日本などの民間・非営利活動組織によって支えられてきた（渡邊,2006）。言うなれば、知的障害者のスポーツ活動を普及させたい発展させたいと願う、保護者やボランティアの力によって活動が展開されてきたのである。

障害者のスポーツ活動におけるボランティアの活用に関しては、1995年に示された「障害者プラン～ノーマライゼーション 7 か年戦略～」において、指導員の養成研修の強化、ボランティア参加の促進、障害者スポーツに対する理解と関心の高揚を図ることが明記されている。このことから、知的障害者のスポーツ活動が普及・発展するためにボランティアの存在が重要となることがわかる。近年は、地域のスポーツ組織や団体におけるボランティアの重要性が取りざたされている。スポーツ組織・団体において、ボランティアが果たすことのできる役割は大きく幅の広い活躍が期待されており（野村, 2002）、現在、我が国の代表的なスポーツ組織・団体の半数がボランティアを活用している現状があるという（仲澤, 2002）。特に非営利のスポーツ組織にとっては、価値ある人的資源を有効に使うことが、組織の成功への1つの鍵となる（松岡・小笠原,2002）。それどころか、松本ら（2004）の指摘するように、組織の構成員たるボランティアの不足や離脱は、組織活動の成否、ひいては組織の死活問題に発展する危険性を孕んでいる。

以上のことから、特に知的障害者のスポーツ活動においては、国への制度・設備等の改善を要請すると同時に、ボランティアの有効活用による今ある活動の維持、推進を行う必要があると考えられる。

第二項 知的障害者との接触経験による意識の変化

スポーツ活動においてボランティアの充足が可能となれば、知的障害者がスポーツ活動に取り組むことを容易とし、スポーツ活動によって得られる様々な効果を得ることが期待できる。また、障害者との接触経験を要するボランティア活動は、ボランティアを利用した組織や被支援者のみが恩恵を受ける、いわばボランティア活動においてはボランティアがその支援の対象者へ影響を与えるという一方通行のものではない。ボランティア活動すること、障害者と接触することによって、ボランティア側も様々な影響を受けていることが報告されている。

特に障害者に対する意識の変容については多くの報告がある。Jones et al. (1981) は、集中的なプログラムを通して、児童の精神的または身体的なハンディキャップを持っている人々に対しての認知において、どのような効果がもたらされるのか検証した。結果、児童はハンディキャップを持った人々のニーズと能力を観察したり、経験したりすることができるようデザインされた活動（例えば、聴覚障害の中学生と指文字を使つての質疑応答、目が不自由な大学生との会話、著しく精神的な遅れがみられる思春期の子どもとのふれあい及び腕相撲、目が不自由な人たちのスポーツ参加の映像を見る、など）を通し、その認知にポジティブな変化が生じたことを報告している。安井（2004）は、車椅子バスケットボールを通して交流体験をした小学生の意識の変容について調査している。その結果、車椅子バスケットボールを行った前後で、かわいそう、暗い感じ、生活が困難といったネガティブなイメージが薄れ、「自分と違う存在」として認識する傾向がみられたことが報告されている。生川（1995）は、高校生から 40 歳代の 469 名を調査対象として多角的観点から精神遅滞児（者）に対する健常者の態度について検討をしており、精神遅滞児（者）との接触経験が有る人の方が、実際に関わろうとする気持ちが強く、地域での交流を推進しようという気持ちも強いことを報告した。

また、障害者に対する意識の変容の他にも、妹尾・高木（2003）の報告では、ボランティアは、他者を援助することから役立ちを実感して認識や行動面で愛他的になる「愛他的精神の高揚」、新たな人間関係からさまざまなことを吸収し活動そのものを楽しむことができる「人間関係の広がり」、やりがい生まれ、自分自身を高めようと奮起する「人生への意欲喚起」の、3 つの援助成果を得ていることが示された。文部省高等教育局（1999）による「大学資料」においても、社会性の涵養や、知識・技術のより深い習得など、学生の多様な能力が育成されるとし、授業にボランティア活動が組み込まれ例も少なくない。

以上のように、スポーツ活動に参加する知的障害者本人にとっても、ボランティア本人、地域・社会全体にとっても、ボランティア活動の普及は有益であることがうかがえる。

現在、障害者が社会参加する際、「物理的な障壁」「制度的な障壁」「文化情報面の障壁」「意識上の障壁」の 4 つの障壁があるとされ、中でも「意識上の障壁」が最も厚い壁となっている（藤田,2008）。周囲の人の偏見や差別的な見方、心ない言動はもちろん、その他にも、障害者を何もできない人・かわいそうな人と捉え、腫れ物に触るように接することも意識

上の障壁に含まれる。物理的な障壁、制度的な障壁、文化情報面の障壁も、突き詰めると障害というものを歪んだ形でしか認識していないからこそ、生じる障壁ではないだろうか。誰もが、障害があっても、地域で当たり前で生き生きと生活するためには周囲の人々の意識が変わらなければならない。ボランティア活動という接触経験の機会が増えることは意識上の障壁を取り除く意味でも非常に重要な役割を担っていると考ええる。

第三項 ボランティア活動を通しての知的障害者との接触経験

しかし、障害者との接触経験が必ずしも障害者に対する意識をポジティブなものに変容させるとも言い切れない。John (1972) は障害者と関わった職業機能更生カウンセラーの態度の変容について、四肢の切断者、盲目、美容状態の障害者に対する態度でネガティブな変化を示したことを、盲目と美容状態の障害者においてカウンセラーは間違っていたことを言ったり・したりすることをより恐れることを報告した。Granofsky (1955) は障害があると視覚的に判断できる男性（車椅子、顔面の毀損、腕・足の切断者）に対する障害のない女性の態度について調査し、社会的な接触は障害者へ対する潜在的な敵愾心を修正するための効果的な手続ではないことを示した。これらはいずれも身体的な障害のある者との接触について書かれているが、知的障害者との接触についても Okolo & Guskin (1984) は、直接的な接触が不愉快な経験となってしまう場合忌避的な態度となることを指摘している。

また、橋本 (2000) の社会福祉系の専門学校生に対する調査によると、専門的知識や技術を学びかつ 9 割以上の学生が社会福祉への就職を希望しているにも関わらず、過半数が「不潔」「不幸」と否定的障害者像をもっていたこと、全体的に接触経験がある者は肯定的・積極的回答に多いが、接触経験がある者でも否定的・消極的回答を示している存在がみられることから、接触経験のあり方、つまり「質」が課題となることを示唆している。中村・川野 (2002) の精神障害者に対する女子大学生の偏見の実態調査でも、精神障害者に対して一般論としては受容的・理解的でありながらも個人としては忌避的な面があり、直接・間接（マスコミ報道）問わず積極的かつ能動的な接触経験が精神障害者との社会的距離を縮めるのであって、必ずしも直接的な接触によって肯定的に変化するのではないことが示唆されている。

さらに、松村・横川 (2002) は、知的障害者のイメージとその規定要因について調査し、知的障害者との接触経験について「見たことがある」と「話したことがある」の 2 つに分けて考察した。日常生活の中で知的障害者と「話す」という行為はあまりなく、機会があっても回避し得る行為であることから積極性・自発性が感じ取れるとし、一方「見る」という行為は自発的意思に基づくものではない場合が多い。以上のことから、知的障害者との接触経験を「見た」「話した」に分けたのである。その結果、「知的障害者と話したことがある」についてはポジティブな効果がみられたのに対し、「知的障害者を見たことがある」についてはポジティブな効果と、ネガティブな効果の両方が確認されている。これらのことから、単に知的障害者と接触すれば、態度形成に好ましい影響をもたらされるというのではなく、受動的接触が場合によっては偏見的態度を増長させてしまう可能性があるといえる。

一方で、接触経験がなくてもポジティブな変化を生じさせた例も存在する。藤田 (2003) は障害者スポーツの授業が大学生の「障害者の能力」「障害者スポーツ」「障害者に対するスポーツ指導」に対する意識にどのような影響を与えるか調査した。設定された授業では、大きく講義、スポーツ実践、見学の三つから構成されており、車椅子による移動体験・ア

イマスクをつけての歩行及びガイド・車椅子バスケットボール・スポーツチャンバラといった障害者・障害者スポーツの体験や、障害者スポーツの指導現場の見学という機会があっても、大学生が直接的に障害者に接するという機会は設定されていなかった。にもかかわらず、授業を通して大学生は、障害者の能力を身体障害者、知的障害者ともに肯定的に捉え、積極的に評価するようになったことを明らかとした。以上のことから、「障害者とふれあえば理解が深まる、肯定的に捉えるようになる」といった楽観的な発想は必ずしも得ないを考える。

しかし、Amoto (1990) が、「日々の援助行動のほとんどは、友人や家族、顔なじみの相手といった既知の相手に対するものがほとんどであり、知り合いではない相手に対して行われることは少ない」と述べる通り、第三者への援助的な接触ということはすでに前提として自主性・自発性を備えたものであると考えられる。知的障害者と自発的な意思で積極的に関わる人は、その意義を認めているからこそ交流しよう・理解しよう・行動に移していることが予測され、受動的・消極的な人よりも、当然知的障害者の存在や知的障害者との関わり、知的障害者がスポーツ活動に取り組むことなどについて肯定的に捉える場合が多い可能性を留意しなければならない。

この点について生川・安河内(1992)は、福祉・保育・教育等を専攻している女子大生の精神薄弱児(者)に対する態度について、「接触経験」と、より主体性をもつ接触経験である「ボランティア経験」の有無について着目し検討を行っている。その結果、接触経験もボランティア経験もない女子大生の場合、精神薄弱児(者)に対する態度の中に「総論賛成各論反対」という姿勢があり、「精神薄弱の人のためにボランティアをしたい」「精神薄弱の人と一緒に仕事をしてもよい」といった実践的な好意について意識が低かった。逆にボランティア経験を有する女子大生の場合は、精神薄弱児(者)との具体的かかわりについて尋ねた質問に対しても好意的回答が多く、実践的好意度も高かった。また、ボランティア経験はないが接触経験はあるという女子大生は、接触経験もボランティア経験もない群、ボランティア経験のある群の中間段階にあった。

同様に、桐原(1999)も、主体的動機に基づいたボランティア活動の経験を有すること、ボランティア活動として障害者に対して直接的にかかわることが、障害者への情緒的理解を促すことを明らかとしている。大谷(2002)も、知的障害児(者)との接触経験を通してかかわりに意義を認めることができている学生は、接触経験のない学生比べて、知的障害児(者)とのかかわりについて積極的であり、彼らの能力についてもその可能性を評価し、健常児との学び・地域における交流推進に対しても肯定的であると述べ、その背景として、対象とした学生にとって接触経験が任意の機会であったことを挙げている。知的障害児(者)とかかわる判断を自らが言い、機会を求め、かかわりを続けていこうとする自主的・自発的な行動の重要性を示唆している。

接触経験は概ね、障害者への態度・意識を肯定的に変化させるようであるが、重要なのは「接触したかどうか(経験の有無)」ではなく「どのような背景で(自発的かどうか)」「ど

のように接触したか（接触経験の質）」である。障害者に対する態度・意識が否定的なものから肯定的なものとなることは、ノーマライゼーションの実現に向け、目を向けなければならない重要な問題である。これらのことから、知的障害者のスポーツ活動における管理者は、ボランティア自身がどのような経験・認識をしたかという点に気を配る必要があり、適切なマネジメントが求められている。

第五節 ボランティア活動における先行研究による知見

第一項 ボランティアの活用の現状とこれまでの研究

ボランティアを十分に確保し、継続的な参加を促すためには、ボランティアの実態について把握する必要があるだろう。例えばボランティアをマネジメントする立場の者が、ボランティアの動機を理解しそれぞれの動機に対して適切に対処できれば、ボランティアのやる気を喚起させ、活動の活性化を図ることを可能とする（松岡・小笠原,2002）。Winniford,et al.（1997）も、大学生のボランティアの動機として、利己的動機、利他的動機、社会的な義務とその他の可能性について挙げ、これらを管理者がよりよく理解することで、大学生がサービス活動に関わり、継続する機会をより生み出せるであろうと述べている。これまでボランティアの実態について、参加動機、継続意欲、ドロップアウトについてなど、様々な視点から多くの知見が得られている。

例えば、ボランティア活動について Clary et al（1998）は、①他者に対して、利他・人道主義的な関わりができるという「Values（意義）」、②新たな学習経験や知識・技術・能力を発揮する機会となることの「Understanding（学習・理解）」、③友人と共にいる機会、または大切な人に好意的にみられる活動に従事する機会であるという「Social（社交）」、④ボランティアに携わることでキャリアに関して受益が期待される「Career（キャリア）」、⑤将来自己に生じた問題を対処するのに役立つかもしれないという「Protective（保護）」、⑥「Enhancement（向上）」の6つの要素を提示している。

また、非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機として、松岡・小笠原（2002）は以下の8要素を見出している。①人との出会い、交流、協力を通して得られる喜びを求めてボランティア活動を行う「社交（Social）」。②知識を獲得、学習、または経験を積むことを通して、自分の能力を伸ばすためにボランティア活動を行う「学習・経験（Learning and Experiencing）」。③実益に関係なく、単に何かを知りたい、何かに興味があるという理由からボランティア活動を行う「個人的興味（Personal interests）」。④自分の現在の仕事あるいは就職に役立つような人的ネットワークの拡大を求めてボランティア活動を行う「キャリア（Career）」。⑤実益の獲得というレベルをはるかに超えた、人間としての成長を求めてボランティア活動を行う「自己陶醉（Self-development）」。⑥組織、あるいは組織に関わっている人々に対する義務感から、特定の組織のためにボランティア活動を行う「組織的義務（Organizational obligation）」。⑦自分の実益に関係なく、他人、社会に貢献するためにボランティア活動を行う「社会的義務（Social obligation）」。⑧スポーツに関心があるため、スポーツに関する活動ができる組織でボランティア活動を行う「スポーツ（Sport）」である。

松岡・小笠原（2002）はスポーツに関わる女性を支援しているNPO法人のボランティアを対象としていたが、車椅子マラソン大会のボランティアを対象とした松本（1999）の調査でも、「ボランティア」「自己成長」「技術習得・発揮」「レクリエーション」「社会参加」「他律参加」「報酬」「参加者交流支援」という同様の参加動機が確認されている。知的障

害者のスポーツ活動を支援するボランティアの参加動機については、田引（2005）は「社交」「個人的興味」「スポーツ」「社会的奉仕」「報酬」「選手支援」「組織的義務」「学習・経験」の 8 つの要素を見出しており、松本ら（2004）、田引（2008）もほぼ同様の結果を得ている。障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機には、障害種や活動の形態にかかわらず、共通している部分があるといえる。

また、参加動機と継続意欲と個人の属性などとの関連を検討することから、ボランティアの充足に繋がる示唆を得ることが試みられている。谷田（2001）は、福祉ボランティア活動をする大学生の参加の動機と継続の動機について分析し、大学生は、自らの学びや、視野・人間関係の広がり、活動のやりがい動機として強く、ボランティア活動を推進する立場の者は、これらの欲求を満たすことができるよう環境を整えることが重要であると述べている。スポーツ・ボランティアを対象とした調査では、長ヶ原ら（1991）が、日頃、自身もスポーツを実施している者ほどボランティア活動の継続意欲が高いことや、参加選手や大会運営に対する貢献、地域活性化に対する社会的関心よりも、ボランティア活動やスポーツそのものに対する興味といった個人的関心に基づく参加動機の方が、継続意欲をより強く規定していることを報告している。田引（2008）も、障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機と活動経験の関係性を検討し、当初利他的な動機であったものが活動を通してスポーツ活動を意識したものへと変容することを示唆し、新たにボランティアを開拓する場合と、すでに活動に参加している人に活動継続へのアプローチをする場合では、その視点や取り組み方に違った工夫が必要であることを示した。

松本ら（2004）は、スポーツ・ボランティアの参加動機と組織コミットメント（構成員の組織に対する同一性や関与の程度、ロイヤルティ、役割意識などの感覚）が継続意欲に影響を及ぼす要因であるとして、参加動機によって組織コミットメントが影響を受け、活動の継続意欲に影響を及ぼすことを明らかにしている。北村（2005）も、日常において定期的な活動を行うボランティアの組織コミットメントの視点から、組織マネジメントの基礎資料を得ることを試みており、継続年数や組織における役職などで組織コミットメントが異なることや、組織に対して強い愛着がある一方で活動に対する不満も抱いている現状があることなどの知見を得ている。

ボランティアのドロップアウトについては、Weiss and Sisley（1984）が、青年スポーツ組織の直面している主要な問題のひとつとして指導者の高い離脱率を挙げ、そこから年間を通じての継続的指導ができていない点を問題として指摘している。松尾ら（1994）は、地域を基盤とするボランティア・スポーツ指導者 671 名を対象に、指導に伴う生活支障の実態とその関連領域について調査している。その結果、指導者は集団の継続化に伴いボランティアでありながら指導への過度な没頭が余儀なくされ、結果他の生活領域とのアンビバレントな関係を生起すること、内容としては家庭と職場での時間的減少、生活関係の限定化、金銭的負担の増大などが主であることを確認した。実に、およそ 3 割の指導者に生活における支障・葛藤が認められていたのである。

また、松尾（1996）は、福岡市とアメリカの Urbana-Champaign 市の少年スポーツのボランティア指導者を対象に、指導に伴う生活支障とその状況について比較検討している。その結果、両国の指導者はボランティア活動に対する意識役割観念において差異があるものの、両国の指導者ともに 35%以上が「生活支障がある」と回答しており、ボランティア指導者にとって生活支障が普遍的な問題であることが示唆された。

全国社会福祉協議会が実施した全国ボランティア活動実態調査（2010）でも、ボランティア活動を行う個人（n=2,288）の抱えている問題が浮き彫りになっている。ボランティア活動を行うにあたって困っていることについて、「特に困っていることはない」という回答者は 34.3%にとどまっていた。各項目については複数回答可であったが、「困っていることはない」という項目と、自らの困っていることに該当する項目のいずれにも回答することは考えにくいので、実に 6 割近くもの人が何らかの困りを抱えていると判断できる。困っていることについては、「活動と仕事、家事、学校等との時間調整が難しい」が 17.5%と最も多い回答であった。また、ボランティア活動中断、休止の意向についても、回答者の 27.9%がやめたいと思ったことがあるとしていた。その理由としては、最も多かったのが「健康上の理由や体力的な限界を感じた（34.3%）」で、次いで「学校や仕事が忙しくなった（20.3%）」、「期待や要請が大きくなって負担になった（19.6%）」となっていた（複数回答可）。健康上の理由が最も多かったことについては、回答者の属性を見ると実に 65.7%が 60 代以上となっており、50 代も 17.7%と、比較的高齢の回答者が多かったことが考えられる。注目すべきは、このように定年を迎える世代がほとんどであったにも関わらず、全体の約 2 割の回答者が「学校や仕事が忙しくなった」こと、「期待や要請が大きくて負担になった」ことを理由として挙げている点である。本来は自身の裁量によって、自発的に行われているはずのボランティア活動であるが、その実態は、私生活での役割との兼ね合いについて多くの困難を抱えながら活動しているのである。このことから、ボランティアがより負担なく継続的に活動できるよう、適切な働きかけをすることが求められると考える。

第二項 本論文におけるボランティア活動の定義

本論文で扱うボランティアの用語について定義をしておきたい。ボランティア活動の要素としては、一般に、自発性、公共性、無償性、先駆性が挙げられているが、佐々木（2003）はこれらを独立したものであって並列的なものではないとし、ボランティア活動を定義する際、日々の他の活動とのあり方の違いに着目して分類した（表 1-1）。先の四つの要素は一般的なボランティアという活動の理解を可能とするものではあるが、現在は、必ずしもボランティア活動の姿の全てを正確に表しているとは言い切れなくなってきた。ボランティアの担う役割の広がりに伴い、有償ボランティアという、金銭の享受が前提となっているボランティア活動の形態も出現してきているし、ボランティア組織のマンパワーの確保と企業の社会貢献・社員の研修という利害関係の合致で、企業が社員をボランティアとして派遣するということも珍しくはなくなっている。また、高等学校や大学でもボランティア活動への参加によって単位を認定されるようになっている。これらのことからすると、ボランティア活動は従来の枠組みでは捉えきれない一面を見せ始めており、また、氾濫が生じているとすればボランティア活動としての選別も行わなければならないといえる。

例えば、高齢者・視覚障害者などの個人が、買い物の付き添いを地域のボランティアネットワークに依頼するという場合や、一度好ましいサポートをしてもらったボランティアに対し、個人的に（地域のボランティアネットワーク等を通さずに）ボランティア依頼をする場合も考えられる。これは極めて私益的と捉えられるが、ボランティアに対し高額な報酬が用意されていなければ、依頼を承諾した時点で、自発的に特別なニーズがある人に対するサポートを望んでするのであるから、ボランティア活動として捉えることができるだろう。どのネットワークも介さずに個人的にボランティア依頼をするというケースは、特に障害者と接触するボランティア活動の場合多くみられるのではないだろうか。ボランティアを必要とする側とボランティア本人との相性の問題は必ずついてまわるので、1度好ましいサポートをしてもらった相手に、本人またはその保護者が再度同じボランティアを希望したいと思うことは容易に想像できる。

逆に、いくら自発性に基づくものであっても、すでに社会制度によって十分に賄われていること（犯罪容疑者の捜索など）や、個人的な偏った価値観に基づいており重要性・必要性を認められない活動、公序良俗からしてそぐわない活動までもボランティア活動とするのは不適切であると考える。また、高額な報酬が前提となっている活動も、ボランティア本人が活動内容に共感し、意義を見出すことからくる自発性は損なわれる危険性があるので、除外される。ただし、報酬の享受があるものを全てボランティア活動とみなさないというわけではない。たとえば、遠方地にてイベントを開催する場合や、終日または数日にわたってボランティアを必要とするといった時間的な拘束が長い場合などは、ボランティア参加に伴う必要経費に対しまったくの補助がないことによってボランティアの確保を困難とする可能性があり、活動を維持する上で現実的ではない。また、ボランティア本人

は想定していなくとも、ボランティアを利用した本人から感謝のしるしとして金品が渡されることもあるし、金銭的な報酬以外にボランティア組織の公式グッズや大会の記念品などが渡されることもある。交通費や昼食といった報酬が生じたものを一切ボランティア活動と認めないというのでは、あまりに乱暴であり、フレキシビリティに富んでいるというボランティア活動の最大の長所を失うことにもなりかねない。よって、これらの事柄を考慮し、本論文では以下の条件を満たす活動を『ボランティア活動』とし、論じていくこととする。

①金銭的な利益を生み出すことを目的としていない活動であること。

②活動内容が公益性もしくは私益性をもつもので、同時に、現行の社会制度では十分に配慮されない人のニーズの充足や、問題への対策が不十分である現象の改善・解消を目的としていること。

③参加者への報酬の享受を義務としておらず、報酬が発生したとしても、交通費や弁当代などの活動参加に付随して生じた直接的な経費の補填や、社会通念からすると労働への対価としては著しく低い程度の謝礼であること。

表 1-1 活動の分類(佐々木,2003. 25 頁より引用)

	自発的	非自発的
私的	趣味・遊び	家事労働・仕事
公共的	ボランティア	仕事・公的な義務

第二章 目的

生活の質を高めるには余暇活動の充実が重要であり、余暇の過ごし方としては各人の自由意思によって、自己選択・自己決定されることが望ましい。しかし、知的障害者にとってはスポーツ活動を積極的に選択し参加する機会に恵まれていない現状にある。知的障害者にとってスポーツ活動は、余暇の充実だけではなく肥満対策や健康の維持としての意義もあり、重要な活動であるため、知的障害者のスポーツ活動への参加を妨げる様々な要因を解消すべくボランティアが活躍している、いわば知的障害者のスポーツ活動はボランティアによって支えられているという現状にある。ボランティアとして知的障害者に関わることは、ボランティア側にとっても様々なポジティブな影響を与えることが報告されていることから、知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの安定供給が可能となることは、知的障害者・ボランティア双方にメリットを生じさせるといえる。

しかし、スポーツ活動のボランティア指導者については参加動機や継続参加を規定する要因についての調査は多くされてきたが、ボランティアが活動の際生じさせる負担感の構造について具体的な検討はされてこなかった。ボランティアの継続的な参加を期待するには、なぜ参加したいのか・継続できている理由は何かというポジティブな要因を明らかにすると同時に、どのような困難が生じているのかということも把握し、それを解消することも必要と考える。

また、ひとえに「ボランティア」といっても、知的障害者のスポーツ活動場面であるため、当然人間と人間の相互作用がある。参加動機、継続参加の要因、離脱の要因などひとつの現象をみることのみ、さらに言えばボランティア本人の意識や参加実態を理解するのみでは、実際にどうすればよい方向に向かうのかが、みえてくるようには思えない。ボランティアの充足を可能とするためには、知的障害者やその保護者という、ボランティアと関わる人物との相互作用についても、複合的かつ同時に検討をしていく方が、より現実への適合性という点からみても合理的であろう。

ボランティアというひとつの人物、またボランティア本人の意識や経験効果といったひとつの現象を対象とするのではなく、ボランティアの活動場面におけるボランティア本人と関係する人々との間に生じている相互作用を俯瞰的にみる姿勢が必要であると考えられる。つまり、ボランティアを取り巻く環境を『ボランティア環境』と認識し、ボランティア環境におけるボランティア本人の存在、意識はその構成要素のひとつであると捉えるのである。

このボランティア環境という概念の重要性は、具体的に知的障害者のスポーツ活動における、ボランティア、知的障害者本人、知的障害者の保護者の三者の依存関係を考えると、より浮き彫りになるだろう（図 2-1）。前述したように現在はボランティアのサポートがなければ、知的障害者本人が参加したくても、保護者が参加させたくてもスポーツ活動に取り組むことが困難であることから、知的障害者のスポーツ活動に関することへのボランティアの合意が必要である。一方、仮にボランティアの人数が十分であり、保護者がいくら参加を希望しても、実際に活動をする知的障害者本人が参加を動機づけられていない場合

は、スポーツ活動への接続は当然うまくいかない。参加を希望しない活動に半ば強制的に接続させたとしても、楽しみを見出すことは難しいことが容易に予測されるし、それでは生活の質の向上という余暇活動の意義の根幹をなす部分が見失われてしまうことになる。スポーツ活動をただ実施するのではなく、知的障害者本人のニーズも尊重し、楽しみを見出せるような、魅力的な活動内容が求められる。

また、ボランティアの人数が十分で、知的障害者本人が強く参加を希望していたとしても、保護者にとって魅力的な活動と認識されない場合、やはりうまくいかないだろう。知的障害者がスポーツ活動に参加したいと考えた時、「活動先を見つける」「用具などの準備をする」「(参加費が必要な場合) 参加費を支払う」「会場に向かう」「会場から帰る」といったことを、全て自分ひとりで達成できるケースは決して多くないことが推測される。特に障害の程度が重いほど、年齢が低いほど、その困難性は増す。石黒ら(1999)は、知的障害者の保護者を対象に、知的障害者の余暇生活行動について調査を行ったが、兄弟や祖父母が同居していてもほぼ母親としか関わりがないケースが確認されており、その場合単独行動が可能でない限り必然的に母親への負担が大きくなっている可能性が指摘されている。また、送迎が必要な場合は、母親の体調によって参加不参加が決定してしまうことも報告されており、家庭環境も余暇活動行動を規定する一要因であることが示されている。やはり、多くは保護者による引率や、金銭面の援助が必要不可欠となる場合が多く、スポーツ活動に対する保護者のニーズも決して無視することはできないのである。

これらのことから鑑みるに、現状として、知的障害者が誰でもスポーツ活動を楽しめるようになるためにはボランティアの支援が必要だが、そのボランティアの充足を目指すには、ボランティアの参加形態、参加に関わる意識についてのみならず、それらを包含するボランティア環境全体についての検討が必要であるといえるのではないだろうか。

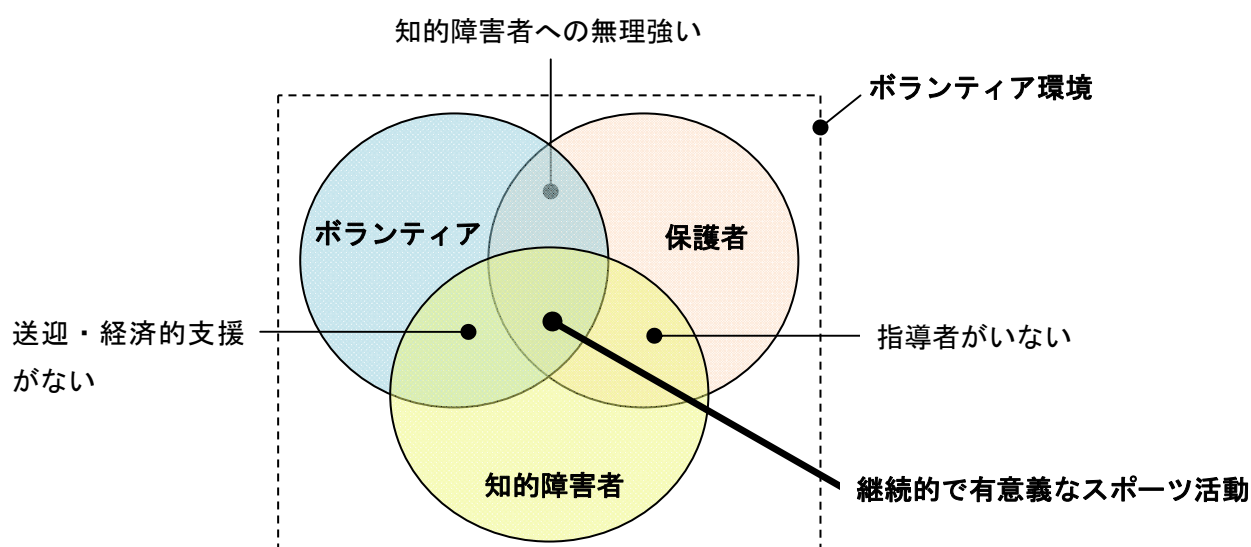


図 2-1 ボランティア・保護者・知的障害者の三者の依存関係

本研究は、知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの負担感の構造やボランティアの参加実態、知的障害者・保護者のニーズについて把握し、総合的な考察を行うことから、ボランティア環境の向上につながる示唆を得ることを目的とする。

目的達成のために具体的には、①ボランティアの負担感の構造について分析を試み、②ボランティアの参加実態と継続参加プロセスについて検討するとともに、ボランティアに対する③保護者の意識、及び、④知的障害者本人の意識についてそれぞれ明らかにする（図2-2）。

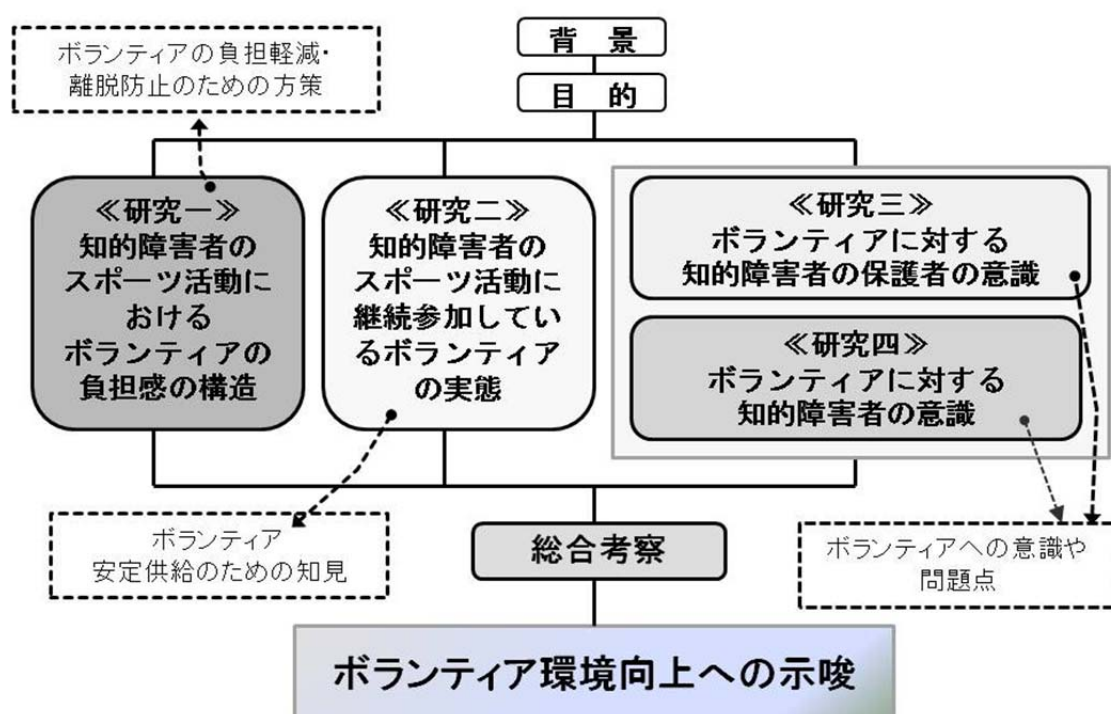


図 2-2 研究デザイン

第三章 研究一

知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの 負担感の構造と活動継続の意思

第一節 目的

知的障害者は、これまで身体障害者スポーツに比べて目を向けられてこなかったという社会的な背景と、それによる制度の不備からくる経済的要因・物的環境要因・人的環境要因によってスポーツ活動への参加が阻害され、余暇活動としてスポーツ活動を積極的に選択することが難しい状況に置かれている。このような背景から、知的障害者のスポーツ活動は、これまで国によってではなく、日本知的障害者スポーツ連盟やスペシャルオリンピックス日本などの民間・非営利活動組織によって支えられてきた（渡邊,2006）。言うなれば、知的障害者のスポーツ活動を普及させたい発展させたいと願う、保護者やボランティアの力によって活動が展開されてきたのである。

近年、地域のスポーツクラブや団体におけるボランティアの重要性が取りざたされており、我が国の代表的なスポーツ組織・団体の半数がボランティアを活用している現状がある（仲澤, 2002）という。ボランティアはスポーツ組織において人的資源として重要な役割を担っており（松岡・小笠原,2002）、ボランティアが果たすことのできる役割は大きく幅の広い活躍が期待されている（野村,2002）。

しかし、ボランティアによって支えられている活動は、活動を続けていく上で十分なだけのボランティアを確保できなければ運営の基盤が大きく揺らいでしまう。VanYperen（1998）が指摘するように、ボランティアの活動からの離脱やそれによる新たなボランティアの勧誘は課題となっており、それらを解消するためにはボランティアと組織の関係を多角的にとらえ、知見を蓄積させる必要がある（北村ら,2005）。これらのことから、スポーツ活動に参加するボランティア指導者が置かれている環境をよりよいものにするためには、ボランティアの実態について把握する必要があるといえる。

ボランティアがよりの実態として、参加動機や継続意欲はスポーツ組織がマネジメントを行う際に欠かすことのできない、重要な視点であるといえ、松本ら（2004）は、障害者スポーツ団体を支えるボランティアを対象とした参加動機と活動継続意欲との関連について検証し、参加動機に応じた適切な教育プログラムの重要性を説いた。また、田引は、参加動機がボランティア参加による満足度に一定の影響を与えていることを明らかにし（2005）、スポーツボランティア活動への参加動機と活動経験にも一定の関係性があることを報告した（2008）。さらに長ヶ原（1991）は、地域スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続意欲を規定する要因に言及し、社会的な関心よりも、ボランティア活動そのものやスポーツへの興味といった、個人的関心に基づく参加動機の方がより継続意欲が高いことを報告した。

このように、スポーツ活動に参加するボランティアの、参加動機や継続意欲といったポジティブな側面についてはこれまで多く研究されてきたが、活動場面における具体的な「負担感」についての研究は進められてこなかった。Weiss,et al.（1984）が、指導者としての役割と生活領域での役割における葛藤が原因でボランティア指導者の離脱が増加していることを報告し、松尾ら（1994）は集団の継続化に伴いボランティアでありながら指導への

過度な没頭が余儀なくされ、結果他の生活領域とのアンビバレントな関係を生起することを報告したが、いずれも、直接のボランティア活動の場面において、具体的にどのような事象が負担感を生じさせているのかについては言及されていない。

ボランティアの参加動機を尊重し、継続意欲を促進しようとすることは重要だが、同時に、離脱につながるような要因を把握し事前に解消するという、離脱回避の視点も求められるのではないだろうか。

よって本研究は、知的障害者にスポーツ指導をしているボランティアが抱える負担感の構造について分析し、ボランティアの参加実態について検討することを目的とする。

第二節 方法

第一項 方法と調査対象

知的障害者にスポーツ活動を提供する「スペシャルオリンピックス（以下 SO）」において、主にスポーツ指導をしているボランティアを対象として質問紙調査を行った。SO は知的障害者に日常的なスポーツプログラムと、その成果の発表の場である競技会を年間を通じて提供する国際的な非営利活動組織である。回答の妥当性を考慮し、対象者を、SO 活動の本部組織である SO 日本に登録されているスポーツ指導ボランティアに限定した。

対象者については、質問紙の内容が直接的なスポーツ指導に関するものであるため、事務作業や広報活動といった直接的なスポーツ指導を行わないボランティアは除外した。また、SO 日本に登録しているスポーツ指導をおこなうボランティアが 25 名以上確認できる地区組織を通じて、当該地区のスポーツ指導ボランティアに配布した。SO 活動は 47 都道府県にて展開されているが、活動年数や規模、適正なスポーツプログラムを提供できるかどうかといった信頼性などから、「地区組織」と「設立準備委員会」とに分けられている。「設立準備委員会」は SO の名称を使用できるが、正式な地区組織としてはまだ認められる段階にないことを示しているため、提供される日常のスポーツ活動の運営においてより信頼のおける「地区組織」を対象とした。また、ボランティアが、SO 公認のスポーツ指導者として登録するためには、SO 活動の理念や使命、知的障害についての基本的な知識、当該地域において開催される競技のルールや指導方法についての講義を受けることが前提となっている。これら全ての受講が完了した後、最低でも、1 回 2 時間のスポーツプログラムに、5 回以上スポーツ指導者としての参加が求められ、全てを満了したボランティアのみが、SO 日本に登録できるシステムがある。知的障害やスポーツ指導者についての知識・経験が、ある程度保証されているボランティア数が多い方が、より適切なスポーツ指導が行われていることが予想されたため、SO 日本への登録しているスポーツ指導ボランティアの人数も、条件に加えた。

調査期間は 2009 年 7 月 17 日から 8 月 31 日まで。配布総数 980 部、回収数は 437（回収率 44.6%）であった。

第二項 調査内容

調査内容に関しては、大きく、①基礎項目、②参加動機について、③負担感を生じさせる要因について、④活動継続の意思について、の4つを設定した。

①基礎項目は、性別、年代、職業、SO 以外でのボランティア頻度、SO での活動経験、現在のスポーツ活動状況、これまでのスポーツ活動状況、SO 以外での障害者の存在、SO における役職経験の有無であった。

SO での活動経験については、「1 年未満」「1 年以上 3 年未満」「3 年以上 5 年未満」「5 年以上 7 年未満」「7 年以上 10 年未満」「10 年以上」の選択肢の中から回答を得た。SO 日本の活動が今年で 15 周年であり、地区組織として 10 年以上活動を展開している地区が少ないので、最も経験の長い選択肢が「10 年以上」であっても不都合は生じないと判断し設定した。

職業が「学生」と回答した者のみ、現在通っている学校の種別、学年、専門として学んでいる内容、将来就きたい職と SO 活動との関連性について質問項目を設定した。一方、社会人に対しては、現在の職、最終学歴、現在または過去に SO の活動内容と関連した職に就いたことがあるかどうかについてもうかがった。

②参加動機については、29 項目の選択肢を設定し、考えと近いものから順に最大 3 つまで選んでもらい回答を得た。この項目は、松本（2004）、田引（2005,2008）など、ボランティアの参加動機に関する先行研究を参考にし、設定した。

③負担に感じる要因については、ボランティアとしてスポーツ指導を行う際に負担感が生じる要因について 26 の質問項目を設定し、各質問項目ごとに「とても負担に感じる (5)」「負担に感じる (4)」「どちらともいえない (3)」「負担に感じない (2)」「まったく負担に感じない (1)」の 5 件法で評価をしてもらった。

④活動継続の意思については、過去に辞めたいと思ったことがあるかどうか、継続参加している理由はなにか、もし転居した場合の参加意思はどうか、について質問した。

なお、SO においては、知的障害者を「アスリート」、保護者を「ファミリー」と呼称するのが一般的であり、回答者の答えやすさを考慮し、質問紙においては上記の表現を用いている。実際の質問紙は資料の通りである。

第三項 分析

知的障害者のスポーツ活動に継続的に参加するボランティアの負担感が生じる事象について 26 項目について因子分析を行った。そこで算出された因子得点にもとづき、クラスター分析を行い、回答者の類型化を行った。さらに、得られたクラスターについて回答者の属性との関係性について検討を行った。手順・手法については松本（1999）を参考とした。

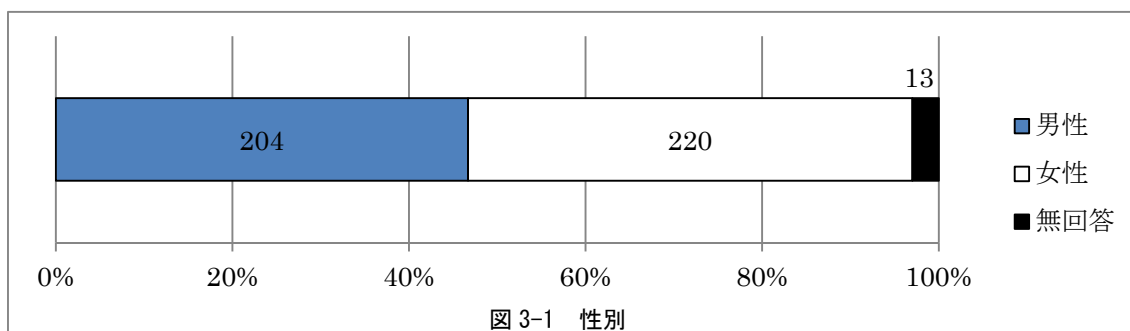
調査内容及び質問項目については事前に SO 日本による確認の上、実施の了解を得ている。また、質問紙への回答については、プライバシー保護の観点から個人が特定されないよう配慮すること、得られた回答は研究以外の目的で使用しないことについても明記し、回答者に協力の意思を確認の上調査が実施された。

なお、分析は全て SPSS 16.0J for Windows を用いて行った。

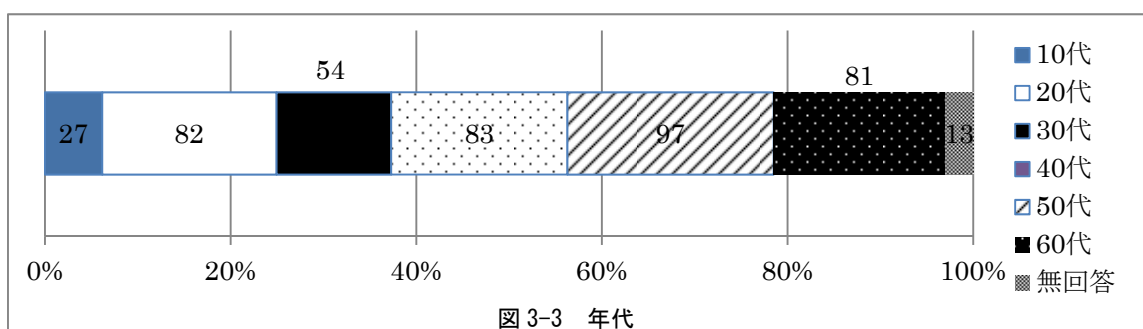
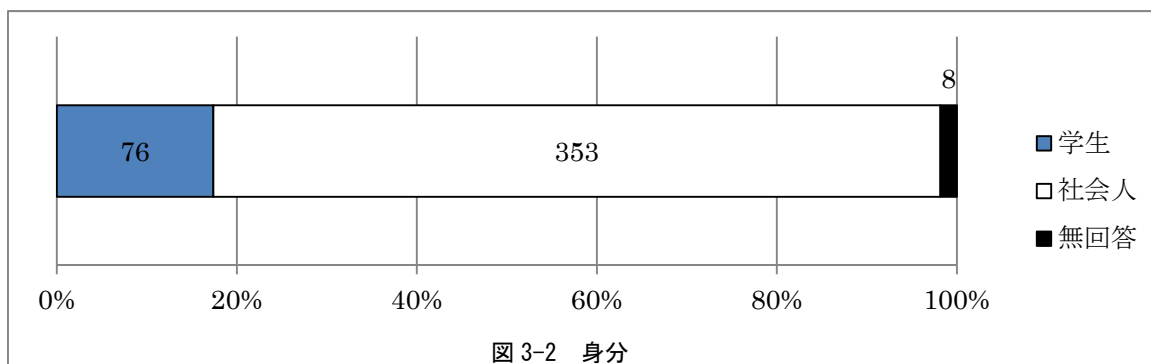
第三節 結果

第一項 回答者の属性

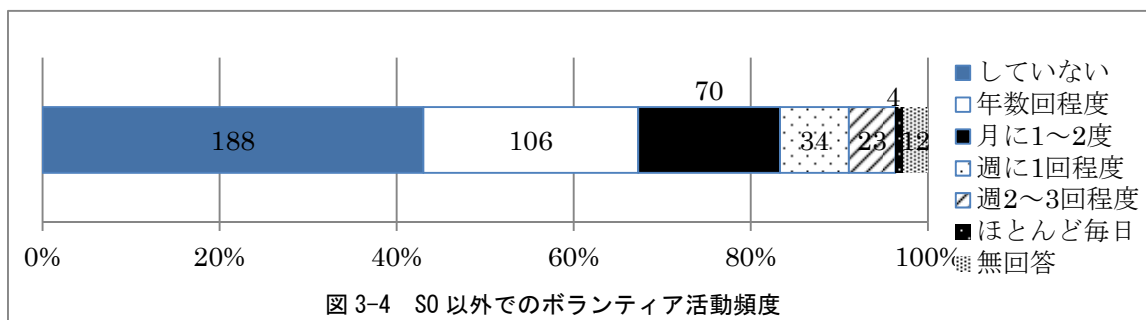
性別に関しては、学生でみると女性の割合が高かったが、全体でみると男性女性が半々であった。



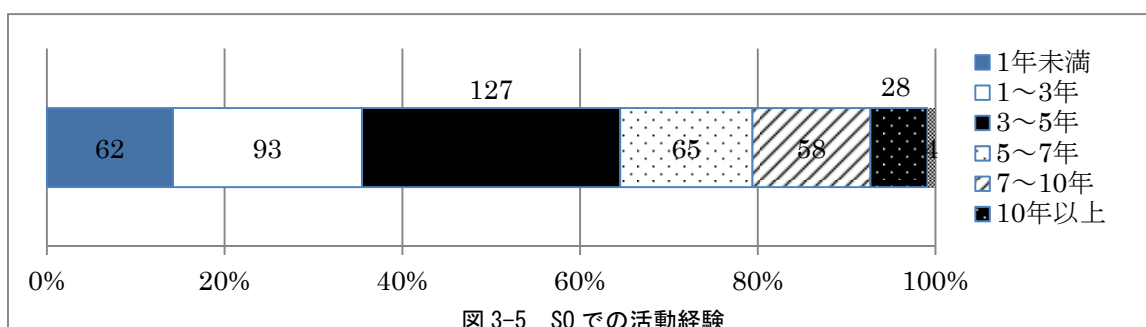
身分に関する質問として「学生」と「社会人」の選択肢を設定し、回答を得た。ここでいう「学生」とは学業のみに専念しているものとし、働きながら通信制や定時制の学校に在籍しているというものは除くこととした。また、「社会人」の中には定年退職者も含んだ。身分ごとの年代をみると、学生は 50 代に 1 名存在した以外は 10 代と 20 代で占められており、社会人は 50・60 代以上が半数を占めていた。10 代の参加は学生のみであった。



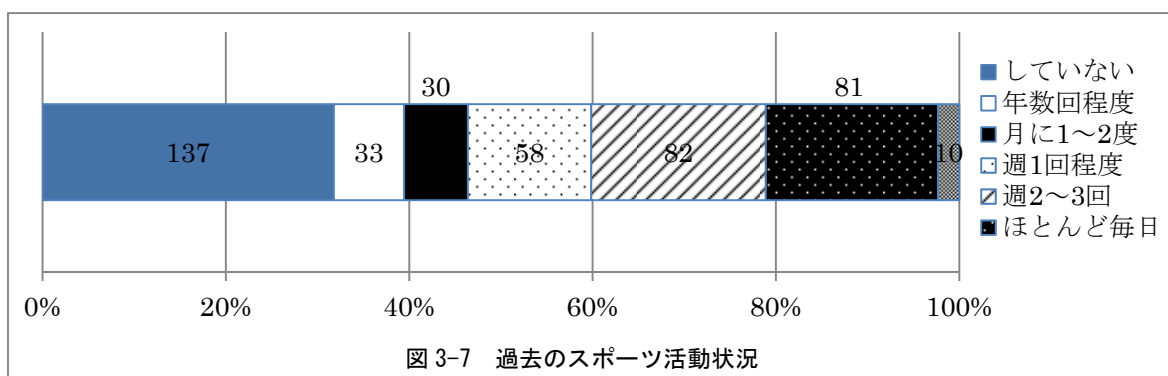
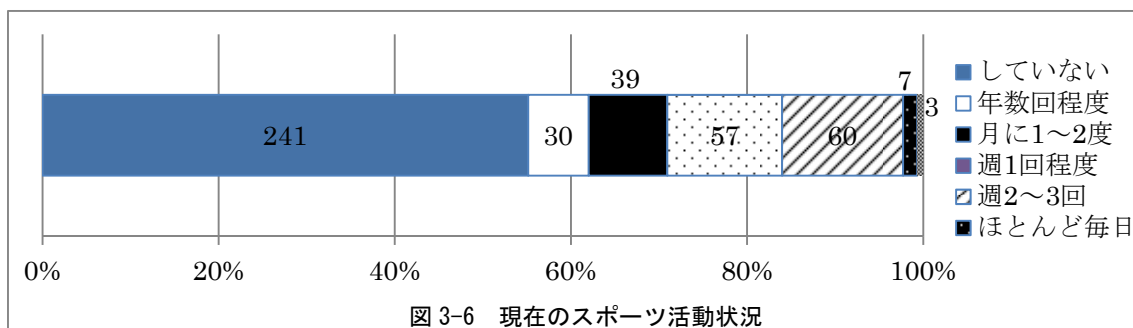
SO 以外のボランティア活動頻度について、「していない」「年数回程度」「月に1～2度」「週に1回程度」「週に2～3回程度」「ほとんど毎日」の中から回答を得た。活動頻度が高くなる選択肢ほど回答者の割合も少なくなっており、全体の6割ほどは、SO 以外にも何らかのボランティア活動に参加していることが確認できた。



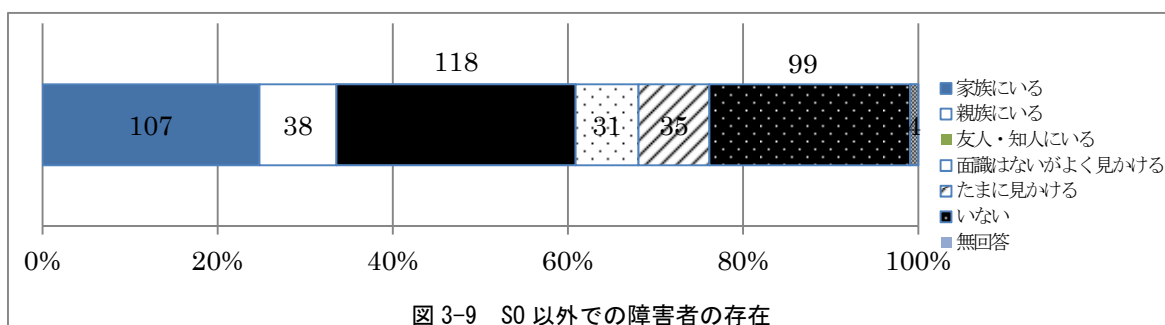
SO での活動経験については、「1 年未満」「1 年以上 3 年未満」「3 年以上 5 年未満」「5 年以上 7 年未満」「7 年以上 10 年未満」「10 年以上」の選択肢の中から回答を得た。3 年以上 5 年未満が最も多く、次いで 1 年以上 3 年未満が多かった。



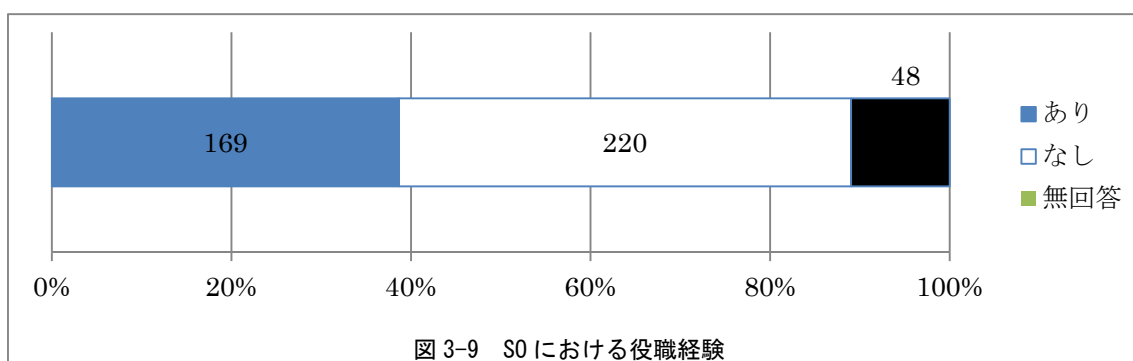
現在、自身が競技者としてスポーツをしているかどうかについて、「していない」「年数回程度」「月に1～2度」「週に1回程度」「週に2～3回程度」「ほとんど毎日」の中から回答を得た。「コーチ」というスポーツ指導しているボランティアではあるが、回答者の約半数は、現在、自身はスポーツをしていないという結果であった。また、過去のスポーツ経験についても、「していない」「年数回程度」「月に1～2度」「週に1回程度」「週に2～3回程度」「ほとんど毎日」の選択肢の中から回答を得た結果、全体の傾向としては、約3割の回答者が現在までスポーツを「していない」と回答していた。



SO 以外で障害者が存在するかどうかについて、「家族にいる」「親族にいる」「友人・知人にいる」「面識はないがよく見かける」「たまに見かける」「いない」の選択肢から回答を得た。全体の傾向としては、「家族にいる」「友人・知人にいる」「いない」がそれぞれ 2 割程度ずつ存在しており、全体の 6 割が直接かかわりのあるレベル（家族、親族、友人・知人）に障害者が存在していた。



現在もしくは過去に SO で何らかの責任者などの役職に就いたことがあるかどうかについて、「県組織単位での責任者（県の SP 委員長、県のボランティア委員長など）」「支部・地域単位における責任者（支部の SP 委員長、支部のボランティア委員長など）」「県単位でのイベント・競技会における責任者」「支部・地域単位でのイベント・競技会における責任者」「各スポーツプログラムの主任コーチ」「その他の役職」「ない」の 7 つの選択肢から回答を得た。しかし、各地区組織によって同じ役職名でも担っている役割がまったく違ったり、当該地区独自の役職があったりと、役職ごとで分類すること不適當であると考えられたので、役職経験が「ある群」「ない群」で大きくまとめた。結果、全体の約半数が何らかの役職経験があることがわかった。



第二項 負担感の構造の分析

ボランティアとして活動を継続するにあたり過剰に負担に感じることにについて、26 項目質問を設定し、「とても負担に感じる (5)」「負担に感じる (4)」「どちらともいえない (3)」「負担に感じない (2)」「まったく負担に感じない (1)」の 5 件法で回答を得た。

負荷の高い因子を探るために因子分析（主因子法、Equamax 回転）を行った。因子は固有値 1 以上のものを抽出し、下位項目の因子負荷量が 0.4 に満たない 6 項目（「日ごろ仲の良い友人が SO には参加していないこと」「SO の場以外での SO メンバーとの付き合い」「会員登録や参加登録などの事務的な手続き」「仕事が与えられないこと」「自分の好みの異性が SO に参加していない」「日常生活での立場関係が SO においてももちこまれること」）を除外し、再度因子分析（主因子法、Equamax 回転）を行ったところ、5 つの因子が抽出された。Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性 0.880、Bartlett の球面性測定 $p < 0.001$ であり、因子分析を行うことが適当であると判断できた。各質問項目の最終的に得られた因子負荷量、因子寄与、累積寄与率に関しては表 3-1 のとおりである。

表 3-1 因子分析の結果

質問項目	Factor I	Factor II	Factor III	Factor IV	Factor V
≪第1因子: 人間関係≫					
ファミリーとの人間関係	0.817	0.182	0.135	0.088	0.261
自分以外の人同士の人間関係	0.617	0.229	0.167	0.119	0.228
他のボランティアとの人間関係	0.571	0.111	0.230	0.162	0.221
アスリートとの人間関係	0.550	0.028	0.206	0.109	0.186
≪第2因子: 理念からのかい離≫					
SO の理念から外れている意見がまかりとおること	0.058	0.844	0.024	0.022	0.192
アスリート本位ではない意見が採用されること	0.110	0.805	0.065	0.023	0.250
≪第3因子: コーチング課題≫					
プログラムでの実際のコーチング	0.294	-0.074	0.521	0.179	0.267
他のコーチとの熱意に差があること	0.288	0.190	0.488	0.361	0.093
プログラムで行われているスポーツが不得意であること	0.160	0.090	0.474	0.153	0.096
プログラムの企画・運営	0.158	0.027	0.474	0.171	0.338
実際のコーチング側と企画・運営側の認識にずれがあること	0.200	0.379	0.461	0.118	0.113
自分の時間がとれないこと	0.221	0.239	0.446	0.220	0.123
他のコーチとの作業量に差があること	0.187	0.362	0.437	0.281	0.167
義務・半強制的な空気があること	0.211	0.325	0.437	0.236	0.171
≪第4因子: 参加コスト≫					
プログラム参加に付随する経費(ガソリン代や昼食代など)	0.055	0.143	0.072	0.881	0.097
プログラム参加自体の経費(会場利用料など)	0.078	0.142	0.103	0.675	0.227
プログラム会場への移動	0.099	-0.106	0.177	0.469	0.041
≪第5因子: 責務≫					
怪我などのアスリートの安全に責任を負うこと	0.135	0.199	0.037	0.139	0.771
参加者の個人情報管理すること	0.260	0.248	0.055	0.120	0.574
社会性や競技能力などアスリートの成長に対する責任を負うこと	0.240	0.239	0.290	0.098	0.528
Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性0.880、Bartlettの球面性測定 $p < 0.001$					

次に、この 5 つの因子について尺度としての信頼性の検討を行った。第 1 因子から第 5 因子までそれぞれ Cronbach の α 係数を算出したところ、第 1 因子 0.821、第 2 因子 0.880、第 3 因子 0.817、第 4 因子 0.730、第 5 因子 0.744 であった。これによってこの尺度について一定の信頼性が示されたといえる。

第 1 因子は、「ファミリーとの人間関係」「自分以外の人同士の人間関係」「他の学生ボランティアとの人間関係」「アスリートとの人間関係」といった、主に人間関係にかかわる項目について負担感が生じていると考えられるので、因子名を「人間関係」とした。

第 2 因子は、「SO の理念から外れている意見がまかりとおること」「アスリート本位でない意見がまかりとおること」といった、SO 活動の本来の性質とは異なる現象が生じることについて負担感が生じる因子と判断できるので、「理念からのかい離」と命名した。

第 3 因子は、「プログラムでの実際のコーチング」「他のコーチとの熱意に差があること」「プログラムで行われているスポーツが不得意であること」「プログラムの企画・運営」「実際のコーチング側と企画・運営側での認識にずれがあること」「自分の時間が取れないこと」「他のコーチとの作業量に差があること」「義務、半強制的な空気があること」などの、コーチという実際にスポーツ指導にあたる立場として、活動内容そのものや置かれている状況に負担感が生じていると考えられるので、「コーチング課題」と命名した。

第 4 因子は、「プログラム参加に付随する経費（ガソリン代や昼食代）」「プログラム参加自体の経費（会場利用料など）」「プログラム会場への移動」といった、コーチとして参加する際付随的に発生するコストに対して負担感が生じていることから「参加コスト」と命名した。

第 5 因子は、「怪我などのアスリートの安全に責任を負うこと」「社会性や競技能力などアスリートの成長に対する責任を負うこと」「参加者の個人情報管理すること」といった、活動に参加する上で考慮することが要求される義務・責任について負担感が生じていると判断できるので、「責務」とした。

第三項 負担感と活動継続意思との関係性

次に、因子分析によって得られた「人間関係」「理念からのかい離」「コーチング課題」「参加コスト」「責務」の因子得点（回帰法）を用いて、グループ内平均連結法によるクラスター分析を行ったところ、3つのクラスターを得た。第1クラスターには92名、第2クラスターには135名、第3クラスターには141名の調査対象者が含まれていた。 χ^2 検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りがみられた（ $\chi^2=11.647$, $df=2$, $p<.01$ ）。

次に、得られた3つのクラスターを独立変数、「人間関係」「理念からのかい離」「コーチング課題」「参加コスト」「責務」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「人間関係」： $F(2,365)=108.528$ 、「理念からのかい離」： $F(2,365)=84.924$ 、「コーチング課題」： $F(2,365)=32.109$ 、「責務」： $F(2,365)=16.971$ で0.1%水準、「参加コスト」： $F(2,365)=5.199$ で1%水準の有意な群間差が確認された。

続いて Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行った。その結果は図 3-10 のとおりであった。

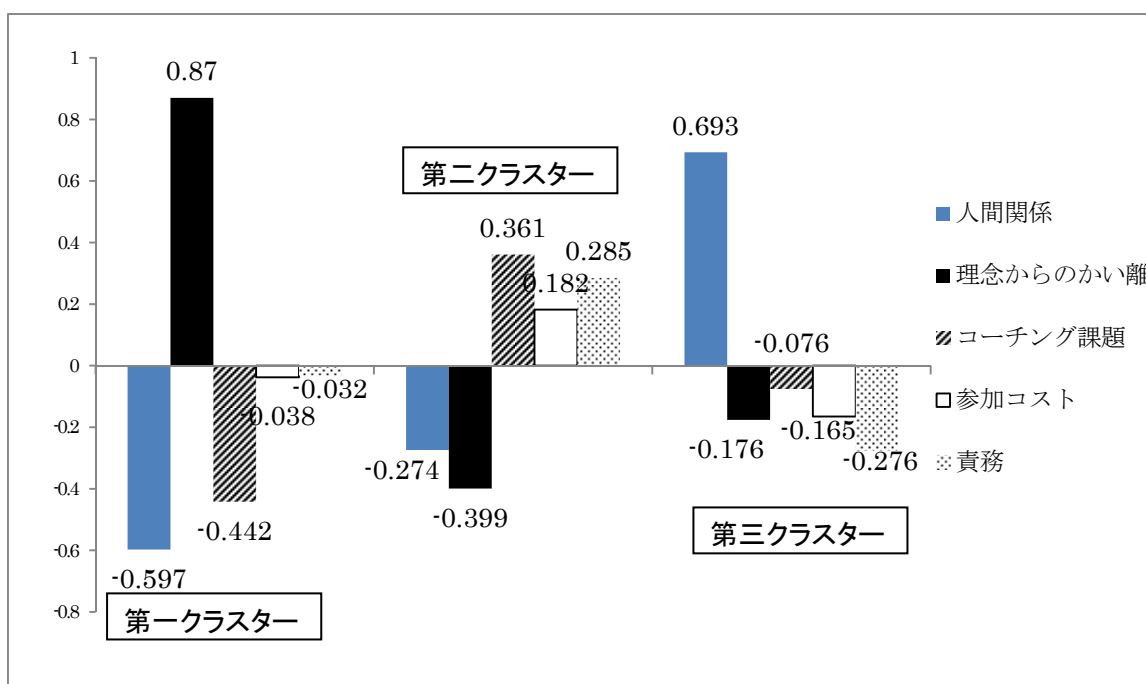


図 3-10 各クラスターの因子得点

第1クラスターは、「理念からのかい離」が高く、「人間関係」「コーチング課題」「参加コスト」「責務」は低かった。人間関係や活動参加によって生じる経済的・時間的経費には負担を感じず、本来の活動の趣旨とは違ったことが生じることに負担を感じているので、「理念不徹底負担優位型」とした（92人, 25.0%）。

第2クラスターは「コーチング課題」「参加コスト」「責務」において高く、「人間関係」「理念からのかい離」は低かった。実務における経費や活動場面で生じる様々な課題につ

いて負担に感じているので、「直接活動負担優位型」と解釈できる（135人, 36.7%）。

第3クラスターは、「人間関係」が高く、「理念からのかい離」「コーチング課題」「参加コスト」「責務」が低かった。ボランティアとしての責任や組織の方向性、参加の際の様々な制約よりも、人間関係に負担を感じていることから「対人関係負担優位型」と解釈できる（141人, 38.3%）。

これら3つのクラスターと、回答者の属性との関係性を確認するために、クロス表を作成し、 χ^2 検定を行った。結果、第一項で提示した9項目すべてにおいて有意な関係性は確認できなかった。

次に、活動継続の意思とクラスターとの関係性について同様の検討を行った。活動継続の意思については、以下の3つの質問を設定し、回答を得た。①辞めたいと思ったことがあるか（ある／ない／わからない）、②活動の継続理由（続けたいから：積極的理由／辞められないから：消極的理由／積極・消極両方）、③転居後の活動への参加（現在参加している場所に引き続き参加する／新しい場所の活動に参加する／住んでいる場所から近い方に参加する／参加するつもりはない／わからない）。

結果、「活動の継続理由」との間において有意な関係性が確認できた（ $\chi^2=10.080, df=4, p<.05$ ）（表3-2）。度数を見ると、理念不徹底負担優位型に比べ、直接活動負担優位型・対人関係負担優位型の方が、「辞められない：消極的理由」を含む回答者の割合が高かった。このことから、直接活動に関わる負担、対人関係に関わる負担は、理念が徹底されていないという負担よりも、より消極的な参加の意思にさせる可能性が示唆された。

表3-2 クラスターと継続理由とのクロス表

	継続理由			
	積極(続けたい)	消極(辞められない)	両方	合計
理念不徹底負担優位型	71 (77.2%)	3 (3.3%)	18 (19.6%)	92 (100%)
直接活動負担優位型	82 (59.0%)	12 (8.6%)	45 (32.4%)	139 (100%)
対人関係負担優位型	81 (60.4%)	8 (6.0%)	45 (33.6%)	134 (100%)
合計	234 (64.1%)	23 (6.3%)	108 (29.6%)	365 (100%)

第四節 考察

本研究では、知的障害者のスポーツ活動に参加するボランティアを対象に質問紙調査を行い、負担感の構造の分析と、それらをもとにしたボランティアの類型化を試みた。その主な結果は以下のとおりであった。

①回答者の傾向としては、4割以上が50代以上であり、若年層、特に学生の割合は少ないことがうかがえた。また、長経験年数が長い回答者ほど少ないこと、必ずしもスポーツ活動の経験が豊富なものばかりではないこと、回答者の4割が当該組織における役職経験者があることなどが確認された。

②知的障害者のスポーツ活動に継続的に参加するボランティアが、活動の際に負担感が生じる要因として「人間関係」「理念からのかい離」「コーチング課題」「参加コスト」「責務」の5つの因子を確認した。

③負担感要因の因子得点を用いてクラスター分析を行った結果、3つのクラスターを得ることができ、クラスターごとの因子得点より「理念不徹底負担優位型（92人, 25.0%）」「直接活動負担優位型（135人, 36.7%）」「対人関係負担優位型（141人, 38.3%）」と解釈できた。

④過去に辞めたいと思ったことが「ある」群においてはその半数以上が「実働負担優位型」であり、活動継続理由においても、「消極的理由（辞められない）」と「積極・消極両方」という消極的理由が含まれる群においては、いずれも「実働負担優位型」の割合が半数以上を占めていた。「実働負担」がボランティアの参加継続を最も阻害する要因である可能性が示唆された。

回答者の属性に関しては、男女に大きな差はなかったものの、学生と社会人で見たときに学生の割合が少ない傾向にあった。Weiss and Sisley. (1984) が、青年スポーツ活動において、管理者が直面する主要な課題はどのように若手のコーチを確保するかであると述べているように、若年層のボランティアは少ない現状が確認された。また、回答者のおよそ半数が50代以上であり、これは社会福祉協議会（2010）の報告と類似している。ボランティア活動に参加する人は比較的年齢層の高い場合が多いことが推測される。また、活動経験年数においては経験の長いものほど回答者が少ない結果であったが、これはSO日本は1994年に発足し、2010年現在で活動16年目であり、地区組織として10年以上活動を展開している地区が少ないことが関係していると考えられる。また、SO活動が日本で開始された初期の頃は、各地区組織内のボランティアの絶対数が少なかったことや、各地域において活動開始時期にもずれがあるため、活動経験が長いボランティアが少ないことが考えられた。また、約3割の回答者が現在までスポーツを「していない」と回答していた点については、松尾（2002）の指摘する、スポーツボランティアは、スポーツの専門性を確保することより、ボランティアでおこなうこと自体が重要であると強調される風潮が関係しているものと推測される。スポーツの経験がないスポーツ指導者というのは一見成り立たないように思えるが、様々な競技能力のアスリートが参加するSOでは、競技能力のあまり

高くないアスリートの補助やプログラム進行の補助などの役割も、コーチとしての重要な役割である。コーチには必ずしも高い競技能力が要求されるわけではないので、このような現象が生じていると思われる。知的障害者スポーツ活動においては、参加するボランティア自身、スポーツとしてよりも、福祉的な観点によって参加が規定されているのではないだろうか。

特筆すべきは、負担感要因において「コーチング課題」という因子が抽出されたことではなかろうか。「コーチング課題」を構成する質問項目は、「プログラムでの実際のコーチング」や「プログラムの企画・運営」「自分の時間が取れない」「義務・半強制的な空気がある」など、ボランティア活動の第一義の活動内容にあたるものであった。ボランティア活動は、個人の自由意思によって参加が決定されるもので、そこに強制力は働かないはずである。にもかかわらず、実際は活動内容そのものに負担感を生じている実態が確認された。これは、ボランティア活動が忙しくなり、日常生活における諸活動との間にアンビバレンスな状況を生じさせることが報告されている先行研究と同様の結果である（松尾ら, 1994. 松尾, 1996. 全国社会福祉協議会, 2010）。同様に、主に人間関係が負担感を生じさせているボランティアと、直接活動において負担感を生じさせているボランティアは、理念からかい離している事象に負担感を感じるボランティアに比べ、継続理由に「辞められない」という消極的な理由を含む割合が高かった。人間関係において負担感を生じさせているボランティアは、離脱することで誘ってくれた人の顔をつぶしてしまうことになったり、日頃会う機会があるのに自分だけ離脱したら気まずいと思ったりなどが考えられるのではないだろうか。直接活動において負担感を生じさせているボランティアは、作業量や時間において大きな負担となるだけ作業を担っていることが考えられ、自分が辞めると他のボランティアや知的障害者に迷惑をかけてしまうという認識があるのではないだろうか。回答者の属性においても、5人に2人が何らかの責任ある役職についた経験があるということが確認されており、ボランティアの人数が絶対的に不足していることが、特定のボランティアへの過重負担につながっている可能性も考えられる。「続けたい」という積極的な意思だけではなく、「辞められない」という理由も確認されたことから、継続的な参加の背景には、「みえない強制力」が少なからず働いてしまっていることがうかがえる。

また、スポーツ活動におけるボランティアの特徴としては、知的障害者の安全や成長、個人情報管理などに責任を負うことが負担感を生じさせるという「責務」の因子が抽出されたことが挙げられる。スポーツ活動という怪我の危険性を伴う活動においては、ボランティア活動という報酬が伴わない活動であっても、大きな責任が付きまとっている。

さらに、「理念からのかい離」が負担感を生じさせる要因として抽出されたことは、ボランティアのなかに、活動の趣旨や理念、使命を把握していない者が存在する、または、ボランティア個人によって解釈が異なることが考えられる。これは、今回調査に協力していただいたSO活動において特に生じやすいことかもしれない。SOには、厳格なルールに基づいて競技を行い順位もつけられるものであるが、結果よりも真剣に取り組む過程を大切

にしているという考え方がある。また、スポーツ活動に継続的に取り組むことを重要とし、厳格なルールの下で開催される競技会であっても、日頃の練習の成果の発表の場であると位置づけている。これらの点の認識にずれがあるのではないかと考える。

今回の結果は、負担感の構造について明らかにし、個人の自由意思によって参加が決定されているはずのボランティア活動において、ある種の強制力が働いてしまっていることが示唆された。ボランティアは、特にその実働において大きな負担感を生じてさせる傾向にあり、大変だけど、辞められないというジレンマが生じていることがうかがえた。

第四章 研究二

知的障害者のスポーツ活動における

ボランティアの継続参加の実態

第一節 目的

知的障害者のスポーツ活動においてはマンパワーが必要とされるため、ボランティアの継続的な参加が重要となる。継続的な参加をしているボランティアの負担感には、どのような構造があり、継続意欲にどう影響を与えているのかについて第一章で検討したが、本章ではボランティアの継続参加の実態に焦点をあて、議論していきたい。

ボランティアを十分に確保し、継続的な参加を促すためには、ボランティアの実態について把握する必要があるだろう。例えばボランティアをマネジメントする立場の者が、ボランティアの動機を理解しそれぞれの動機に対して適切に対処できれば、ボランティアのやる気を喚起させ、活動の活性化を図ることを可能とする報告がある(松岡・小笠原,2002)。また、田引(2008)は、障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機について、当初は社会への貢献といった利他的な動機であったものが、活動期間が長くなるにつれてスポーツ活動を意識したものへと、その意識が変容していくことを示唆している。このことから、活動参加から継続に至るそのプロセスを明らかにすることによって、継続参加を促す知見が得られるのではないかと考える。

よって本研究では、知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの、継続参加に至るプロセスについて分析し、マンパワーの安定供給のための知見を得ることを目的とする。

第二節 方法

第一項 方法と採用理由

本研究では、ボランティアとして継続的にスポーツ指導をおこなうボランティアの継続参加に至るプロセスを説明するため、質的研究法を選択し、継続的なスポーツ指導をしているボランティア 8 名を対象に半構造化のインタビューを行った。具体的には「スペシャルオリンピックス日本・青森」に参加しているボランティアを対象とした。

分析については木下（2003）による「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA）」を採用した。M-GTA は、社会的相互作用に関係する人間行動の説明力に優れ、特にヒューマンサービス領域において、研究対象とする現象にプロセス的性格がある場合に説明力をもつ研究法とされている（木下,2003）。本研究は、「知的障害者のスポーツ活動」というヒューマンサービス領域で、ボランティアの「継続参加のプロセス」を明らかにすることを試みるものであるので、M-GTA を採用することとした。

また、研究の対象となる「継続参加しているボランティア」が、量的調査では信頼性のある結果を得るための十分な人数が確認できなかったことも採用の理由として挙げられる。加えて、調査協力者となるボランティアは、日頃著者とともに SO 活動に取り組んでおり、日常生活でも余暇を共に過ごすことも多く、すでにインタビューにおける聞き手と話し手の信頼関係は十分に構築されていると判断できたことも、積極的に質的研究法を採用した理由として挙げる。インタビューにおいて言葉を取り繕わず話し手自身の言葉で（普段通りの様子で）データを得ることができると予想されたので、データの切片化を行わず文脈を大事にしてまとめることができる M-GTA が適合していると判断した。

第二項 調査協力者の抽出

本研究においては、調査対象となるボランティアに、分析結果の現実への適合性についてや、データの解釈に齟齬がないかを確認してもらったりするなど、データ収集後も協力を依頼していることから、調査対象を「調査協力者」と標記する。今回は、知的障害者に年間を通してスポーツ活動を提供しているボランティア団体「スペシャルオリンピックス日本・青森（以下 SON・青森）」に、継続的な参加をしているボランティア会員を調査協力者とした。協力調査協力者のプロフィールを表 4-1 に示す。調査協力者の抽出にあたっては、経験年数や役職経験など偏りが無いよう配慮した。また、SO 活動におけるボランティアの役割としては事務作業や広報、財務など様々なものがあるが、データの妥当性を考慮し「直接的なスポーツ指導を継続的に行っているボランティア（＝コーチ）」であることを条件とした。

表 4-1 調査協力者のプロフィール

調査協力者	性別	活動継続年数	役職経験
Info.1	男	4 年	ボランティアリーダー
Info.2	女	3 年／4 年	主任コーチ／副主任コーチ
Info.3	女	2 年	副主任コーチ
Info.4	女	2 年／3 年	副主任コーチ／副主任コーチ
Info.5	女	2 年／3 年	なし／ボランティアリーダー
Info.6	女	1 年／2 年	なし／副主任コーチ
Info.7	男	1 年	なし
Info.8	男	1 年	なし

※調査協力者のプロフィールはインタビュー時のもの

※再度インタビューを行ったもののプロフィールは スラッシュを挟み(1 回目／2 回目)と表記している

※個人が特定されないよう、役職の具体的な競技名などは記載しない

調査協力者の抽出にはボランティアの登録状況を把握している SON・青森の事務担当の方の協力を得たが、SO のボランティアとしての登録年数は長くても実際にはほとんど活動に参加していない場合や、一時期は継続的に参加していたが現在は登録しているだけで 1 度も活動に参加していない場合なども考えられた。したがって、単純な登録の年数ではなく、実際のスポーツプログラムへの出席状況も判断材料として抽出をおこなった。具体的には、各スポーツプログラムで設定されているスポーツ活動実施日の 8 割以上に参加している者を対象とし、最終的に 8 名を調査協力者として抽出した。経験年数が 1 年の者も継続参加しているとするには違和感があると判断されるかもしれないが、SON・青森は毎週日曜日にスポーツプログラムを開催しており、スポーツプログラムがない期間であっても

イベントや食事会など様々な催しが設定されている。1年間少しの期間も離脱せずに、ほぼ毎週活動に参加することを考えると、十分に継続参加していると認められるだろう。

インタビューの際、日頃プライベートでもかかわりのある調査協力者の場合、普段と違う極端にフォーマルな印象を与えてしまうと、言葉選びを慎重にしすぎ、生き生きとしたデータを得られなくなる可能性が憂慮される。そのため面接場所は、調査協力者が話しやすいよう、生き慣れた場所や居住地から近い場所など、インタビューが適切に行える環境で調査協力者が心身ともに負担なく足を運べる場所を選んだ。インタビューの時間は、ひとり 90 分～150 分であった。8 名うち協力の同意を得た 4 名 (Info.2,4,5,6) については 1 年 5 カ月後に再度インタビューを実施し、得られた追加データも分析に含めた。データの収集期間は 2009 年 5 月から 2010 年 10 月までである。

第三項 調査内容と手続き

主な調査内容は、継続参加の理由や、参加動機、継続意欲、その他現在の組織や参加者に対する意識などであり、なるべく自由に話してもらった。不明瞭な点があれば、話の妨げにならないよう配慮しながら確認したが、インタビュアーからの質問は最小限にとどめるように努めた。

分析にあたっては、まず、テーマを「知的障害者のスポーツ活動に参加するボランティアの継続参加に至るプロセス」と設定した。続いて、最も情報量の豊富な調査協力者のインタビューデータに着目し、テーマに照らして重要と思われた部分の意味を検討し、理論構成の最小単位となる概念を生成した。概念を分析ワークシートに記載し、2 例目以降は、1 例目との類似例や対極例を意識しながら、新たな概念を生成していった（分析ワークシートは資料参照）。次に、概念間の関係性を吟味することから、複数の概念を説明するより抽象度の高いまとまりであるカテゴリーを生成した。カテゴリーが生成された段階で、カテゴリー同士、またはカテゴリーと概念との関係性や時系列について解釈を行い、結果図としてまとめた。また、留意する点としては、今回の調査対象とした SON・青森においては、継続参加しているボランティアとして該当する者全員が大学生であったことが挙げられる。得られた結果からも一部この点が影響していると考えられる部分があったため、考察の視点に含める必要があると考えられた。

倫理的な配慮として、調査協力者にはプライバシーの厳守及び、研究の趣旨、録音・フィールドノート作成・分析手順・結果の公開といったデータの扱いについて説明し、すべての事項に同意する意思の確認を行い、研究協力への了承を得た。

第四項 信頼性の確保

質的研究法は、結果・考察に研究者の過去の経験やそのフィールドの捉え方等が反映される可能性を否定できないことが問題となることが多い。信頼性を確保するため、インタビューデータをまとめた後に、調査協力者にデータの解釈に齟齬がないか確認してもらい、また得られた結果図についての妥当性についても評価してもらい、承認を得た。インタビュー実施時には未加入・出席日数の不足で調査対象となりえなかったが、結果図としてまとめた段階では継続参加をしていると判断されたボランティア 2 名に対しても、結果について意見を求め、その妥当性について一定の評価を得た。

また、調査協力者 8 名うち協力の同意を得た 4 名 (Info.2,4,5,6) については 1 年 5 カ月後に再度インタビューを実施し、得られた追加データと結果の照らし合わせを行い、必要に応じて加筆・修正を行った。これは、継続参加のプロセスを確認するのであるから、分析の視点として重要と考えられる変化（例えばインタビュー時には役職についていなかったが現在は役職についているなど）が生じた調査協力者については、結果の確認の意味で縦断的なデータの収集が必要であると判断したからである。さらに、質的研究に造詣が深い研究者によるスーパービジョンや、大学院生・大学生が在籍しているゼミにおいて調査結果を報告し意見を仰ぐなどの手続きもふんだ。これらのことを踏まえ、後述する結果をみても議論に耐えうる概念が生成されたと考えられたため、理論的飽和化に達したと判断した。

第三節 結果と考察

第一項 結果図の提示とストーリーライン

分析の結果を概念やカテゴリーの関係性を表す結果図によって示す(図4-1)。文中では、概念を『 』、コアカテゴリーを【 】, サブカテゴリーを[], 調査協力者の具体的な回答(ヴァリエーション: インタビューデータからの引用)を「 」の記号を用いて表記する。また、「 」内の()は筆者による補足である。

ボランティアの知的障害者スポーツ活動への継続参加のプロセスは、【多様な参加動機】をもちながら活動に参加し、活動のなかで【ジレンマの蓄積】を経験し、それを通して【指導者としての使命感】を形成するに至っていた。また、使命感が形成されることによって、【学生というレッテルで評価されることへの不満】という、スポーツ指導の実績ではなく日常生活における社会的ステータスによって評価されることへの不満が生じていた。

プロセスにおいて特に注目されるのは、【ジレンマの蓄積】と、【学生というレッテルで評価されることへの不満】の2点である。【ジレンマの蓄積】についてであるが、これは継続参加の背景には、単純に楽しいというポジティブな感情・意識だけでなく、同時に負担感も抱えているということを示している。また、【学生というレッテルで評価されることへの不満】は、【指導者としての使命感】を形成することによって、当該活動における実績や参加の姿勢について、学生というレッテルが自己の評価に影響を与えることに不満を感じるようになるというプロセスである。以降、カテゴリーごとにみていく。

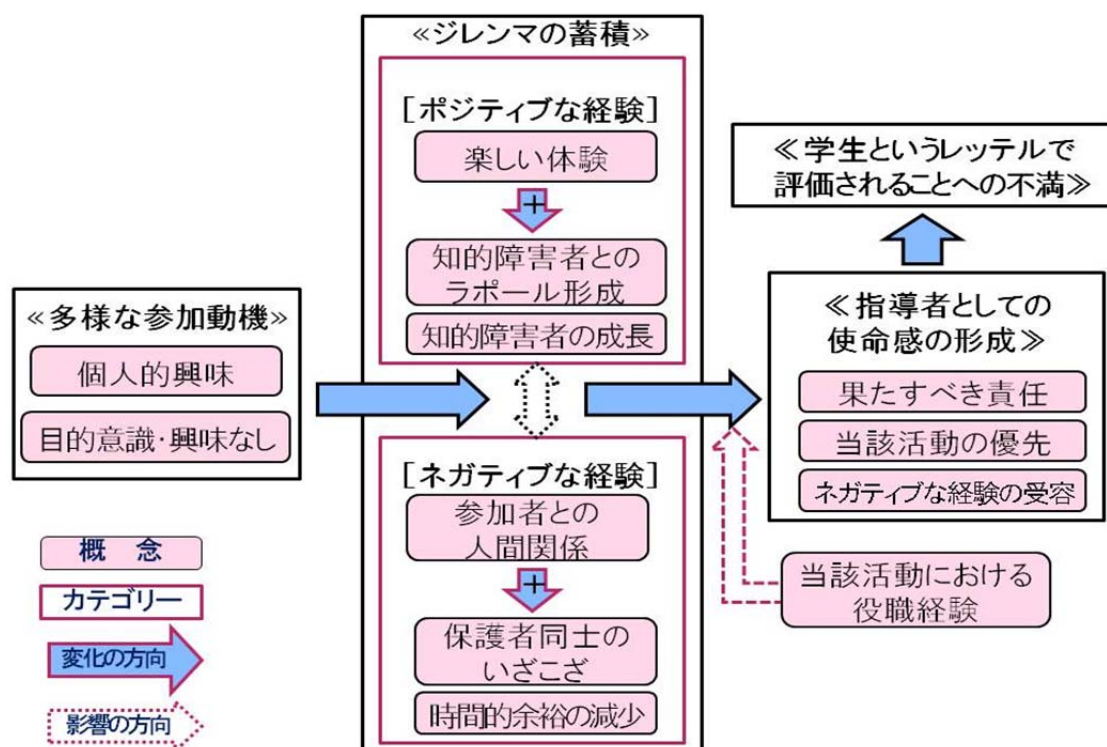


図4-1 ボランティアの継続参加プロセス

第二項 多様な参加動機

ボランティアの知的障害者スポーツ活動への参加動機としては、【多様な参加動機】であることが確認された。これらは『個人的興味・関心』『目的意識・興味なし』と二つに大別して理解できる。まず『個人的興味』であるが、これは「ボランティア系を探していたので (Info.2)」「小中と自閉症の男の子と 9 年間一緒だったんですよ、それで (自閉症・知的障害に) 興味あって (Info.4)」「スポーツ好きだったんで (Info.2)」など、個人の興味や関心が、当該活動と合致していたため積極的に選択されたものである。一方の『目的意識・興味なし』は、「(行ってみた中で) 他におもしろそうなサークルなかったんで (Info.1)」「〇〇 (大学生ボランティアの個人名) さんが、1 年生いる前で説明してたのがきっかけで、とりあえず皆で行ってみよかって (Info.6)」「なんとなく (Info.5)」など、特に目的や興味・関心があるわけではなく、消極的な動機で参加を決めたというものである。

ボランティアの SO 活動参加の第一義の動機は利己的なものであり、社会や他者のためにになりたいというような利他的なものは参加動機の根幹をなすものとはなっていなかった。ボランティア活動への参加は、自己の学びや豊かな経験を得たいなど、利己的な動機が確認されることが報告されており ((財) 内外学生センター,1999. 谷田,2001. 加藤ら,2006)、今回の SO におけるボランティアについても先行研究と同様の結果であった。ボランティア活動について、本来的な「有志者」という意味の他に「奉仕」というイメージがある現在の我が国においては、利己的な動機、つまりは自らの利益が動機として強調されることは、否定的な印象を与えるかもしれない。しかし、Fitch (1987) も、地域サービスにおいてボランティア活動の動機について調査し、個人的な関心が最も強い動機であったことを確認しており、それはボランティア活動における利己主義の重要性を示していると述べている。

ボランティア活動への参加・離脱は自らの意思によって決定されるため、自らが追求する利益と得られた経験や学習内容とが合致しているかどうか、継続参加を促す重要な要因となりえる。他者や社会のためにボランティア活動をするということは、自らの行動が誰にどのような効果をもたらしたかという結果判断の主体は他者にあることになる。つまり、「他者のためになった」かどうかの判断が難しく、結果が次の動機付けへとフィードバックされにくい場合があると考えられる。今回研究対象とした知的障害者のスポーツ活動のような、他者との相互作用が要される活動の場合は殊更その傾向が強いだろう。しかし、自分自身がどう感じたか・何を得たかという点については、良くも悪くも自己完結・自己判断が可能となる。そのため、自らの利益が根幹的な動機である場合、当該活動における意義を見出しやすく、そのことが活動の継続性と関係しているのではないかと考える。

第三項 ジレンマの蓄積：ポジティブな経験

継続的な参加をしているボランティアは、[ポジティブな経験]と[ネガティブな経験]の両方を経験し、【ジレンマの蓄積】を生じさせていた。[ポジティブな経験]としては、『楽しい経験』『参加者とのラポール形成』『知的障害者の成長』が確認され、[ネガティブな経験]としては、『参加者との人間関係』『保護者のいざこざ』『時間的余裕の減少』が確認された。

[ポジティブな経験]は、活動へ参加した当初は『楽しい経験』という一過性のものがあったが、参加を重ねるごとに、『参加者とのラポール形成』『知的障害者の成長』といった長期にわたりかかわらねば得られない経験が継続参加につながる新たな動機として加わっていた。

『楽しい経験』とは、単純に、活動に何か楽しみを見出せたということである。「1 回行ってみたら、(知的障害者との) かかわりが楽しかった (Info.1)」「何もできなかったんですけど、普通にバスケ自体好きだし、楽しいんで、もっかい行ってみようかな的な (Info.6)」「先輩方皆いい人で、飲みとか楽しいから (Info.8)」など、活動のどの部分が楽しみをもたらしたかはそれぞれでありながらも、楽しいという経験が次回以降の参加を促していた。これは、知的障害者へのスポーツ指導という活動の本質の部分に楽しみを見出せなくとも、当該活動の関係者という括りの中でポジティブな経験ができれば、それが当該活動以外の場面であっても当該活動の楽しさとして評価されることを示唆している。

『知的障害者とのラポール形成』とは文字通り、活動に参加している知的障害者とラポールを形成できたとボランティア本人が自覚し、喜びを感じることである。「H (知的障害者の個人名) に名前覚えてもらって、それがすごい嬉しくて (Info.7)」「(自分が休んだ時に) 前いたお姉さんは？って聞いてみたいで、覚えてくれてた一みたいな (Info.3)」「前は冷たかったのに、今自分から走ってきてくれたりとか、挨拶とか、一瞬一瞬のちいさいこととかすごい嬉しかったです (Info.5)」など、知的障害者に認識してもらえることや関わり方が親和的に変化したことが嬉しく、継続的な参加を動機づけることになっていた。

『知的障害者の成長』とは、自分がスポーツの指導を行っている知的障害者の成長を実感し、指導の手ごたえや喜びを感じることである。「うまくなってるってか、アスリートの成長見てると嬉しいってゆーか (Info.6)」「(SO に携わって) 4 年目だから 1 年のとき見たアスリートの成長が見れる (Info.1)」「毎回来てくれるようになったし、プログラムに対する姿勢が変わったっていうか (Info.5)」「背おっきくなったねーとか、ボラ同士で話して (Info.4)」というような、技術や取り組む姿勢といったスポーツに関することのみならず、身体的な面でも成長が確認できることが、一層継続的な参加の動機づけとなっている。

「たいいてい施設のイベントとか、その時だけのボラじゃないですか、継続的に触れ合っていけるのが他のボランティアではあまり経験できない (Info.4)」というように、『知的障害者とのラポール形成』『知的障害者の成長』という継続的に参加することによって初めて得ることのできる感動が、より一層の継続を誘発しているものと考えられる。妹尾 (2008)

によると、ボランティア活動への継続は、参加動機が自発的かどうかにかかわらず活動を通じて自らの行動に役立ちを実感できることが動機付けになること、また、若者は現在の被援助者に及ぶ援助の効果で自らの活動の良し悪しを決めることが示唆されていた。「なんとなく」参加してみた者もいるような、『多様な参加動機』でありながら継続的な参加を可能とした背景には、参加してみて『楽しい経験』をし、次回以降の参加意欲を促進され、回を重ねるうちに『知的障害者とのラポール形成』『知的障害者の成長』という、新たな参加意欲を促進する要因が生じたことが示唆される。

第四項 ジレンマの蓄積：ネガティブな経験

ポジティブな経験を重ね、継続参加の意欲が高まる一方で、[ネガティブな経験] も同時に生じている。[ネガティブな経験] も、参加当初は一樣に『参加者との人間関係』がうまく築けないという問題を抱えていたが、人間関係が築けるようになってからは『保護者同士のいざこざ』があることがみえてきたり、『時間的余裕の減少』が負担感を生じさせたりと、時期による変化が生じていた。

『参加者との人間関係』とは、まだ環境に慣れていない状態で、周囲の人といかにして打ち解けるかと四苦八苦することが負担となっていることである。「○○（友人の個人名）は障害重い、あの何君でしたっけ？手がこうなってる…についてたんで、何しゃべっていいかわかんなくて、変に話したら傷つけるかなとか、ほめた方がいいのか…（Info.6）」「（保護者に）めっちゃ見られてて怖いときありました（Info.6）」「一年生のときとかだったら、ファミリー（保護者）の人との関係とかも考えたんですけど、もう関係もできてきたし、全然負担には感じないです（Info.5）」など、スポーツ指導を行う知的障害者とうまくかわれないことの他に、保護者との関わりについても負担感を生じさせていたことがうかがえた。

『保護者同士のいざこざ』とは、ボランティア自身と保護者の関係性についてではなく、保護者同士の関係性の不良について負担感を生じさせていることである。「あと負担…はファミリー（保護者）同士の人間関係、いざこざ…ですね（Info.1）」「たまにその愚痴が痛々しいみたいな（Info.2）」「○○さんと××さん（保護者の個人名）めっちゃ仲悪いじゃないですか（Info.3）」など、直接的・間接的に一部保護者に確執があることを知り、そのことが活動のやりにくさにつながっていると解釈できる。気持ちの面でやりにくく感じるだけでなく、「（会議中保護者が愚痴を言う旨の話をし）関係ない話とかもでてくるじゃないですか、そっちの方が長いんで（Info.2）」というように、実際の作業にも支障をきたす場面もあることが見受けられた。

『時間的余裕の減少』とは、参加を重ねるうちに徐々に組織の一員として認められるようになり、担わなければならない作業が増え、結果、時間的な余裕がなくなってしまうことに負担感を感じることである。「会議とかあると、一週間けっこう潰れることあるじゃないですか、準備とか、たとえば陸上始まったら会議多くなるし、それで日曜日プログラムなんでちょっと時間が…って（Info.3）」「時間の負担大きくなりました（Info.1）」「テストとかあると時間が（Info.6）」など、単純に作業にあてる時間が増えたこと自体が負担感を生じさせる場合と、アルバイトや学業など自身の生活場面との兼ね合いにおいて支障をきたすことに負担感を生じさせる場合とが確認された。「最初の頃は時間よりも気持ちの面での負担が大きかったんですけど、今は逆ですね。時間の負担は大きくなりました（Info.1）」という回答が顕著に示しているように、初期は『参加者との人間関係』がうまく築けていないことで負担感が生じていたが、継続するにつれ『保護者同士のいざこざ』があることが目についたり、慣れてきたことで様々な作業を担わされることから『時間的余裕の減

少』が新たな負担となっていた。『時間的余裕の減少』が負担感を生じさせているという結果は、佐々木（2003）の、若者のボランティア活動参加の際障害となることとして時間的なコストがもっともあげられたという報告と一致している。

一方、自らと保護者との関係性ではなく、『保護者同士のいざこざ』が負担感を生じさせているというのは、SO 活動のような登録制のメンバーシップ活動の特徴として捉えることができるだろう。サークルなどに所属し、他の団体から依頼を受けてボランティアに行くのではなく、ボランティアが自ら企画・運営することによって、必然的に保護者と関わる機会が多くなる。そのことから、よりよいスポーツプログラムを定常するにはどうすればよいかという、「マネジメント」についても意識する必要性が生じ、自身と直接的には関係しないような問題でも、自らの問題として捉えるようになっていくのではないだろうか。また、SO 活動が継続的な性質をもっていることも要因として考えられる。その時を我慢すればよい一過的なボランティア活動とは違い、目の前のストレスフルな出来事が解決できなければ、次に行った時もまた同じ経験をしなければならないということも、一層負担感を生じさせると考えられる。加えて、『保護者同士のいざこざ』は他者同士の問題であり、保護者は、スポーツ指導時のみ責任が生じるボランティアと違って、毎日、知的障害者の将来にまで責任が生じており、ボランティアとは立場が異なっている。この点からしても、ボランティアでは介入・解決し難い問題である。自分たちがスポーツ活動を適切に運営してしなければならないという認識はあるが、実際には立ち入ることが難しい問題を抱えており、そのことが負担感を生じさせているのではないだろうか。

ボランティアは、ポジティブな経験によって継続的な参加が促されるが、徐々に継続参加するようになることによって、付随的にネガティブな経験もすることが確認された。

第五項 指導者としての使命感の形成

ボランティアは、これまでは『楽しい経験』ができたことや、『知的障害者の成長』が確認できる喜びによって「また行ってみよう」と、次回以降の参加意思が規定されていた。しかし、継続的な参加をするうちに【指導者としての使命感】を形成するに至り、それが継続参加の意思にも影響を与えるようになっていた。具体的には『果たすべき責任』『当該活動の優先』『ネガティブな経験の受容』が確認されたことから、使命感が形成されたと判断した。

『果たすべき責任』とは、知的障害者にスポーツ指導をする以上、指導者としてやらねばならないこと、果たさねばならない責任があるという認識をすることである。「責任を感じるようにようになった (Info.5)」「組織として考えて義務として今提供しているサービスの質を落とせない、なのでやらなきゃならない (Info.1)」「キレイゴトいうと、アスリートと接せられるっていうのがあるんですけど、自分は全部がそうとは言えなくて、義務感、責任っていうのもあります (Info.1)」など、これまでは、自分のことだけ、または自分のことを優先的に考えていたのが、組織や活動全体における自らの役割という点を重視するよう変化したことがわかる。

『当該活動の優先』とは、日常生活と SO 活動との兼ね合いを考えた際、SO 活動の予定を優先してスケジュールを組んでいることである。具体的に、「基本的には SO は（優先順位として）一番最初にくて、あとは（予定に）入れないようってか、考えてない」「アレコレ手出すのはちょっとあれなんで、今は SO やってるので (Info.1)」「日曜日は SO で、2,3 回は T 園（具体的な施設名）の運動会とか日曜日に重なったんで、そっち行ったんですけど、今は土曜日にそういうボランティアとか探してます (Info.4)」などの回答が得られていた。SO 活動のある日は、活動日時が重なる他のボランティアサークルに入らない、アルバイトのシフトを入れないようにするといった時間的な調整をしており、中には、筆者の「例えば、彼氏ができて、SO 休んで遊ぼうと誘ってきた場合どうする」という質問に対し、「いや、それは、それを理解してくれてる人じゃないと（付き合えない） (Info.3)」という回答する者もあった。皆、SO 活動に対してかなり傾倒していることがうかがえた。

『ネガティブな経験の受容』とは、先に述べた『保護者同士のいざこざ』『時間的余裕の減少』という負担感を生じさせている事象を、活動をする上で止むを得ないことであると認識するようになることである。「負担て思うのは、それは楽しい事のためだし、負担とは言ってるけど、それは最後には楽しいことになっちゃってるんで、そんなに苦ではなくて (Info.3)」「(負担感が生じている内容について話し) でも大変ですけど嫌じゃないですね (Info.1)」「別に SO のことがあって動くのはかまわないんですけど、負担でも何でもありません (Info.2)」というように、ネガティブな経験があることを認めながらも、それから避けようとするのではなく、受容するようになっていく。むしろ、楽しい経験をするためには避けて通れない、必要なコストであるという認識すらされていた。

上記の 3 つのカテゴリーは、ボランティアの意識に大きな変化が生じていることを示し

ている。SO 活動への参加当初は、参加動機にもあったような自らの興味や、活動を通して楽しい経験ができるといった、自己の利益になることが継続的参加の第一義の根拠になっていた。しかし、活動を継続する中で、利己的な動機だけでなく、組織や参加者のために頑張りたい・頑張らねばならないという利他的な動機が生じていた。これは、[ネガティブな経験]をすることによって、問題意識、また、問題を解決・改善しようという意識が芽生えたと解釈できるのではないだろうか。つまり、[ポジティブな経験]が継続意欲を高めることはもちろん、[ネガティブな経験]も【指導者としての使命感】の形成に一役買っているのではないかと思われる。

また、ドロップアウトを考えたことはないかという質問に対しては、ほぼ全員が「ない」と回答していた。「ある」と回答した者も、完全な離脱ではなく、「辞めるじゃないですね、一時休みたい、距離を置きたい (Info.1)」「辞めるっていうより、なんか、休んでちょっとリフレッシュすればいいかなっていう (Info.6)」という、一時休止することを意図していた。

知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアを対象とした先行研究では、組織コミットメントが継続意欲に影響を及ぼすことが報告されている (松本ら,2004. 北村,2005)。今回のボランティアも、自分がスポーツ活動を提供している指導者であるという自負と同時に、いち個人としてボランティア活動に「参加」しているのではなく、指導者として SO という組織に「所属」しているという意識が醸成されたことが、継続参加を促す要因になったと判断できるのではないだろうか。一方では負担感を生じさせつつも、指導者であるという自負、自分が担っている作業の重要さの自覚が、継続的な参加をより強く決意させていると考えられる。

また、【指導者としての使命感】の形成は、『役職経験』があることによって、より強化されることも示唆された。「〇〇長 (自らの役職名) っていうのもありますし、今まではただプログラムに取り組んでいるだけっていうのもあったんですけど、けど今は、ボランティアのこともみながら、どうしてこういうふう考える (Info.5)」「なんか普通にやってるコーチとは責任の差が (ある)」「サブリーダーになってからなんですけど、来れるときに来ればいつかっていう人との熱の差を、サブリーダーやってから感じます (Info.3)」など、現在・過去に役職経験があるものは、自らの意識が変容したことについてふれる際、その契機として役職の就任を挙げている。しかし、「役職に就いてから変わった」という意見がある一方で、役職経験がない調査協力者でも【指導者としての使命感】が形成されていると判断できたので、『役職経験』は【指導者としての使命感】形成に正の影響を及ぼすが、【指導者としての使命感】形成に必ずしも不可欠なものであるとは言い難いと判断した。

第六項 学生というレッテルで評価されることへの不満

【指導者としての使命感】形成後、【学生というレッテルで評価されることへの不満】が生じていた。【学生】という特定のワードが確認されたことは、調査協力者が大学生であったことによると思われるが、自身が指導者としての自覚が芽生えたことによって、組織への貢献の度合いや実績ではなく、学生という身分が評価に影響を与えていることについて不満をもっていることを示すものである。軽視されることへの不満の例としては、「学生だからってふうにみられているような気がして、そういう部分ではクソって思ったりしますね (Info.5)」「学生には任せられない、同じことやってても学生だからと信頼されないのが悔しいです (Info.1)」「やっぱり学生というと甘く見られる、学生だから子ども扱いされる、とかはあります (Info.2)」などが挙げられる。逆に、「(毎回自転車で会場に行くことについての保護者の反応が) こっちは全然気にしてないのにすごい気にされるじゃないですか、別に苦には思わないんですけど、なんかちょっと…ひっかかるっていうか (Info.2)」という、気を遣われ過ぎることについて違和感を感じるという意見もみられた。

自己に対する周囲の評価に対しての不満は顕著であったが、これは決して、ボランティア指導者として関わっていることについて過度に称賛を求めているというわけではない。各人が使命感をもって、いわばプロ意識・美学をもってスポーツ指導を行っていることから、単純に「学生なのに偉い」とか「学生だからだめ」など、日常生活場面での身分から評価されることを嫌っているということではないだろうか。

また、ボランティアは、自分達を「ボランティア」という括りでは捉えておらず、SO活動に対して指導者としてどれだけ貢献できたかという評価軸をもって、自分も含めた各「個人」に対する評価をおこなっていると推測できる。SO活動への参加のしやすさについて、「あんま学生とか関係ないですよ、その人次第 (Info.6)」「KYさん (保護者の個人名) みたくプログラムにも参加されてる方いらっしゃるので、逆に学生でもバイトしてたら日曜参加できないんで、どちらかとは言えないです (Info.1)」という回答や、「(SO活動を) 就職しても、続けたいと思います。でも卒業した先輩結局みんな来てないんで、実際のところどうなんだろうとかは思いますが、自分では参加できる気です (Info.2)」という回答からも、結局のところ身分は関係なく個人の意思次第だろうという認識がうかがえる。さらに、「(大学生ボランティアに対して) 別に予定ないのに SO に来ないのは何でなんみたいな。で来たときはすごいいっぱいメンバーの顔するってか、何もわかってないのにすごい色々話するのとかは、イラッときます (Info.3)」「(後輩に対して) もうちょっと責任をもってやってほしいって部分があって… (割愛)…。なんだろう、最初っから『できません』っていうのが、ちょっと、うん、立場としてどうなんだろうとか (Info.5)」など、その個人への評価、指導者としての責務に対する要求も厳しいものであった。個人によって参加形態や貢献の度合いが大きく異なるにもかかわらず、一括りに、同等に扱われてしまうことも、「学生」というレッテルに対する不満の一要因になっているのではないかと考える。

レッテルへの不満の背景として、使命感が形成された段階では、ボランティア活動を極めて職業的に捉えていることが確認される。自己の成長や余暇の充実のために、楽しみながら関わっていながらも、活動場面においては頭を切り替え、ビジネスのように捉えているのである。職業的に認識しているからこそ、『果たすべき責任』を自覚し、『当該活動の優先』という意識をもち、『ネガティブな経験の受容』を可能とする。その分、実働・実績ではなく、職業場面以外の身分によって評価されることが不満になるのではないだろうか。

松尾（2002）は、素人主義であることが殊更強調されている今のボランティア依存のスポーツ指導者システムでは、スポーツ界全体に停滞をもたらす危険性があることを指摘している。よりクライアントと身近になり、より責任ある、専門的なサービスを展開する際、専門的知識や技能を前提としたプロフェッショナリズムとの協働が必要となると述べている。これは決して、ボランティアを積極的に活用するスポーツ団体や、自己のスポーツの知識・経験を生かしたいというボランティアを批判するものではなく、スポーツ指導＝ボランティアでという規範を問題視するものである。この論に立てば、ボランティアとして行動しながらも、プロフェッショナリズムの行動原理を持ちうることになる。ここでのボランティアは、実際に専門的な知識や技能が伴っているかどうかは判断しかねるが、まさにボランティアでありながらプロフェッショナルである状態と言えるのではないだろうか。

第四節 小括

本研究は、知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの継続参加に至るプロセスについて把握し、マンパワーの安定供給のための知見を得ることを目的として、半構造化インタビュー及び M-GTA による分析を試みた。その結果、以下のことを確認した。

①知的障害者のスポーツ活動に継続参加しているボランティアは、その参加動機は様々であるが、何か楽しみを見出すことができれば、継続的な参加が期待できること。

②活動を継続すればするほど、より楽しい経験・感動的な経験ができるが、同時に負担感を生じさせる事象も増えるというジレンマが生じていること。

③楽しいことだけではなく、負担感が生じるような経験もすることで、指導者としての使命感を形成させ、それがドロップアウトを抑止する要因になりえること。

④指導者としての使命感を形成したボランティアは、日常生活における社会的地位など指導者としての実績以外の要因から評価されることに不満をもっていること。である。

これらの結果から、ボランティアが継続的な参加をするためには、本人の意欲はもちろんだが、何よりボランティアを受け入れる組織側の体制、ボランティアに対するアプローチが非常に重要であることが考えられる。つまり組織のマネジメントにかかっているのである。今回の結果では、活動内容に直接的な興味・関心のなかったボランティアであっても、一度楽しい経験をするを契機に、徐々に継続的な参加をするようになり、ボランティア指導者として責任もって関わるようになっていた。ボランティアを確保するためには、まずは、広く情報を発信し参加機会を設ける努力をすること、参加したボランティアに対して楽しい経験ややりがいを感じてもらうような経験ができるようなアプローチをすることが求められるだろう。ボランティアが、実際にスポーツ活動を指導したり知的障害者と接していくなかで、楽しみややりがいを見出すことができれば、継続的な参加が促されることが考えられる。逆に、ボランティアが何もすることがなくやりがいを見出せないのであれば、興味や熱意あるボランティアであっても、むしろ熱意に溢れているボランティアこそ、参加意欲を削がれてしまうのではないだろうか。また同様に、ボランティアが場に馴染む前に、活動内容を楽しむ余裕もないほど大量の業務を与えられたり、ボランティア自身では対処しかねる役割を与えられてしまったりする場合も、参加意欲を削がれてしまうだろう。ボランティアをマネジメントする立場にある者は、ボランティアや参加者の様子をよく観察し、参加者だけでなく、ボランティアも楽しくやりがいを感じられるように配慮することが重要である。当然、ボランティア活動を希望している場合、ボランティア自身も積極的に自分の興味・関心に合った活動や団体を探す姿勢も大切であろうし、逆に組織側も誰かれ構わずとりあえず引き込めば良いというものでもない。しかし、必ずしも明確な動機や熱意をもっていなくとも経験次第で継続的な参加が可能となり、知的障害者にスポーツ活動を提供するために人材不足が問題となる現状においては、組織は広く活動を PR する必要がある。

また、ある程度参加経験を重ねたボランティアに対しては、多少の負荷がかかってしま

うであろうが、何かしら責任をもって臨まなければならない作業を担わせることも大切であると考え。松尾（2002）は、スポーツ指導はボランティアで行うというコード化された規範の中では、スポーツの専門性の高いボランティアであっても、専門性が専門職として生かされず、もどかしさを生じさせる危険性があることを指摘している。これはつまり、せっかくやる気に満ちてボランティアとして参加したのに、発揮の場が保障されず不完全燃焼な状態にいることを表しているのではないだろうか。本人が過剰な負担感を生じない程度の作業であれば、積極的に担ってもらうことによってやりがいや自己有用感を感じさせ、結果として帰属意識や継続性を高めることにつながっていくと考えられる。

さらに、ボランティアをマネジメントする立場の者は、ボランティアを公平に扱うこと、ボランティア活動場面においては皆同じ一票を持った同志であるという共通認識をもてるよう、率先して意識付けをおこなっていくことが重要であると考え。今回の結果では、日常生活における社会的な地位が意見の採択に影響を及ぼしていること、またそれによってボランティアが不満感を生じさせていることが確認されている。宋（2009）は、福祉ボランティア活動をしている団体を対象にして調査をおこない、在籍・活動年数が長く活動頻度も多いコアメンバーと、活動頻度が低いメンバーの間に意見の不一致や対立があることを指摘している。個人差はあるだろうが、人生におけるバックグラウンドと、それによって形成される人生観、活動に対する興味や思いなどは様々であり、同じ活動の下に集ったボランティア同士でも考え方に差異が生じることは容易に想像できる。『学生というレッテルへの不満』を生じさせているということは、意見の対立や協議事項がある際に、年功序列のような、「何を言ったか」ではなく「誰が言ったか」ということが重要視されてしまう実態があることを示していると推測される。組織の意思決定が、いかに参加者にとって有益かということではなく、ボランティアの社会的地位や年齢などに配慮して方向づけられる危険性が考えられる。常に全会一致というわけにはいかないと思われるので、ある程度、物事を決定していく上での役割分担は必要不可欠であるが、役割とは関係のないボランティア個人の「鶴の一声」については、避けるようにすべきである。

Khoo & Engelhorn（2011）は、スペシャルオリンピックスのイベントにボランティア参加した人を対象にして、動機の調査を行い、過去の経験（初参加のボランティアと、複数回参加しているボランティア）によって比較をおこなっている。その結果、動機付けの要因として、初参加のボランティアは複数回経験しているボランティアに比べて「人生で1度のチャンス」「自分の視野を広げたい」と考えており、複数回経験しているボランティアは「自分のスキルが必要である」「自分はサービスを提供した経験がある」と考えている傾向にあった。これは、初参加のボランティアは利己的な動機であるのに対し、複数回経験しているボランティアは利他的な動機であることがうかがえ、このことから、ボランティアの動機付けは経験によって変化しうることが考えられる。「自分のスキルは必要である」「自分はサービスを提供した経験がある」という選択の背景には、ボランティアを通して

やりがいや充実感を得ていることが推測され、やはり、いかに質の高い経験をすることができるかということが重要な視点となるように思える。

本研究では、知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの継続参加に至る過程を仮説モデルとして示すことができた。これは、ボランティアに継続的な参加を促す際、具体的なアプローチ方法を導き出すための基礎資料を得ることができたと考える。また、ボランティアの実態が把握できたことによって、ボランティアを受け入れる組織側の問題点や課題も一部浮き彫りにできたのではないかと考える。

第五節 今後の課題

最後に、今後の課題について整理したい。本研究は、「知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの継続参加プロセス」に着目したことから、4つの点において研究の限界があることを述べる必要がある。

1点目は、継続参加しているボランティアの対象が大学生に限られてしまったため、社会人や定年退職後のボランティア、または中学・高校生など関しては説明力をもたない可能性が挙げられる。一概に言えない場合もあるが、大学生は、家庭や仕事がなく比較的生活時間を自由にできるという、社会人とはライフスタイルが大きく異なることが考えられる。また、同じ学生という立場であっても、中学・高校生が、参加者の年齢の幅も大きく専門的な知識も要する知的障害者のスポーツ活動を主体的に運営することは、心身ともに準備が整っているかという点で現実的ではないだろう。もちろん、個人差は考えられるので、大学生だから可能で、中学・高校生には不可能であると断定するものではないが、今回の結果を大学生以外のボランティアの参加実態として一般化できるかどうかについては、議論の余地を残している。

2点目は、継続参加が可能であったボランティアが前提となっているため、すでに当該活動からドロップアウトしてしまった人の経験についてまでは言及できないことが挙げられる。継続参加している大学生ボランティアについて前述したような実態があったということは言えても、それがドロップアウトした大学生ボランティアにはみられないものであるかについては確認できないからである。より現実に対応可能なマネジメントの方法を講じるためには、今後、ドロップアウトするに至った経緯を調査し分析する必要があるだろう。

3点目は、今回提示したプロセスは、SO活動という知的障害者のスポーツ活動において確認されたものであり、身体障害者、視覚障害者など他の障害者スポーツ活動においては適応できないことである。具体例として、継続参加を動機づける要因として『参加者とのラポール形成』が確認されたことを提示する。知的障害者という、比較的にコミュニケーションをとるのが困難な相手であることで、ラポール形成がなされたときに大きな喜びを感じることができたことが考えられるためである。

4点目は、今回調査協力者となっているのは、すべて教育や福祉関係の学問を専攻するものであったため、学んでいる領域による差異という点において言及できないことである。これは意図的に抽出したのではなく、継続参加しているボランティアに該当するすべての会員が教育、福祉関係の学部学生であったことに起因する。そもそも知的障害者のスポーツ活動に興味・関心があるからこそ、SO活動に参加し、継続することが可能であった可能性が否定できない。また、専門性を確保しようと努め、指導者としての高い意識をもつ風潮になったからこそ、関係する領域に明るくないボランティアが去っていく結果になったという可能性もある。しかし、SON・青森の事務担当者やボランティアリーダーが述べていたのだが、ボランティアの人数やプロフィールについては、年ごとの「運」によるところが大きいという可能性もあり、因果関係については言及できない。事実、定年退職者、

特別支援学校の先生、福祉施設の職員、大学生では、人文学部、理工学部、農学生命科学部、医学部や看護学部など、様々な業種のボランティアが登録していた時期もあった。勧誘に力を入れ大々的に PR 活動をしたにもかかわらず、新規加入者がいなかった時期や、ほとんど PR 活動をしていないのに多くのボランティアが入会した時期もあったという。いずれにせよ、ボランティアの職種や在籍学部についても、今後分析の視点として考慮する必要があるかもしれない。

第五章 研究三

スポーツ指導をおこなうボランティアに対する

知的障害者の保護者の意識

第一節 目的

QOL（生活の質：Quality Of Life）の高い状態で日々を過ごすというのはすべての人にとって重要な視点であり、それは当然障害者にとっても同様である。これまでの日本の福祉は「生きる」ということに関する保障に力を注いでいたが、その後「よりよく生きる」ための支援にも関与するようになってきた（草野,2004.）。今やっと、「どうすれば障害者も生活することができるか」ではなく「障害者もよりよく生活するにはどうすればよいか」、つまり ADL（日常生活動作：Activities of daily living）から QOL へと、社会の意識が変容してきているといえる。

QOL を高めるため、余暇の充実のための手段として、スポーツ活動は有効である。障害者のスポーツ活動は、元々医学的リハビリテーションとして、障害された運動器官の機能回復や残存機能の向上、身体の機能的予備力の向上により、日常の身体活動の拡大および確立、社会生活への適応養成などを目的として取り組まれた（陶山,2006）。しかし現在では、「障害者白書」の中で「スポーツ・文化芸術活動の推進」という項目が、日々の暮らしの基盤づくりという章の中に盛り込まれているように、障害のある人にとっての自立・社会参加に繋がる大きな要因であることが窺える。「障害者プラン～ノーマライゼーション 7 か年戦略～」においても、ソフト面・ハード面ともに整備し障害者スポーツの振興を図ることが明記され、2002 年に策定された「重点施策実施 5 か年計画」においても、生活支援という括りの中でスポーツ活動の振興が謳われている。

しかし、スポーツ活動に取り組むことの意義は認められながらも、「障害者がスポーツに親しみ、喜び楽しむ」ことの権利の享受に対する社会的認知や理解は歴史的にも浅く、支援体制や受け皿がまだまだ少ないのが現状である（渡邊,2006.）。実際、我が国の知的障害者の余暇の傾向としては、多くはテレビ観賞や音楽鑑賞など室内で過ごしており、運動・スポーツ活動の機会が多くない現状にあることが報告されている（高畑・武蔵,1997、石黒ら,1999、中山,2000）。特に知的障害者にとっては、これまで身体障害者スポーツに比べて目を向けられてこなかったという社会的な背景と、それによる制度の不備からくる経済的要因・物的環境要因・人的環境要因によってスポーツ活動への参加が阻害され（望月,2007）、余暇活動としてスポーツ活動を積極的に選択することが難しい状況に置かれている。

このような社会背景から、これまでは、知的障害者のスポーツ活動は民間やボランティアによって支えられてきた。近年は、地域のスポーツクラブや団体におけるボランティアの重要性が取りざたされており、我が国の代表的なスポーツ組織・団体の半数がボランティアを活用している現状があるという（仲澤, 2002）。ボランティアが果たすことのできる役割は大きく幅の広い活躍が期待されており（野村, 2002）、特に非営利のスポーツ組織にとっては、価値ある人的資源を有効に使うことが、組織の成功への 1 つの鍵となっている（松岡・小笠原,2002）。元来ボランティアによって支えられてきた知的障害者のスポーツ活動においては、一層ボランティアの活躍に期待する傾向が強い。

また、知的障害者がスポーツ活動に参加したいと考えた時、ボランティアによるサポートも必要となるだろうが、何よりも保護者のサポートというものは決して無視できない。知的障害者がスポーツ活動に参加する際、「活動先を見つける」「用具などの準備をする」「(参加費が必要な場合) 参加費を支払う」「会場に向かう」「会場から帰る」といったことを、全て自分ひとりで達成できるケースは決して多くないだろう。特に障害の程度が重いほど、年齢が低いほど、その困難性は増す。石黒ら(1999)は、知的障害者の保護者を対象に、知的障害者の余暇生活行動について調査を行ったが、兄弟や祖父母が同居していても母親との関わりがほとんどであるケースが確認されており、その場合単独行動が可能でない限り必然的に母親への負担が大きくなっている可能性を指摘している。また、送迎が必要な場合は、母親の体調によって参加不参加が決定してしまうことも報告されており、家庭環境も余暇活動行動を規定する一要因であることが示されている。於保(2004)の10代の知的障害児をもつ親に対する調査でも、余暇活動について困っていることとしては、親以外の付き添い・送迎が欲しいという回答が最も多かった。やはり、保護者による引率や、金銭面の援助が求められるため、保護者自身も魅力的であると認識できなければ、スポーツ活動への参加は果たされないことになるだろう。これらの点から、ボランティアの充足を目指すことは必要であるが、同時に、保護者のスポーツ活動に対するニーズや、スポーツ指導をおこなうボランティアに対する意識についても検討する必要があると考える。スポーツ活動には怪我などの危険が伴う場合が多い。わが子がスポーツ活動を実施するにあたり、その指導を一般のボランティアがおこなうことについて、保護者はどのような意識をもっているのか。また、指導者にはどのような素養を求めているのか。保護者が抱える、スポーツ活動や指導者に対する期待や不安について把握することができれば、スポーツ活動を提供する組織はより魅力的な活動の提供を可能とし、結果、知的障害者がスポーツ活動へ参加する機会が増えることにつながるのではないかと考える。

本研究は、スポーツ活動に参加している知的障害者の保護者の、スポーツ活動・スポーツ指導者に対するニーズ及び、ボランティアに対する意識を確認することから、知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの効果的な活用方法について検討することを目的とする。

第二節 方法

第一項 調査対象

調査は、知的障害者にスポーツ活動を提供している「スペシャルオリンピックス日本・青森（以下 SON・青森）」の協力を得て、実施した。SO は、知的障害者に年間を通じたスポーツ活動の機会を提供する国際的なスポーツ組織であり、日本でも 47 都道府県で活動が展開されている（スペシャルオリンピックス,2010）。SON・青森は、日本における SO 活動を統轄している SO 日本の認可する、青森県における地区組織である。SO の運営は市民のボランティアの手によっておこなわれており、SON・青森においても同様である。今回は、SON・青森の活動に子どもが選手として参加している保護者 3 名を抽出した。

SO の運営は有志のボランティアによっておこなわれているが、SO 活動の趣旨や理念に精通した者の指導のもと、SO 日本事務局の承認を受けて始めて SO 活動が可能であり、実施されているスポーツも原則的には各競技の国際ルールに則って行われている。つまり、継続的で適切なスポーツ活動の提供が可能と判断されて初めて、スポーツプログラムを開催することができるので、スポーツ活動の内容においては一定の信頼がおけるものと判断できる。

調査対象のプロフィールは表 5-1 の通りである。ボランティアメンバーに対する意識についても回答を得るため、データの妥当性を考慮し、ある程度の頻度当該活動へ子どもが参加しており、保護者自身も見学・応援するなどして活動内容について理解していることを条件とした。毎回活動場所に足を運んでいても、子どもの送り迎えをしているのみであるケースは除外した。調査協力者の抽出には、参加状況を把握している SON・青森の事務担当、ボランティアリーダーの協力を得た。

Holroyd and McArthur (1976) によると、ダウン症児の母親よりも、自閉症児の母親の方が、子どものハンディの状態や家族の統合の不足などの点でストレス度が高い状態にあった。よって、障害の診断名、年代、参加歴、子どもの年齢によって偏りが生じないように抽出した。プロフィールはインタビュー時のものである。

表 5-1 調査対象のプロフィール

調査対象	性別	年代	活動参加歴	子どもの性別	子どもの年齢	子どもの障害（知的水準）
N	女性	40 代	5 年目	男性	16	自閉症（中度）
K	男性	60 代	7 年目	女性	31	ダウン症（中度）
M	女性	30 代	2 年目	女性	8	知的障害（軽度）

第二項 方法と採択理由

方法としては、1 対 1 の半構造化インタビュー調査を行った。本研究では、知的障害者の保護者は大学生ボランティアについてどのような認識をもっており、それゆえどのような問題が生じ得るのかについての仮説形成を目指すものである。そのため、調査方法と結果の関係性は、問題発掘的な、帰納的なものになるため、質的研究法を採択した。

また、調査内容は、わが子に関すること、保護者個人の考え方や他者に対する意見なども含まれるので、聞き手と調査対象の信頼関係が十分に構築できていることが前提となる。筆者自身も 2004 年より SON・青森の活動に携わっており、SON・青森の保護者たちとの付き合いが長く、スポーツ活動場面以外の場でも、食事やレクリエーションなどで家族ぐるみの付き合いがある。調査に先立って、SON・青森の発足当時の会員である保護者にアドバイスを求めたところ、「本心を外に出す機会がないので、皆話したいことはかなりあるだろう」としながらも、「基本的には外から研究として依頼があっても、敷居が高くて協力的になれないだろうし、(日頃 SO 活動に携わっていない人には) 本心までは理解されないと、深い話はしてくれないだろう」と話していた。「(筆者) あなたの頼みであれば非協力的な人はいないだろうし、むしろ一度話をゆっくり聞いてほしいという人の方が多いのでは」との言葉を頂戴した。よりリアリティのある良質なデータを得ることができることが予想されたことも、質的研究法を採択した理由である。

インタビューの場所は、調査対象の居住地域との距離や駐車場の有無、調査対象にとって不慣れでない場所であることを念頭に置き、3 者とも近隣の社会福祉センターの会議室を利用した。実施にあたっては、大まかな質問項目は設定したが、一問一答ではなく日常での会話の体でなるべく自由に話してもらった。不明瞭な点があれば、話の妨げにならないよう配慮しながら確認した。インタビューの時間は、ひとり 100 分～150 分程度であった。調査期間は 2010 年 10 月～11 月である。

第三項 調査内容と手続き

調査内容は、スポーツ活動参加の背景、スポーツ活動参加によって生じた変化、スポーツ指導者に求める資質、大学生ボランティアへ対する認識などであり、不明瞭な点があれば、話の妨げにならないよう配慮しながら確認した。基本的には日常の会話の体で自由に話してもらい、話が脱線した場合も、調査対象が話したいことを話しきるまで聞き、区切りのついたところで本題に戻すようにした。調査内容と無関係と思われる話も全て記録した。

分析においては、質問項目ごとに、得られた回答において重要と判断される部分を抽出し、内容分析を試みた。具体的には、調査対象間の言葉の意味の解釈を行い、調査対象間での比較を行い、相違点や類似点について把握した。また、雑談をする中で調査対象の考え方を表す重要な回答が得られたり、質問内容が変わってから前問への回答となる話をすることも確認されたので、それらを関連すると判断できる質問項目の枠内において解釈した。

また、得られた回答の中には、SO 活動内で常用的に用いられている用語（例えば知的障害者を「アスリート」、保護者を「ファミリー」など）も確認されたが、文中に引用する際はそのまま標記し、（ ）内にて意味の補足を行った。語りの中で主語を省いたり、指示語を用いている場合も、基本的には得られた回答のまま標記し、（ ）内にて補足している。同様に、方言によって意味の理解が難しい回答内容に関しても、ニュアンスを変えてしまわないように配慮しながら標準的に用いられている言葉を補足した。

倫理的な配慮としては、調査協力者にはプライバシーの厳守及び、研究の趣旨、録音・フィールドノートの作成・分析手順・結果の公開といったデータの扱いについて説明し、すべての事項に同意する意思の確認を行い、研究協力への了承を得た。

第四項 信頼性の確保

質的研究法は、結果・考察に研究者の過去の経験やそのフィールドの捉え方等が反映される可能性を否定できないことが問題となることが多い。信頼性を確保するため、インタビューデータをまとめた後に、調査協力者にデータの解釈に齟齬がないか確認してもらった。さらに、質的研究に造詣が深い研究者によるスーパービジョンや、大学院生・大学生が在籍しているゼミにおいて調査結果を報告し意見を仰ぐなどの手続きもふんだ。

第三節 結果と考察

第一項 スポーツ活動参加の背景

スポーツ活動参加の背景については、NとMは自ら運動機会を求めているが、Kは自ら望んで参加したというよりは、促されて「とりあえず」参加したことが確認できる(資料4)。運動の機会を求めているNとMではあるが、当該団体を積極的に選択したというよりは、探してはみたものの、地域に他に知的障害者にスポーツ活動を提供している団体を見つけられないでいることがうかがえる。

Nは、資料1下線部①、資料5の下線部⑤、⑦から、子どもの年齢や体格、性向を考え子ども向けのレクリエーション的な活動よりも、特に「スポーツ活動」そのものを望んでいることがわかる。また資料1下線部②で、子どもの身体的な成長、年齢的な成長に伴って、母親自身が対応することが難しくなったことを伝えている。実際、Nの子どもは身長が175 cmほどあり、体格も筋肉質で筋力も持久力もあり、行動面でも突如走りだしたり、気になったものに触れないと気が済まないという様子がしばしば確認できている。外見的にも年齢的にも女子更衣室で母親が着替えさせることができないことはもとより、体力的な面からいってもNが子どものペースに合わせて運動につきあうというのは非常に困難であることが推測された。

また、NとMは共に子どもの運動機会を求めているが、子どもが体を動かすのが好きでやりたいことをやらせたいという、「子どもの余暇の充実」を第一の目的としているNに対し、Mは子どもの肥満改善と身体的不器用さの改善(資料2下線部③、④、資料3下線部⑤)という、子どもの心配される身体の状態の改善を目的としていた。動機という点においては、三者とも異なっていた。

活動への直接的な接続は、三者とも、いわゆる「他者からの紹介」によって達成されたということが共通している。特にNとMは、自らインターネットで検索したり(資料5下線部⑥)、医師に問い合わせしてみたり(資料6下線部⑨)と、積極的に探してみたものの、結局目的に沿ったものを見つけられずにいたという実態がある(資料5下線部⑦、資料6下線部⑨、⑩)。このことは、知的障害者が地域でスポーツ活動を希望する場合、どのような活動・団体があるのか、また、それはどういった趣旨で活動しているのか、どこに問い合わせるとよいのかなどの情報が、当人たちに入ってきていないことを示しているのではないだろうか。

またMは、子どもの特性に配慮してくれる団体を見つけられず、一度は一般の水泳教室に通わせたものの、排泄の失敗経験から以降の参加を見合わせている(資料6下線部⑪)。望月(2007)は、『ダウン症の女性(当時16歳)が、1998年、民間のスイミングクラブへ入会しようとしたところ、「中学生以上の障害者は断っている。ダウン症の人は突然暴れることがあるので」という理由から入会を断られた』という例を紹介している。知的障害者が一般のスポーツ団体に加入し、他のメンバー共に充実した時間を過ごすことが難しい現状あるということ、この例も示しているのではないだろうか。

これらの課題を解消するためには、地域のスポーツ活動・団体についてデータベースのような形で情報を集約し、提供できるサービスが必要となってくるだろう。もちろん、スポーツ活動を提供する側も積極的に PR 活動を行うことも重要である。

《資料1》

N:「入ったのは、やっぱし H(子どもの名前)案外体動かすのが好きなので①、それもあつたし、やっぱし男の子で、おっきくなるにつれ、母親と一緒に遊ぶつても、ちょっと私も限界に来てしまったので。②]

《資料2》

M:「おっきな理由としては…一番は肥満③、ですよ(笑) 体型ですよ(笑) 運動も、すごくその…不器用というか④。」

《資料3》

M:「M(子どもの名前)が、うん、知的な障害があると言われたのが、四歳くらいなんですけど…。それまで、こう、歩く格好とか、こうおじさんみたいというか、なんというかこう(実際に腰を曲げてみせる)、お尻がこう、変な動き方というか。よく転ぶとか、何もないところで転ぶ⑤。」

《資料4》

K:「施設に入ってたわけね。その施設長が、こういうのあるよってことで、オープン参加してみないかって言われて、なんのことかさっぱりわかんないんだけど。いいのかなって、娘なんかスポーツだめだよって、一番苦手なのがスポーツだから(笑) 大丈夫だって言うわけさ。だから、お願いしますってお任せしたわけさ。」

《資料5》

N:「スポーツ系が好きなので、パソコンとかでも検索してみたんだけど、案外こういう子どもたちの活動ってなくて、⑥ちょっとこう…考えてたんですけど、(学校の)先生に教えていただいて、はい、それで入りました⑦。リズムのとかのはね、やっぱしあんだけどもHも年もあれなので⑧。」

《資料6》

M:「そういう、訓練するようなどこありますかって(医者)に聞いたんですけど～…ないって言われて。⑨他にも色々運動できる場所探してたんですけど…やっぱり知的な障害もあって、みんなと同じにやることもできなかった⑩。それで水泳は考えたんですけど、そこでちょっとその…排泄の失敗があつて、なかなか機会を見ていたんですけど⑪。でちょっと H さんから聞いて、うん、やってみようかなって。はい。嬉しかったですごく。」

第二項 スポーツ活動参加後の子どもの変化

活動参加後に子どもに何か変化があったかどうかについては、3人とも変化があったと回答した。大きく分類すると、「意識の変化」「コミュニケーション能力の変化」「体力の変化」「余暇の充実」が挙げられた。

意識の変化としては、「自分に自信が付いてきた（資料 9 下線部⑥、資料 11 下線部⑧）」「勝負ごとに一生懸命取り組むようになった（資料 12 下線部⑨）」「自己の体重を意識するようになった（資料 13 下線部⑩）」などが挙げられた。これは SO 活動の特徴が関係していると思われる。SO において実施されるスポーツは全て、一部 SO 独自のルールを設けながらも、基本的に各競技の国際ルールに則って行われる。競技会では公式な資格を所有している審判ボランティアがジャッジを行うので、ルールには厳格で、失格処分となる場合も当然ありえる。予選の結果をもとに、決勝は技能が同程度の選手同士があたるような組み分けを行うが、グループ内で結果の良かった順に明確に順位づけられる。ルールに対して厳格であるからこそ同じ条件で競えるのであって、その中で勝ち負けが明確になるからこそ、やる気が喚起されたと推測される。真剣に取り組むようになるからこそ、自分自身でできることが増えたこと、習熟度が上がったことが実感でき、それが自信につながったのではないだろうか。

コミュニケーション能力の変化としては、「コミュニケーションがとれるようになってきた（資料 7 下線部②）」や、「忍耐力がついた（資料 14 下線部⑪）」、「皆と一緒にうまくやっていこうと考えるようになった（資料 14 下線部⑫）」ことが挙げられた。これも、1～数人の先生からの一方的な関わりが主である学校の授業とは違う、子どもから定年退職者まで幅広い世代のメンバーが入り混じってスポーツ活動を行っているという、SO 活動の特徴が関係していると思われる。指導者も、スポーツプログラムのメニューは事前に設定しているが、内容は自分達の裁量で、その時々の様子をみながら柔軟に対応できるので、応答性のある指導が可能である。そのことが、コミュニケーション能力の育成に一役買ったとは考えられないだろうか。

体力の変化としては「持久力が付いた（資料 8 下線部④）」「姿勢が良くなった（資料 9 下線部⑤）」が挙げられた。スポーツ活動は身体的な活動であるので、実施される競技にもよるだろうが、持久力や筋力、バランス感覚などが向上することは十分に考えられるものである。また、資料 7 下線部①、③や、資料 10 下線部⑦からわかるように、知的障害者自身が活動自体を楽しみにしていることから、活動参加前よりも余暇が充実したことも考えられる。今回得られた回答からはネガティブな変化を示すものは確認されなかった。

これらは、あくまでも保護者がそう感じるということなので、単純に発達の過程で自然と起こりえたものであったかもしれないし、スポーツ活動に参加したこと以外の要素によってもたらされた変化である可能性も否定できない。しかし、適度な運動は自信をつけさせる効果があること（原,2006）や、スポーツ・レクリエーション活動をおこなっている知的障害者は、そうではない群と比べて、生活満足度や自立度などが高いこと（南條,2005）

が報告されている。同様に Dykens and Cohen (1996) も、SO 活動に参加している知的障害者は、非参加群と比較して社会的な能力と自己認識において高い数値を示したことを報告している。これらのことから、スポーツ活動が彼らの心身に少なからずポジティブな影響をおよぼしたことも考えられるのではないだろうか。

また、仮に保護者が感じた成長が、スポーツ活動への参加に関わらず本人がすでに備えていた能力であったとしても、それはこれまで発揮の機会もしくは保護者が確認する機会がなかったことを示すものであって、スポーツ活動によってそれが達成されたと解釈できるのではないだろうか。仮に、保護者の認識しているようなポジティブな効果がスポーツ活動によってもたらされたものでなかったとしても、子どもの楽しんでいる姿や成長を実感するという経験は、保護者にとって喜ばしいものであり、精神衛生上望ましいことであると考えられる。いずれにせよ、子どもの楽しんでいる姿が確認できたり、保護者自身でわが子の成長を実感できたりすることによって、次回以降の参加が意欲的になることが推測される。

《資料7》

N:「やっぱり、自閉症の子どもたちってコミュニケーションとれないので、はじめは、うん、一人の世界にこもって、SO に行ってもどうかなって思ってたんだけど、やっぱり、行くごとに、すぐ行きたがってるし、O さんみたいなボランティアさんいるとこで、楽しいみたいでやっぱり。その週の土曜日とかになれば、「明日 SO だよ」って言えば、すごく楽しみがっていたので、あ、入ってよかったなとは思っていました①。それからコミュニケーションなんか少しずつですけど、とれるようになってきてるし②、すごく楽しんでやっているので、入ってよかったなとホント思っていました。H(子ども)も、ま、言葉では話せない分行動とか雰囲気ですごいわかるので。③」

《資料8》

N:「体力面はすごく、持続性でもねーけども、そういうのは体力的に付いたのは、すごくあります④。うん。だからさ、もう少し早く始めてればよかったと思うの〜…。」

《資料9》

M:「やっぱり、姿勢がすごく良くなった。姿勢が、体のこう、すごいふにやふにや感が、すごく芯が入ってきた⑤感じの。運動会も、今年は四人中三位とか。すごいでしょ？(笑) 真面目に走ってさ〜。前だったらけっこうやる前にもう、こう、だらっていかさー。自分に自信が付いてきたと思うんですけど⑥。」

《資料10》

M:「いや、本当に、知ってるお兄さんお姉さんいるからすごい嬉しいみたいくて、楽しんでやってます⑦。ね、やさしいきれいなお姉さんとかいっぱいいるじゃないですかー(笑)」

《資料11》

K:「凄い変化あったの。娘がスポーツが大の苦手だったわけなのさ。走るのも遅くて、養護学校時代のいつも、びりっけ、そのびりっけもそうとう遅れたびりっけ。それが、オープン参加して、金メダル貰ったわけね、みんなさくれたようなもんなんだけど。自信ついたと思うんだよ、自分でもやれるんだって自信ついたと思うわけ⑧。」

《資料 12》

K:「競うのもあんまり苦手なわけさ、したんで(なので)前はマイペースで走って、まったくのマイペース。走ろ！！ たってゆっくり走るし(笑) いくら走ろって、自分で競うのが嫌だわけさ。誰かが勝ったり何だのって。それがまったく変わってしまったのさ。一生懸命競うとかそういうのはね、本当に変わったのさ⑨。」

《資料 13》

K:「それで、もう一つはね、体重ね、すごく気にするわけさ。一時期 60 キロくらいあったわけさ、うん。でそれが今 53 くらい。すごい意志でさ、食事もやっぱりさ、肉とかも好きだんだけど、ちょっと残してみたりさ。食事制限自分で、自己管理できるようになったね。食べすぎでないの？とか言わなくても自分でコントロールするようになったね⑩。うん。なんか、体重が増えれば走るのが遅いとかで自分なりに考えたらしい(笑) SO のおかげでないかなと思ってさ。そりゃあ親言っても駄目さ。ああ。いくら言たって駄目ですよ。自分でつかんだんでないかな。」

《資料 14》

K:「内面的にはねやっぱり、忍耐強くなってるね⑪。団体生活、みんなで一緒にやってるそういう環境だから、ま、今でもだいぶわがままなところあるけども、それが取れてきたみたいだった感じだね。我慢する力。あとま、うまくやっていこうっというそういうのね⑫。まだまだ足りないけどね笑 みんなと一緒にこう、中に入って、周りの人に刺激されてるからだともうんですよ。」

第三項 スポーツ指導者に必要な資質

スポーツ指導者に必要な資質としては大きく3つが挙げられた。1つ目は、障害特性や、子ども個々の性格についてなど、「子ども個人についての知識」が豊富であることである（資料15下線部①、②、資料16下線部③、資料17下線部⑤）。「こういう特徴を持つてる子どもたちだっていうのをわかって、SOに来てもらわないと（資料15下線部②）」という回答が示すように、保護者は、子どもの特性を把握し、それに即した指導を求めている。

2つ目は、筋肉の動かし方（資料18下線部⑥）や、競技における知識・技能（資料21下線部⑪、⑫）といった、「スポーツについての知識」が豊富であることが挙げられた。Kが「SOは専門的なあれでないって言うんだけど、うん、それでもやっぱりそういう勉強していけば、説得力が生まれるんでないかと（資料21下線部⑫）」というように、スポーツにおける専門性についても重要視していることがうかがえる。

3つ目は、「子ども個人についての知識」「スポーツについての知識」に繋がる部分があるが、「指導者としての心構え」と解釈できる内容であった。具体的には、「子どもたちのことわかっていない人はおどおどしている（資料16下線部④）」、「まず褒める。でもルールはしっかり教える（資料19下線部⑦）」「アスリート（知的障害者）に対して差別しない（資料20下線部⑧）」、「動き見てれば私たちだってわかるわけ、この人あんまり大したことないとか、そういうの感じてるわけさ（資料21下線部⑬）」といったことが挙げられる。保護者は、指導者である以上、子どもたちの障害についてまたはスポーツについては、ある程度勉強してくることが必要であり、そもそもそういった意識をもって臨んでほしいという認識をもっている。指導者としての自覚や威厳、気構えが求められている。

また、保護者は、上記の要素を満たしているかそうでないかが、指導者自身の様子から見て取れるということを指摘している（資料16下線部④、資料20下線部⑩、21下線部⑬）。指導者のことをよく観察し、接し方や指導の仕方、姿勢などから個別に評価をしていることが確認できる。

《資料15》

N:「やっぱり、この子どもたちの性格とか、特徴ちゃんと覚えてもらえないと①、けがもするし。前もって自閉症とか、学習障害者の子どもたちのこともちゃんと、こういう特徴持つてる子どもたちだっていうのをわかって、SOに来てもらわないと②。」

《資料16》

N:「ちゃんと向き合ってる子どもたちとこう、接する…してないのかなっていうボランティアさんも何人かみられてたのでー。たぶん、こういう子どもたちのことちゃんとわかってなくて入ってきたのかなって、そういうのもちよっとみられるかなって思ってたので③。ま、難しい、たぶん学生さん忙しいのもわかるんだけどさ。だから私すごくわかるのさ、積極的に、こういう子どもたちのことわかって入ってきてる人見れば堂々としてるしさ、やっぱりあんまりこういう子どもたちのことわかってなくて入ってきてれば、おどおどしてどうして接していいかわかんねってするボランティアさんも見かけるので、あ、この人やっぱりあんまりわからなくて入ってきてるんだべかって、やっぱりわかるので。親も見ればさ④。」

《資料 17》

M:「障害のある子なので…その、障害も様々ですよね。私は今のは満足なんですけど、あえて言うならば(笑)いろいろな障害の知識っというか、そういうのあるのかな～？と思いますけど⑤…そういうの、どう…だろ？」

《資料 18》

M:「つまづいてる部分を集中的に教えてくれる。それがなかなかできないことだと思うんですよね。例えば逆上がりとかするとしても、私とか練習すればできるものだと思ってたんですけど、それまでいくまでのこう手の動かし方とか、こう筋肉がどうゆうふうに動くとか、どこの部分がどうゆうふうに動いてるのかとか、そういう、やっぱり知識があつてこそ部分がわかると思うんですよね⑥。」

《資料 19》

K:「個人的な考えなんだけど、まずほめてもらいたい。それから、いいことと、やっちゃだめなこと、ルールね、これはやっぱりきちんと教えていただきたい⑦。時間かけてでも、あやふやにしないで、大変だと思うけども。」

《資料 20》

K:「それから、あとはアスリートに対して差別しない⑧。例えば、この子はちょっと、うん…何するにもうまくいかない、この子は何でもハイハイって言うだとか、個性もった様々なアスリート(知的障害者)いますね。でも…(笑)。逆にその、指導しにくいアスリートに対して手をかけてやる、指導しやすいアスリートはそんな手かけなくともできても、指導しててもなかなかうまくいかない子、いるじゃない。誰とはいわないけどもそういう人たちに、一人じゃだめな時にみんなで⑨。大変だと思うけど、そこをさ。親御さん見てるからね。自分の子どもの、ほれ、親であればすべて知ってるわけだから、親でもあましてる(手にあまる)、それをコーチがどういうふうにしてるかわかってるからね⑩。どの子にも…やっていただければ、良いかなという風に、感じてますけどね。」

《資料 21》

K:「やっぱりあの専門的なね、知識ですね。種目によってその、もう本当に身につけていた方が説得力あるし⑪。SO は専門的なあれでないっというんだけど、うん、それでもやっぱりそういう勉強していければ、説得力が生まれるんでないかと⑫。(指導者)個人の自信にもつながるんだよね。これぐらいの勉強してきてるんだよと。そういう自信がないからね、教えないというのもあると思うんだよね。自信があればやっぱりそりゃさ、落ち着いてさ、教えてられる。動き見てれば私たちだってわかるわけ、この人あんまり大したことないとか、そういうの感じてるわけさ(笑) コーチずっとさ、みてたらこの人の言うことは聞こうかなってなんて(笑)⑬」

第四項 ボランティアに対する意識：ポジティブな側面

ボランティア全体に対しては、三者ともに概ね肯定的な印象をもっており、提供されているサービスに対しては満足していると判断できる（資料 24、25、27、28、29、30、31、32）。しかし、直接スポーツ指導を行っているボランティアに対しては感謝の気持ちが強い一方で、現行の組織の体制や全体の雰囲気に対しては不満を抱いていることも確認された（資料 27 下線部⑥、資料 32 下線部⑭、⑮）。

また、SON・青森においては、ボランティアのほとんどが大学生であり、特に継続的にスポーツ指導をおこなっていると判断されるボランティアについては、該当者の全てが大学生であった。このことから、保護者は「ボランティア=大学生」という認識で回答していることがうかがえ、この点は考察の視点に含める必要がある。

保護者は、ボランティアに対する意識としては、ポジティブな側面とネガティブな側面の両方について回答した。まず、ポジティブな側面としては、参加している知的障害者と年齢が近いことから、知的障害者にとって親しみやすいということが挙げられた（資料 25 下線部④、資料 30 下線部⑫）。知的障害者はプライベートな時間を友人と過ごすことが少ない傾向にあり（中山,2000）、山田（1990）は通所施設に通う知的障害者の保護者は「友だちを作ってほしい」「友だちと遊んでほしい」というニーズがあることを報告している。また、於保（2004）の調査でも、10代の知的障害児の親は、卒業後の子どもの余暇活動について期待したいこととして、親以外の人との交流についての回答が最も多かった。今回の結果も、知的障害者の親は子どもの交友関係に対して不安を抱えていることがうかがえ、先行研究と同様であることが確認された。調査対象の所属する団体においては、参加している知的障害者の年齢は最年少が7歳で最年長は32歳でその多くが中学生や高校生であり、ボランティアもそのほとんどが20歳前後であった。指導場面でこそ指導者―被指導者という関係性になるであるが、N（資料 25 下線部④）の言うような友人的なかかわりは、同世代のボランティアだからこそ可能なことだと考えられる。

また、発想の豊かさや、バイタリティについても、若い世代ならではの要素として認識されていた。具体的には、「そういう発想あるのってすごいよね。いや～、考えたなーと思って。親でもここまで考えられないなと思って、今日それはすごくすごく感心して見えました。さすがわけはんで（若いから）（資料 24 下線部③）」、「そういう頭もちょうどきれてるときだから、発想もね、すごい…だからいい時なわけさ、いい時（資料 30 下線部⑪）」、「そして若い人は体力もあるしさ、それとあの、行動力やっぱりあるわけでしょ（資料 30 下線部⑩）」などである。SON・青森においては、教育学部か社会福祉学部の大学生ボランティアがほとんどであり、大学の授業で知的障害者や自閉症者に対する具体的なアプローチ方法など、基本的な知識を修めていることが考えられる。

さらに、「若い人がそういう活動（知的障害者スポーツ）を通して社会さでてくわけでしょ、そうするとあの…いろんな人と関わる時点でさ、そういうのをね、こういうの（知的障害者スポーツ）もあるんだよってね、いっぱい広げてもらえるんですよ（資料 30 下線部

⑨)」というように、今後、社会人となったときの活躍を期待できる点も挙げられた。Mが「お母さんがたは連れて行って、見てるだけですがごく満足してるって状態なので、誰かが見ててくれるってだけですごいき楽しいものなんですよ（資料 28 下線部⑦）」と述べるように、日々の子育ての大変さから、子どもを預かってくれるボランティアに対するニーズの高まりがあるのではないだろうか。特に M は、以前、一般のスイミングスクールで適切な指導を受けられなかった経験がある（資料 6）。社会に出てから、SO でのボランティアの経験を生かして、知的障害者のスポーツ活動・知的障害者に対する社会の認知をよりよいものにしてほしいという、親としての期待もあるように思える。

大学生が多いという SON・青森の特性から、大学生を意識した回答が多かったものと思われる。しかし、概観して「大学生」の特性というよりも、「若年層」全体に当てはまることであると判断できる。ポジティブな側面として認識されていることから、元気で思考に柔軟性があり、将来に期待ができる若年層のボランティアに対するニーズが確認できたのではないだろうか。

第五項 ボランティアに対する意識：ネガティブな側面

一方、ボランティアに総論としては好印象ではあるが、部分的にはネガティブな意見も挙げられた。共通するのは、指導者間にある「質」の差であった。三者ともインタビュー中、ボランティアによって、挨拶や接し方、姿勢などが大きく異なることを何度も強調していた（資料 22 下線部①、資料 29 下線部⑧、33 下線部⑩）。良い例として挙げられたボランティアは資料 32 の O と M の他に 3 名確認されたが、ボランティア O と M は三者とも共通して名前を挙げていた（資料 35）。このことから、ボランティアを呼称する際は、便宜的に「ボランティア」や「学生さん」としているが、評価については一括りではなくボランティアそれぞれに対して個別に行っていることが確認できる。そして、そのボランティア内の格差については、良く思っていないようである。

保護者の評価軸としては、「こういう子どもたちのことやったりわかってくれる人でないと、入ってきても大変かな～って（資料 22 下線部①）」、「でも、名前覚えてるのはやっぱり目立ってるお兄さんお姉さんのお名前ばかりですよー（資料 29 下線部⑧）」、「弱音吐かないでしょあの人。責任感も強いし（資料 33 下線部⑩）」などから判断するに、前述の、指導者に求める資質について満たしているかどうかが大きな判断材料となっている。資料 20 が顕著に示しているように、保護者は、ボランティアの参加の頻度や知的障害者に対する知識・接し方、指導者としての姿勢などについて、とてもよく観察し、「できる」指導者に対しては高い信頼をしていることがうかがえる。

また、「いや、O 君がそうしてずっとやってってればいんだけどもさ（笑）。やっぱし学生ったとこで、いずれはね。もう少し K さんみたいな社会人の方が何人かいてくだされば私たちも安心してやれるし（資料 26 下線部⑤）」、「2 年…生くらいまではね、活発にこう参加できる。学生が 3 年 4 年になったらそうはいかない。ええ。でも、私達はそういうのを期待してるわけさ（資料 31 下線部⑬）」、「長くやってもらいたい（資料 34 下線部⑰）」などの回答からは、子どもの指導を長期的に行ってほしいという願いがあることが確認できる。さらに N が、子どもに指導するボランティアはあまり変わらないで一定であることで、より子どもとのいい関係性を築けることに言及している（資料 23 下線部②）。これらのことから、長期的な、一貫した指導が求められていると考えられる。

遠藤（2008）は、発達障害児の保護者が、子どもの余暇活動など、外部資源から支援を求める際、ボランティアの対応可能なニーズの制限を踏まえながらも、子どもに対する個別的な対応を強く望んでいたことを報告している。前述のスポーツ指導者に必要な資質についても、子ども個人への知識が豊富であることが挙げられたように、より、個に応じた適切な指導を求めることから、なるべくわが子にスポーツ指導をおこなうボランティアを一貫してほしいという思いに至るのではないだろうか。

これは、大学生ボランティアが多いという SON・青森の状況を反映したもので、大学生ならではのデメリットであると理解できるだろう。子どものことをよく理解した状態で指導してもらうためには、ある程度長期的な接触経験が必要になる。しかし、大学生は進学

のために他県から来ている場合もあり、卒業後に当該地域で就職するとは決まっていない。むしろ、得られた回答からは、過去に卒業後に当該地域周辺で就職をした者がほとんどいなかったこと、もしくは、卒業後に近隣地域に就職をしたとしても、環境の変化や職場の協力、忙しさなどから大学生のころのように参加できていないことが推測される。つまり、大学生ボランティアは、大学の卒業がそのまま SO 活動の卒業となってしまうという認識があった。信頼のおける指導者として活躍できるようになっても、いずれいなくなってしまう、また新たなボランティアに一から子どものことを理解してもらうということを、できるならば避けたいと考えているのではないだろうか。

《資料 22》

N:「だからやっぱり格差がありすぎる①。一生懸命な人は一生懸命、あんまり、うん…なんてか…あんまり、来てもいいやって人…ま、一生懸命やってると思うんですけども、なんかそういう風に見えるかな～。こういう子どもたちのことやったりわかってくれる人でないと、入ってきても大変かな～って①。」

《資料 23》

N:「やっぱり一定のボランティアさんつくと、そのボランティアさんがすごく気に入ればずっと、人について懐いてもいくし、活動にもすごくのめりこむって言うか、そういうのもあるから、SO もやっぱり一人ひとりに専属でもないけども、そういうのも②、…学生さん足りないのもわかるんだけども、そうのもあっても、いいかなって。」

《資料 24》

N:「(プログラム用に作った支援ツールの話をし) そういう発想あるのってすごいよね。いや～、考えたな一と思って。親でもここまで考えられないなと思って、今日それはすごくすごく感心して見てました。さすがわけはんで(若いから)③。」

《資料 25》

N:「学生さんのボランティアさんはやっぱり年も近いから、友達感覚ってするか、そういう感覚で接してくれてるので、それは私はいいと思ってました④。」

《資料 26》

N:「いや、O 君がそうしてずっとやってればいんだけどさ笑 やっぱし学生ったとこで、いずれはね。もう少し K さんみたいな社会人の方が何人かいてくたされば私たちも安心してやれるし⑤、ま、学生さんと社会人とうやってくのも大変かなとも思うんだけど。」

《資料 27》

M:「もう、ありがたいな～と思ってます。はははは、いやほんとに(笑)。事務的なあれにはちょっと不満ありますけど、学生ボランティアさんにはほん…と～にありがたいだけで⑥。」

《資料 28》

M:「お母さんがたは連れていって、見てるだけですごく満足してるって状態なので、誰かが見てくれるってだけですごい嬉しいものなんですよ⑦。」

《資料 29》

M:「本当に、知ってるお兄さんお姉さんいるからすごい嬉しいみたいくて。楽しんで。ね、やさしいきれいなお姉さんとかいっぱいいるじゃないですかー(笑)。でも、名前覚えてるのはやっぱり目立ってるお兄さんお姉さんのお名前ばかりですよー。んー…。Oさんとか、Mさんとか、やっぱり。Aさんもねー⑧。」

《資料 30》

K:「(大学生の)いい面はね、若い人がそういう活動を通して社会さでくわけでしょ、そうするとあの…いろんな人と関わる時点でさ、そういうのをね、こういうのもあるんだよってね、いっぱい広げてもらえるですよ、学生さんたちにね⑨。若い時にそういうボランティアやるわけだから、現役のときやるわけだから、私はずっと忘れないと思うんですよ。そして若い人は体力もあるしさ、それとあの、行動力やっぱりあるわけでしょ⑩。そういう頭もちようどきれてるときだから、発想もね、すごい…だからいい時なわけさ、いい時⑪。アスリートとあんまり年の差もはなれてないから、アスリートも慕ったりなんか、指導面でもさすごいと思うんですよ⑫。」

《資料 31》

K:「(大学生の)悪い面っていうのはないんだけど、あの…青森の場合に限った話なんだけど。私たちからみて、2年…生くらいまではね、活発にこう参加できる。学生が3年4年になったらそうはいかない。ええ。でも、私達はそういうのを期待してるわけさ⑬、学生さんたちは両方挟まれて大変だと思う。うん。ファミリーは期待をして『来てくれねか』っていうね、でも実習とか卒業あって就職してなんだりして、すごい大事で、そういうのもついてくる。」

《資料 32》

K:「その、学生さんがすごく真剣に取り組んでると思うんですね、すごく。純粋な気持ちで。ただ、一人前に認められてないとか、そういう不満がいっぱいあるんでないかと思ってんだよね⑭。ボランティアって学生も社会人も一緒でしょうよ。私はそう思ってるわけさ。同じレベルでさ、自分の、お互いに持ってる力を提供していくのがボランティアだと思ってるから。無理しないでね。学生さんにさ、そういう、社会人のさ『なんだ学生か』という雰囲気かね、あると思うんだね。ええ。うちは年齢も職業も何もみんな関係ないと思ってるわけさ、みーんなおんなじレベルでやりましょうよと⑮。」

《資料 33》

K:「やっぱりさ、Oさんは別格だけどさ、MくんいないとSO成り立たない。うん。弱音吐かないでしょあの人。責任感も強いしね。大黒柱だからさ、大黒柱が崩れればウチ崩れてしまうんだ⑯」

《資料 34》

K:「いずれにしてもあれでねえかね、あんまりあの、100%はやんなくてもいいと思うんだえね。うん。100%でなくてあと10%さ、なんかの時に残しといて、それでフルでやればさ。なんかあった時に10%頑張った感じで、それよりかは長くやってもらいたい⑰。」

《資料 35》

良い例として個人名を挙げられた大学生ボランティア

	N	M	K
大学生ボランティア	O、M、S、A、Y	O、M、A	O、M

第四節 小括

今回の調査から、以下のことが示唆された。①保護者は、スポーツ活動を通してわが子にポジティブな変化を認めているが、その前段階で、ニーズに適したスポーツ活動を地域で見つけることが困難である実態があること。②スポーツ指導をおこなうボランティアに対しては、子どもについての知識、スポーツについての知識、またそれらを修めようとする指導者としての高い意識が求められると考えており、ボランティアの行動や姿勢から個別に評価をしていること。③ボランティアに対して、知的障害者と友人的な関係性が築きやすい点や、発想の豊かさなどから若年層全体に対するニーズがあること。④保護者は、子どもへの長期的な一貫した指導を求めている、大学生は卒業後に活動参加が難しくなることがデメリットとして捉えられていること。である。

Keith (2004) は、スペシャルオリンピックスにおいて障害のある人となない人の間に生じる社会的統合は、短期間のものになるであろうし、友情や社会的ネットワークの発展につながるとは考えにくいと指摘している。確かに、大会当日のみのボランティアなど一過的なイベントにおいては、そのような批判も当てはまるかもしれない。しかし、日々のスポーツ活動を共にするなかで、ボランティアと知的障害者の間においては、指導者―被指導者という関係性を超えた友人関係が構築することが可能であることが示唆される。実際、SON・青森の例では、SO 活動で知り合ったボランティアと知的障害者が、個人的に連絡先を交換し、プライベートでボウリングやカラオケに行くという例は多くあった。行動を共にする対象が個族に限定されがちな知的障害者にとっては、ボランティア、特に年齢が近いボランティアとの接触があることは、交友関係を広げるという意味においても、重要な意味を持つのではないだろうか。もちろん、プライベートでの行動については、監督責任や事故・怪我などの危険性も考えなければならないため、保護者も交え、事前に行動範囲や活動内容、本人同士の連絡方法などについて議論が必要な場合もあるだろう。

保護者は、ボランティア指導者に対しては、参加状況や知的障害者との接し方、指導の仕方などから、それぞれ個別に評価をしている。これは、大学生や社会人といった、日常生活における立場は関係なく、当該活動においてどのような活動実態があるかという、実績においてのみ評価されているといってもよい。つまり、将来的な活動持続性という点においては、卒業に伴う転居が見込まれる大学生に対しては期待しにくい、今現在、直接的な指導において「大学生」という社会的地位に対しては別段不都合は生じさせていないものと考えられる。指導者としての知識や経験、規範などが身についているかどうかことが重要ということなので、年齢や社会的地位に関わらず、ボランティア本人の努力次第で十分に指導者としての役割を果たし、保護者からの信頼を得ることが可能であることを示している。事実、大学生であっても保護者から絶大な信頼を受けているボランティアも数名確認されている（資料 35）。

一方で、実力主義である分、「ボランティアの皆さんには感謝している」としながらも、実際にはその信頼において大きな差が生じている。松尾（2002）が指摘しているように、

スポーツ分野のボランティア活動においては、ボランティア精神が過度に強調されており、ボランティアがスポーツの専門性を追求することは馴染まない現状がある。マンパワーを必要とし、ボランティア参加者の裾野を広げたい知的障害者スポーツの現状においては、指導者としての質を問われることは、負の作用をもたらす危険性も孕んでいるとも解釈できる。また、今野（2007）は、障害者親の会の活動を継続していく中で、大学生へのボランティア要請が増えつづけており、一部の学生への過重負担という問題が生じていることを報告している。社会的な責任は生じるものの、あくまでも各自の自主性によって行われるボランティア活動として、保護者のニーズに対してどこまで応えていくのかという線引きについても意識しなければならないだろう。

第五節 今後の課題

本研究が抱える課題としては、今回得られた結果が、「青森県弘前市周辺」という地域特有のものであった可能性については否定できないことである。例えば、保護者がスポーツ活動を探したにもかかわらず発見できなかったことなど、弘前市におけるネットワークの整備不足や、そもそも知的障害者を受け入れているスポーツ団体がほとんど存在していなかったことなどが考えられる。インターネット検索や社会福祉協議会にて確認したところ、弘前市においては、隔週で開催されるリズム運動のようなものや一過性のイベントなどは開催されているが、定期的にスポーツ活動を行っている団体は、サッカーチームが 1 つと体操教室が 1 つだけであった。しかも、どちらも 2 週間に 1 度といった頻度であり、サッカーチームは主に青年期の知的障害者、体操教室は主に ADHD や高機能自閉症などの発達障害の児童を対象としていた。SO のように小学校低学年から 30 代以上の人まで幅広く受け入れ、毎週開催している団体は確認できなかった。以前、とある都市部の SO の事務局長から「(保護者と) すごくもめて、じゃあもういいです、今度から他のところいきますからって、何人か辞めちゃって」と、脱会し他の団体へ加入した保護者の話を聞いたことがある。SO も選択肢の一つとして考えることができる地域と、他に選択肢がなく SO に参加せざるをえない地域とでは、保護者の意識も変わってくるのではないかと考えられる。

また、SON・青森においては、直接的なスポーツ指導をおこなっているボランティアのほとんどが大学生であったことも、地域差という点で考慮しなければならない。SO 日本事務担当の方の話によると、「若手のボランティアを確保するのはどの地区も苦戦しており、ボランティアの高齢化が実態としてある。青森は若手の確保に成功している例」とのことであった。SON・青森が若年層ボランティアの多い地域であったことで、保護者の若年層に対する期待や、年齢や社会的地位によらずに指導能力の高いボランティアを必要としている実態が確認されたが、様々な世代のボランティアの協同体制についてや、保護者の高齢のボランティアに期待することなどについては把握が困難であった。

今後は、地域における利用可能な施設・団体数の差、ボランティア層の差異についても踏まえた調査、分析が必要となると考える。

第六章 研究四

スポーツ指導をおこなうボランティアに対する

知的障害者の意識

第一節 目的

一般的に子どもにとって充実した余暇生活を送ることは、充実した健全な人間形成に大きく影響するものであり、生活の質を高めることにもつながる。それは障害者においても同様である。石黒ら（1999）は、保護者による調査から余暇活動に参加した知的障害児が「自立の意識」「対人関係」の向上など、プラスの要素としての効果が現れていることを示した。充実した余暇活動は生活になくてはならないものであるといえる。特に、スポーツ活動は、自己の体調管理が困難である知的障害者にとって、充実した余暇を過ごすための手段としてだけでなく、肥満対策や健康維持の手段としても重要な役割を果たす、有意義な活動である。また、陶山（2006）は、障害者のスポーツ活動について、今や医療の手段、リハビリテーションであるとともに、生涯スポーツ、レクリエーション、パラリンピックのようなエリートスポーツとしての側面をもっているとし、生涯を通じたスポーツの振興が大切であるとした。「障害者白書」の中でも、毎年、「スポーツ・文化芸術活動」という項目が日々の暮らしの基盤づくりという章の中に盛り込まれていることから、障害者にとっての身体活動は単なるレクリエーションという枠を超え、自立・社会参加に繋がる大きな要因であることが窺える（平成 19 年度版障害者白書 110 頁）。

しかし、スポーツ活動に取り組むことの意義は認められながらも、「障害者がスポーツに親しみ、喜び楽しむ」ことの権利の享受に対する社会的認知や理解は歴史的にも浅く、支援体制や受け皿がまだまだ少ないのが現状である（渡邊,2006.）。実際、我が国の知的障害者の余暇の傾向としては、多くはテレビ観賞や音楽鑑賞など室内で過ごしており、運動・スポーツ活動の機会が多くない現状にあることが報告されている（高畑・武蔵,1997、石黒ら,1999、中山,2000）。特に、知的障害者は収入が少ないなどの経済的要因、会場の設備が整っていないなどの物的環境要因、指導者がいないなどの人的環境要因などから、スポーツ活動への参加が制限されている現状がある（望月,2007）。

このような社会背景から、これまでは、知的障害者のスポーツ活動は民間やボランティアによって支えられてきた。近年は、地域のスポーツクラブや団体におけるボランティアの重要性が取りざたされており、我が国の代表的なスポーツ組織・団体の半数がボランティアを活用している現状があるという（仲澤, 2002）。ボランティアが果たすことのできる役割は大きく幅の広い活躍が期待されており（野村, 2002）、特に非営利のスポーツ組織にとっては、価値ある人的資源を有効に使うことが、組織の成功への 1 つの鍵となっている（松岡・小笠原,2002）。元来ボランティアによって支えられてきた知的障害者のスポーツ活動においては、一層ボランティアの活躍に期待する傾向が強い。

スポーツ活動を実施するため、ボランティアをいかに確保していくかという視点で、ボランティアの参加動機や継続意欲については、その実態を把握すべく研究がすすめられてきた。しかし、知的障害者のスポーツ活動において、実際にボランティアが知的障害者本人からどのような認識をされているのか、またそれ故にどのような行動をすることが、より円滑なスポーツ活動の実施につながるのかということは実践的に明らかにされていない

い。ボランティアメンバーは一般市民の有志者によって構成されることが多いため、必ずしも全員がスポーツ活動に造詣が深いということは保証されていない。いくら余暇の充実・肥満対策などの効果が期待できる活動であったとしても、知的障害者本人が、ボランティアという必ずしも専門性を備えているとは言い難い対象からスポーツ指導を受けることに不都合を生じさせていないのか、この点を検討する必要があると考える。

よって本研究は、知的障害者のスポーツ活動において、知的障害者とボランティアとの相互作用から、ボランティアは知的障害者からどのような認識をされているのかを明らかにし、ボランティアの効果的な活用方法について検討することを目的とする。

第二節 方法

第一項 研究方法と採択理由

本研究では、知的障害者がボランティアにどのような認識を持っているかを把握するため、知的障害者とボランティアの接触場面を観察した。今回、スポーツ活動場面における知的障害者とボランティアの相互作用を観察するため、知的障害者に年間を通じてスポーツ活動を提供するボランティア団体である「スペシャルオリンピックス日本・青森（以下 SON・青森）」の協力を得た。観察の方法としては、観察者がフィールドとの関わりをもちながらデータを取る、参与観察法を採用した。理由としては、質問紙調査やインタビュー調査では、調査対象の言語能力やその日の気分などによって、意見を十分に表現しきれないことが考えられたことが挙げられる。また、見知らぬ人物があらたまって観察に来る場合、少なからず視線を意識してしまったり、見られていることで緊張してしまったりと、普段とは違った様子を見せてしまう可能性があることが懸念される。しかし、筆者は日頃 SO 活動にボランティアとして参加しているため、行為者としても観察者としても、フィールドにすることが何ら違和感を与えるものではなく、むしろ、普段のようにスポーツ指導を行わずに、観察に徹している方が、周囲からの注意を引いてしまうと考えられた。よって、普段のありのままの様子を観察するため、参与観察を採用した。

観察の期間は 2008 年 1 月から 2009 年 9 月までで、SON・青森での活動場面は 41 回であった。具体的な場面としてはアルペンスキープログラム 14 回、バスケットボールプログラム 13 回、陸上競技プログラム 6 回、フットサル体験プログラム 5 回、食事会 2 回、レクリエーション 1 回である。スポーツ活動は全て 1 回の活動時間は 2 時間前後であり、トレーニング開始までの準備時間や、休憩時間、終了後の後片付けや雑談の時間における相互作用についても観察の対象とした。

第二項 観察の対象と視点、及び分析

観察は、主に知的障害者とボランティアの相互作用場面についておこなった。観察及び記述の基本的視点として、相互作用場面を可能な限り詳細にノートに記録することに留意した。その際、知的障害者へのスポーツ指導、スポーツプログラムの進行を最優先し、ノートへの記録はプログラム終了後に行った。また、電子機器があると、観察対象の余計な興味を引いてしまったり、緊張感を与えてしまうことが予想されたため、ビデオカメラやICレコーダーなどの機器は用いなかった。

今回対象とした知的障害者は4名、ボランティアは5名である（図6-1）。

分析は、観察から得られた知的障害者と学生ボランティアとの相互作用場面の記述から、特徴的なエピソードを抽出し、それぞれに解釈や検討を行った。観察対象の行動で確認が必要と思われるものについては、保護者や他のボランティアに対して聞き取りを行った。

また、観察は、SON・青森、該当するスポーツプログラムの責任者、知的障害者の保護者に対して許可を得ておこない、データの信頼性を確保するため、参与観察の際、誘導的になってしまわないように通常通りスポーツ指導をするよう努めた。

《知的障害者》

A(27歳男性、ダウン症、中度の知的障害)

B(13歳男性、軽度の知的障害)

C(13歳男性、ダウン症、軽度の知的障害)

D(13歳男性、軽度の知的障害)

《ボランティア》

①O(23歳男性、5年目、ボランティアリーダー)

①T(21歳男性、3年目、ボランティア副リーダー)

①Y(19歳女性、1年目、アルペンスキーサブリーダー)

①I(21歳男性、3年目、アルペンスキーリーダー)

①M(21歳男性、3年目、ボランティア副リーダー)

図6-1 抽出した対象者

第三節 結果と考察

第一項 ボランティアに対する個別評価の存在

観察から得られた知的障害者とボランティアとの相互作用場面の記述から、特徴的なエピソードを抽出し、それぞれに解釈や検討を行った。

その結果、スポーツプログラム中の知的障害者と大学生ボランティアとの相互作用のなかで、知的障害者が、指示を出した相手によって接し方や態度を変えているという場面が観察できた。具体的には以下のような場面である。

【エピソード①】

バスケットボールプログラムの最中、ボランティアが向かい合っのパス練習の場面。胸もとから押し出すように相手へパスをする「チェストパス」の練習であるが、C はプログラムリーダーの指示を聞こうとはせず、アニメのキャラクターの必殺技を真似るようにパスを出す。

C：「かーめーは一めー波ー。」と、両の手のひらで腰からボールを押し出すような形でボールをパス。相手まで届かずに、転がっている。

④Y：「(笑いながら)ちょっと、みんなと違うんじゃない。こうだよこう。」と手本を見せながらボールを返す。

C：「いくよ。かーめーは一めー波ー。」と、先ほどと同様にパス。

④Y：「今はこのパスの練習だよ。いい、いくよ。えい。」と、手本を見せながら返球。

C：「んふふ。かーめーは一めー波ー。」ボールが狙いの④Y よりもかなり右に外れ、隣でパスをしているペアのところへと転がる。

④Y：「ほら、周りのみんなにも迷惑かけちゃうよ。ちゃんとやろうね。」

と、少し強めに注意するが C はやめない。結局、チェストパスは 10 往復×2 セットであったが、1 セット目は 1 度もチェストパスをしなかった。2 セット目の 1 本目のパスでも修正がみられなかった。

④M：「C、できることはちゃんとやろや。ええか。」

注意を受けた C は少しうつむいたが、それ以降はしっかりメニューをこなした。

《2008 年 6 月 1 日》

エピソード①において C は、再三にわたる④Y の指示には従わなかったのに対し、④M からの指示にはすぐに従った。ここには明らかな違いが生じている。なぜ C は④Y の指示に従わず、④M の指示には従ったのだろうか。これに関しては、まず C はそもそもチェストパスができないことや④Y の指示が理解できていなかったことなどが考えられる。しかし、エピソード①の前のバスケットボールプログラム（2008 年 5 月 25 日）やエピソード①以降もチェストパスができていたことが確認できている。また、C は言語でのコミュニケーションにおいては若干の吃音が有る程度で、理解については大きな困難はないこと、また C の力を考慮してパスの距離も無理のない範囲で設定していたことから、能力的なこととは別の要因が考えられた。保護者によると、最近お気に入りのアニメキャラクターの影響を受けているということであったが、C がその素振りを見せたのはこの 2 回目のプログラムのみであった。これは、C の中でのボランティアへ対する意識の違い、つまり、そのボランティアが指示に従うべき対象なのかどうかというような、ボランティアへの個別評価が存在したことが推測できる。

エピソード②では、ボランティアに評価の差が生じていることを、知的障害者本人の話す内容から確認できる。

【エピソード②】

アルペンスキープログラム。練習開始前、室内の待機場所で D と㊦O が話をしている。

㊦O：「よう、D。今日の調子はどうよ？」

D：「うん。いい。」

㊦O：「お前、気合い入ってんのか？元気ねーじゃん。どした？」

D：「だって今日㊦O さんじゃないって言ってたよ。」

㊦O：「ん？ああ、一緒に滑るやつね。俺も D とともに滑りたいけど、仕方ないさ。」

D：「○○さん（この日一緒に練習する社会人のボランティア）おもしろくないから。㊦O さんがよかった。」

㊦O：「ご指名嬉しいけど、○○さんに失礼だな。○○さんスキーうまいし、また一緒に滑る機会あるからさ、頑張れ。」

D：「…はあ（ため息）。」

《2008 年 1 月 27 日》

エピソード②からは、この日、アルペンスキーの指導をするボランティアに対して D が明らかに不満をもっていることがわかる。割り当てられたボランティアではなく、㊦O と一緒に滑りたいということを、㊦O 本人に打ち明けている。同様に、ボランティアに対する評価に優劣が確認できる例として以下の 2 例を挙げる。

【エピソード③】

バスケットボールプログラム。A がフットワーク中に座り込んでいる。㊦Y は A のサポートではないが近くにいるので声をかけた。

㊦Y：「A さん、疲れたんですか？」

A：「うーるせ、あっちいけ。」

㊦Y：「・・・大丈夫ですか？」

A：「うーるせこの。」

㊦O：「A さんちょっと疲れただけですよね？」

A：（無言でうなずく）

㊦O：「ちょっと休んだらまた練習しますよね。」

A：「そそそ。やっぱりコーチは違うな。」

《2008 年 6 月 8 日》

【エピソード④】

フットサルプログラム、試合形式の練習のためのチーム分けの場面。

B：「㊦T さんは僕のチームですか？」

㊦O：「いや、㊦T さんは今回のチームだよ。」

B：「どうしてですか？」

㊦O：「今回はたまたまね。」

B：「嫌だ、㊦T さんいないと負けます。」

㊦O：「そうかな？B のチーム強いよ。一番うまい経験者いるんだし。それにいつも思い通りのチームにはならないよ」

試合が始まると、B はドリブルしたまま会場の外へと出てしまった。注意をし、練習を再開するが、B はボールを受け取るとまた外へと出ていった。B に理由を尋ねると

B：「㊦T さんいないと負ける、負けるの嫌です。」と答えた。

《2009 年 3 月 14 日》

エピソード③では、A は同じようなことを言われているのに、㊦Y には反抗的だったのに対し、㊦O に対しては追従する対応であった。また、このエピソードに限らず、㊦O に対しては「さすが」や「やっぱり」という言葉を多く使い、他のボランティアと比べても優れているという認識がうかがえる場面が多くみられた。

エピソード④からは、Bは㊦Tと一緒にチームではないと知り、「㊦Tがいないと負ける」と述べている。つまり、㊦Tの技術に対して絶対的な信頼を寄せていることがわかる。しかし、㊦Tはフットサルやサッカーの経験がまったくなく、㊦T自身は苦手意識をもっていた。また、㊦Tは他のスポーツプログラムを通じて、Bに直接的な指導を行ったこともなく、㊦T自身もBとの接触経験の記憶はほとんどなかった。にもかかわらず、Bは㊦Tが「他の大学生ボランティアよりも上手である」という認識をしていた。

これらのことから、知的障害者は大学生ボランティアを、「ボランティア」と一括りで捉えるようなことはなく、大学生ボランティア個々によって評価と接し方を変えていることが考えられる。

第二項 個別評価の背景

次に、大学生ボランティアは具体的にどのような評価をされているのか確認したい。

【エピソード⑤】

アルペンスキープログラム。⑦Y がボランティアと知的障害者のグループ分けを発表する。
⑦Y と A は同じグループになっている。

⑦Y：「今から名前を呼ばれる人は、会長のところに集まってください。では・・・（2人呼ぶ）、次、A さん。」

A：「おす。」（指定された場所に移動する）

《参加者全員の名前を呼び終わる》

⑦Y：「はい、それでは各グループ練習を始めてください。」

⑦Y も自分のグループのところへ移動。J がスキーを取りに行くと、グループの場所とは間違ったところに移動した。

⑦Y：「A さん、こっちですよー。」

A：「（グループのところへ戻ってきて）ああ、こっちだったか。おーねさん（お姉さん）、そうだった。」

⑦Y：「（笑いながら）うっかりですね。」

A：「んーそそそ。まーちがった。」

《2009 年 2 月 8 日》

エピソード③では、A は⑦Y に対して反抗的な態度をとっていたが、エピソード⑤では、⑦Y の指示通りに行動している。しかし、スポーツプログラムの運営方針として、同性対応を原則としているので、⑦Y は A と直接的に接する機会はなく、⑦Y に尋ねてみても、個人的に心密度が高くなったという認識はしていなかった。

エピソード⑤では、当該活動への参加歴が短いにもかかわらず、⑦Y はサブリーダーとして参加者全体を指揮して活動することができ、A をはじめとする知的障害者たちの誘導も可能であった。これらのことから、単純に年齢や性別、参加年数から、指示に従うかどうかを決めているとは考えにくいのではないだろうか。

ここで、以下のエピソード⑥を確認する。

【エピソード⑥】アルペンスキープログラム。リーダーの⑦I が A へ直接指導している場面。

⑦I：「A さん、今のも良かったんですけど、もっとからだを前に向けてみましょう。」

A：「・・・（無言）・・・。」

⑦I：「ちょっと後傾になってたので、もう少しからだをこう（手本にやって見せる）。」

A：「わーかってるよ！」

⑦I：「ですよ。すいません。」

A：「ま、まったくー。」

その後も、⑦I の声掛けに対しては顔をそむけている。

《2009 年 2 月 1 日》

⑦I は立場としては、プログラムのリーダーであったが、エピソード⑤と⑥においては、A は⑦I の話は聞かないのに対し、サブリーダーである⑦Y の話はよく聞いていた。アルペンスキープログラムを通して、リーダーである⑦I よりもサブリーダーである⑦Y の方を重んじていると思われたので、A に「スキーのリーダーは誰でしょう？」と尋ねたところ、⑦Y を指差した。また、このような「リーダーの認識のずれ」は以下のように、B からも確認

できた。

【エピソード⑦】練習が終了し、知的障害者もボランティアも入り混じり、それぞれゲレンデから室内へと移動している。Bは練習中着用しているビブスを脱ぎ、近くを歩いていた㊦Oへ放るように渡す。

B：「ん。」

㊦O：「おいB、ん、じゃないっしょ？」

B：「ありがとうございました。」

㊦O：「いえ、こちらこそ。じゃなくて、俺に渡すんでなくてちゃんとリーダーに返しておいでや。」

B：「はい。」

Bは㊦Yにビブスを手渡した。

《2009年2月15日》

エピソード⑦では、Bは㊦Oから、リーダーにビブスを返却するように注意を受けたが、ビブスを返却しに向かったのは㊦Iではなく、㊦Yのもとであった。確認のために、Bに「アルペンのリーダーって誰かわかる？」と確認したところ、「㊦Yさん」と回答していた。

大橋（1962）によると、リーダーシップは状況に応じて発揮が必要となる状態であるため、常に同じ人物・状況に存在するわけではないと述べている。また、リーダーシップは、権威や職階のある人物が必ずしも発揮するわけではなく（Selznick, 1963）、フォロワー（本研究においては知的障害者とリーダー以外のボランティア）の中で認識されて初めて存在するという（薄羽, 2006）。㊦Yは、2009年のアルペンスキープログラム開催中は一貫して、サブリーダーながらも練習の区切りごとに全体に指示をしたり、積極的に準備体操の進行をしたりと、「全体の前に出る機会」が多かった。逆に、㊦Iは㊦Yに経験を積ませるため、集団を誘導するような場面は㊦Yに任せて一歩引いており、スキー場との練習場所や利用料金についての打ち合わせ、保護者への事務連絡、㊦Yに指示をだすなどの役割が多かった。そのことが、AやBに「指示に従うべき対象」だと認識させ、結果として実際のリーダーよりもリーダーシップを発揮していったのではないだろうか。同様にエピソード①においても、㊦Oは全てのスポーツプログラムを通じて参加者全体に指示をしたり、事務連絡をしたりする機会が多かったことから、バスケットプログラム時はまだ役職についていなかった㊦Yと比べ、Aにとって指示通りに行動すべき存在であると認識されたと考える。

ちなみに、他のボランティアや保護者に聞いてみたところ、全員の認識に全くずれがなく、アルペンスキーにおけるリーダーは㊦Iであるという回答が得られ、アルペンスキーに関連する書類を提出する相手や、質問事項や相談事をもちかける相手も、㊦Iであった。アルペンスキープログラム開催の案内にも、リーダー㊦Iと明記されており、第1回目のプログラム開催日には「今年度アルペンスキーリーダーを務めさせていただきます、㊦Iです。よろしくお願いいたします。」と、挨拶もしており、㊦Iがリーダーであると認識されているのは至極当然のもののように思える。保護者やボランティアによっては、リーダーという立場にあることが、当該活動において諸々の決定権をもち、運営にあたっての中心的存在であるという認識に直接的に結びついている。しかし、知的障害者にとっては、「指示に従うべき人物」「場において権限を持つ人物」であるという認識に至るのには、リーダーと

いう役職にあるかどうかとは別の要因が関係している可能性がある。それは以下のエピソード⑧、⑨からも確認される。

【エピソード⑧】バスケットボールプログラムに A が遅刻して参加。フットワークが終わり、休憩時間になると A が㊦O のところに歩み寄る。

A：「お一にさん（お兄さん）、ちーこくしてごめんね。」

㊦O：「そういうときもありますよ、気にしないでください。」

A：（うなずく）

㊦O：「ヘッドコーチにちゃんと言いましたか？」

A：「今、お一にさんに、しゃべったはんで（しゃべったから）。」

㊦O：「はい。でも、そういうことはちゃんとリーダーに言わないと。」

A：「お一にさん（お兄さん）が、わかってれば大丈夫だってば。」

A は、この後もリーダーのもとに報告に行かなかった。

《2009 年 6 月 29 日》

【エピソード⑨】バスケットボールプログラム、D と㊦O との休憩時間のやり取り。

D：「ねえねえ㊦O さん。」

㊦O：「ん？」

D：「プログラム終わったらみんなでゲームセンター行きたいですね。」

㊦O：「いいね、プリクラとか撮りたいな。」

D：「SO みんなで行けばいいんじゃない。」

㊦O：「全員だと難しいべ。それぞれ予定あるだろうし、まずこの人数入らないし。」

D：「SO で貸し切れればいいじゃない。」

㊦O：「いや、残念ながらうちの組織にそんな力も金もないから。」

D：「SO ですって言えばいいよ。」

㊦O：「SO とか青森じゃまだ知られてないんだよね。だからどんだけ偉そうに言っても『え、どちら様ですか』で終わっちゃうわ。」

D：「じゃあ㊦O さんが直接予約すればいいかもよ。」1

㊦O：「いやいやいや、俺個人じゃさらに意味ないから。余裕で断られるから。」

D：「㊦O さんでだめなら㊦M さんと一緒に行けばいいかもよ。㊦T さんとか。」2

㊦O：「あいつらを増やしても同じさ。ま、今度一緒に行こうぜ。」

D：「行こう行こう。」

《2009 年 6 月 29 日》

エピソード⑧において A は、㊦O に遅刻した旨をリーダーに報告するよう指示されるが、A は㊦O が知っていれば大丈夫であると発言している。㊦O にではなく、リーダーに報告するように促されても、㊦O が状況を把握していれば問題はないという認識をし、報告しないままにいる。ここでは、㊦O がバスケットボールのリーダーであるという、エピソード⑦のようなリーダー認識におけるずれが生じているのではなく、㊦O がリーダーではないことを承知の上で、それでも㊦O が知っていれば問題がないと、いわば㊦O が特別視をされていることがうかがえる。これは、エピソード⑨でも確認することができる。

エピソード⑨の下線部 1 で、ゲームセンターを貸し切りたい D は、組織の名前を出しても貸し切りはできないとわかり、次なる手段として「㊦O の力」を挙げている。このことから、㊦O に対して「何らかの権限を持つ人物である」と認識していることがうかがえる。また、下線部 2 の発言からは、「観察者でだめならさらに後押しとして㊦M や㊦T を増やす」というニュアンスの発言である。㊦O に次いで、㊦M と㊦T に対しても、何らかの権限がある人物であると認識していることが考えられる。

㊦O、㊦M、㊦T に対する特別視は、エピソード⑤、⑥、⑦で考えられたように、全体の前に立つ頻度が関係していると考えられる。㊦O、㊦M と㊦T は、スポーツプログラムにおける役職はないものの、ボランティア全体を統括する役割を担っているボランティアであり、前に立って話をしたり、ボランティアたちに指示をする場面も多い。また、スポーツプログラム以外のレクリエーションなどの企画・運営もこの 3 人が中心となって進めている。C も A も D も、スペシャルオリンピックスの活動に頻繁に参加しており、㊦T や観察者が全体の前でマイクを持って話をしたり、ボランティアを多く集めて指示を出したりと、中心的に動いている姿を多く目の当たりにしている。そのことから、㊦O や㊦T に対して、他のボランティアに比べて優位に位置付けた認識をしていることが推測される。

第四節 小括

今回の観察からは、①知的障害者はボランティアそれぞれに個別の評価をおこなっており、その評価は改善することが可能であること。②年齢や性別、当該活動の経験年数よりも、そのフィールドにおいてどれだけ中心的な人物であるような行動を示したかどうかが、より評価に大きな影響を与えうること。以上の2点が示唆された。

スポーツ活動においては、バスケットボールなどのチーム競技はもちろん、個人競技でも体操や挨拶などの際ある程度の集団行動が求められる場合があるし、そもそもスポーツ活動は事故や怪我の危険性がついてまわる。安全に質の高いスポーツ活動を提供するためには、スポーツ指導者には集団や個人を上手く統率する力が求められる。知的障害者のボランティアに対する評価は個別におこなわれており、同じボランティア同士においても、優劣がつけられるものであった。このことから、スポーツ指導の際、知的障害者のボランティアに対する評価は、ボランティア本人の行動次第で良くも悪くもなりえることがうかがえた。

知的障害者のスポーツ活動において、ボランティアが知的障害者を統率し、指示に従ってもらう際、指示に追従してもらうためには、「リーダー」や「責任者」といった名目としての役職があることよりも、いかに「リーダーらしく振る舞うか」という挙動が重要な要素となることが示唆された。「リーダーらしい振る舞い」というのは、具体的に、集団に対して指示を与えたり、大勢の前で話をしたりといった「姿を見せる」ことである。知的障害者に指示に従うべき対象であると認識されるには、ボランティア個人の年齢や性別、活動経験年数といった属性よりも、「リーダーらしく振る舞う」行動の頻度が大きく影響していると考えられた。組織や諸活動において中心的な役割を担うというのは、周囲の信頼を得る必要があり、ある程度の活動実績が求められる場合が多いので、必然的に参加年数や接触時間が付随してくる。そこからすれば、経験年数や年齢が、知的障害者のボランティアへの個別評価に無関係だとは言えないかもしれない。しかし、知的障害者が指示に従うことに納得できる要因として、ボランティアの「立ち振る舞い」が大きな要因となりうるのであれば、知的障害者スポーツ活動の経験年数や、当該参加者との接触年数が少ない人物であっても、十分に指導者としての役割を果たすことができるということでもある。経験のない者が知的障害者のスポーツ指導を行うということの是非については議論しなければならないが、今回の結果は新たなボランティア層の開拓へとつなげることができるのではないだろうか。

川添（2007）は、非営利組織におけるリーダーは、リーダーシップを発揮しつつフォロワーシップも兼ねているという面をもち、状況との適合性から組織の成員の誰もがリーダーとなりえることを報告している。また、非営利組織において生じるリーダーシップはリーダーとフォロワーという役割分担的な考え方からくるのではなく、相互作用的なものであって、そのことはフォロワーの職務上のプレッシャーの軽減やフォロワーの自立を促しうるなどの利点があると述べている。つまり、時にリーダーとして全体をまとめ上げ、時

には一構成員としてリーダーシップを発揮している者に追従するという、役割の変化が生じうるのである。リーダーとしての立場にあるものよりも、他のメンバーがリーダーシップを発揮するという状況は、リーダーの怠慢やメンバーの統率がとれていない事態が背景として考えられたり、指示系統の乱れにつながったりなどの懸念も生じるかもしれない。しかし、状況に応じて誰しものが集団を統率できるように行動できることは、臨機応変な対処が求められる知的障害者のスポーツ活動において、十分に利点となりえるものと考ええる。また、知的障害者のスポーツ活動は、指導者が不足すると活動が停滞してしまうため、特定の、特殊な能力があるボランティアのみが活躍できる活動ではなく、様々な人が、状況に応じて自己の能力を発揮することができる活動なのであれば、ボランティアの裾野を広げることにつながるのではないかと考える。

第七章 総合考察

本研究の目的は、知的障害者のスポーツ活動におけるボランティア環境の向上につながる示唆を得るため、①ボランティアの負担感の構造について分析を試み、②継続参加しているボランティアの参加実態について検討するとともに、ボランティアに対する③保護者の意識、及び、④知的障害者本人の意識についてそれぞれ明らかにすることであった。その結果、以下のことが確認された。

第一に、自由意思によって参加が決定されているボランティア活動ではあるが、継続参加しているボランティア本人は、人間関係、活動理念からかい離している事象、作業時間・量、参加コスト、責務の重さについて負担感を抱えていることが考えられた。特に、人間関係、作業時間・量については大きな負担感を生じさせるが、参加者や他のボランティアとの関係性や作業負担のしわ寄せを考慮すると、活動からの離脱はできないというジレンマが生じていることがうかがえた。(研究一)

第二に、継続参加しているボランティアは、楽しい経験や感動的な経験をし、継続意欲を高める一方で、人間関係の軋轢や時間的な余裕の減少というネガティブな経験もしており、このジレンマを経験し、乗り越えることによってスポーツ指導者としての使命感を形成することが考えられた。参加動機にかかわらず、経験によって指導者としての高い意識・責任感をもってスポーツ指導をおこなうことができることが確認されたが、ボランティアとしての実績ではなく、日常生活における社会的地位によって評価される実態があり、指導者としての使命感・自覚がある故に不満を抱えていることがうかがえた。(研究二)

第三に、知的障害者の保護者は、スポーツ指導ボランティアに対して子どもの実態に即した継続的な指導を求めており、大学生ボランティアに対しては卒業や就職に伴う活動からの離脱を懸念しているが、スポーツ指導場面においてはバイタリティーや参加者と友人的な関わりが期待できるという観点から、若年層全体に対して期待していることが確認された。(研究三)

第四に、知的障害者はボランティアに対する評価は個別におこなっており、ボランティアの評価に優劣が生じていることが推察された。また、その評価は年齢や当該活動における経験年数によって決まるものではなく、ボランティア本人の挙動次第で改善できることがうかがえるため、経験の多くないものであってもスポーツ指導者として活躍することができることが考えられた。(研究四)

ボランティアの抱える過重負担や人間関係の問題は先行研究でも確認されており(Weiss and Sisley,1984. 松尾ら,1994. 松尾,1996. 宋,2009. 全国社会福祉協議会,2010)、それらによる活動からの離脱は懸念される問題である。ボランティア各人の自由意思によって参加が決定されるからこそ、ボランティア自身がより楽しく、より気持ちよく活動することができれば、知的障害者のスポーツ活動の実施は安定性を増すものではないだろうか。

以上のことを考慮すると、ボランティア環境を向上させる具体策としては、①作業の明確化と分業化、②ビジネスライクな考え方、③大学生も視野に入れた積極的な勧誘、を提唱したい。これらについて以下に述べる。

はじめに、作業の明確化と分業化について説明する。これは、知的障害者にスポーツ指導をおこなううえで必要となる作業を明確化し、誰にでも具体的にどのような作業があるのか把握できるようにするということである。「会場の借用」、「参加者への案内」、「必要物品の準備」など、単に行為としての羅列ではなく、例えば会場の借用であれば、会場名、連絡先、借用に必要なもののリスト、利用料金など、会場の借用に必要な情報をまとめ、具体的に何をどういった手順で準備をするべきかを明らかにするのである。一見当たり前のことのように思えるが、知的障害者スポーツのボランティアという一般市民の有志の集団においては、詳細なマニュアルを作成していたり、かなりシステマチックな運営をしている場合が多くないことが考えられる。つまり、特定のボランティアが自らの経験に基づき、独自に、ともすると無意識的に準備を進めている場合が考えられるため、当たり前に思える作業の明確化・分業化が強調される必要があるといえる。

ボランティアそれぞれのやり方で運営されている現状を示す例として、「特定非営利活動法人スペシャルオリンピックス日本（以下 SO 日本）」を挙げる。スペシャルオリンピックスは、知的障害者にスポーツ活動を提供する国際的な組織であり、2010 年現在、世界 175 の国と地域で活動が展開されている。SO 日本は、そのスペシャルオリンピックスの日本における本部組織であり、定款や会則などがしっかり定められており、税制面での優遇措置を受けられる「特定非営利法人」の認可も受けている。SO 日本は、日本の知的障害者スポーツの普及・発展に大きく貢献してきており、運営基盤の安定性が十分に認められる団体である。しかし、その SO 日本においても、各地域におけるスポーツ活動については、トレーニングの企画や実施にあたっての具体的な手順は厳密には定められていない。年間を通してのスポーツ活動の実施回数や 1 回の活動時間など、最低限組織としての規格は定められているが、スポーツ活動の実施は地域の状況に応じて行われることを認めており、各地域のボランティアがそれぞれのやり方で行っている。それは、地域によって、体育館や運動場の量や質、そこまでのアクセスといったインフラストラクチャーの整備状況が異なっていたり、ボランティアの業務形態やボランティア同士の関係性など、大元の理念からは逸脱せずとも地域・集団による文化が異なることが考えられるからである。また、日本における知的障害者スポーツは、身体障害者スポーツと比べて歴史が浅く、知的障害者にスポーツを提供しよう社会的な認知を広げようとする草創期にあり、系統だてた運営を各人が意識していくという段階になかったことも背景として考えられる。

このような状況の中で、経験年数も長く参加頻度の高いボランティアは何をする必要があるか経験知のなかで理解していることが考えられるが、それを誰にでもわかる形で示さなければ、結局「その人にしかできない」「私がやった方が早い」と、多くの作業を特定のボランティアに依存してしまう事態が生じうる。それによって、特定のボランティアの作業量が増え、その他のボランティアも協力可能な部分が減っていつてしまう。また、自発的に参加してはみたものの、作業がないことによって、結局自分の活躍の場がない、できないことがないため、やりがいを感じられず、意欲の減退や離脱につながってしまうという

問題も生じうる。しかし、必要な作業を明確にすることができれば、ボランティア同士で作業を分担しやすくなるし、仮に経験の少ないボランティアであっても、具体的に何をどのようにするかがわかっていれば、担うことができる部分があることがみえてくるだろう。作業を分担できれば、特定のボランティアの過重負担を解消することができ、同時に新たなボランティアがノウハウを学ぶことになり、結果、より円滑な運営を可能とすることにつながる。まだまだ課題が山積である知的障害者のスポーツ活動という領域ではあるが、とにかくスポーツ活動を実施してゆく、周知を図ってゆくといった大きな課題を解決すると同時に、あえて意識的に、継続性・合理性という視点から日々の作業を明確化することも重要であるとする。

第二に、ビジネスライクな考え方の導入についてであるが、これは、「日頃の立場関係・人間関係を持ちこまず、当該活動内の立場・役割を優先する」ということである。つまり、当該活動内においてボランティアの権限が一律なのであれば、日頃上司と部下の関係であっても、同じ立場であるという認識を、皆が共有することである。さらに言えば、日頃上司と部下の関係にあっても、当該活動内において部下が指示をする立場になったのであれば、上司は指示を受ける立場になるのである。しかし、当然、立場が上になったものは言葉遣いや態度を高圧的にしてよい、立場が上のボランティアの指示は絶対で反論が認められないということでは決してないことを強調しておく。

ボランティア活動にビジネスライクな考え方を導入することは馴染まないかもしれないが、この前提がなければ、年上のボランティアに対して年下のボランティアは発言しにくくなってしまい、仮に年下のボランティアが意見をすると、年上のボランティアは気を悪くしてしまうといった事態が生じかねない。第四章で述べた継続参加ボランティアの実態においても確認されたように、ボランティアとしての言動や実績ではなく、日常生活の社会的地位によって意見が通りにくい・同じことをしても認められにくいという事態が生じることが考えられる。また、前述したように、特定のボランティアへの過重負担を解消すべく、複数のボランティアによる分業化を進める必要がある。そのようななか、各自が担当した作業において、常に特定の「個人」に話を通さなければならないといったことや、担当者が知らないところで勝手に話が進んでしまうといった越権行為がどこかしこにもみられるのであれば、適正な運営は困難となってしまうだろう。加えて、物事を決める際に「個人」が強調されてしまうと、意見が食い違った場合さえも、その「個人」が批判の対象となってしまう危険性がある。当該活動内における役割が明確に定まっておりその役割が優先されるという前提のなかであれば、誰かの意見を採択・棄却する際も「役割上やむを得ない」と納得することができるが、誰に決定権があるのかも不明瞭ななかで議論が展開されれば、「特定の個人に否定された」という図式になってしまうことが考えられる。ボランティア場面をいわばビジネスとして捉える、つまりプライベートとは違った環境であると認識することができれば、「個人としての私」と「ボランティアとしての私」とをボランティア本人が意識的に分けることを可能とする。各人が意識の切り替えができることで、

物事を決める際の話し合いでも、「後腐れがない」ことを前提とすることができ、誰でもが発言しやすくなり、より活発な議論を可能とするのではないだろうか。

本来、その団体ごとに理念や方針が定められていても、ボランティア同士やボランティアと知的障害者など、人間同士の関係性においては、明らかに不適切である接し方・意見はあることが考えられるが、絶対的な正解というものは存在しない。これまで述べてきたように、知的障害者へのスポーツ活動の提供、運営はボランティア各人の意思に委ねられているため、ボランティア個人の思想が運営に大きく反映する。そのため、ボランティア同士の考え方や意見に違いが生じた場合、それによってスポーツ活動の提供そのものが停滞してしまうことが懸念される。もちろん、フレキシビリティに富んだ運営が可能な点はボランティア活動の長所でもあるのだが、ボランティア同士の合意形成ができず収拾がつかなくなってしまうたり、発言力の強い・経験年数が長い人物の意見のみが反映される危険性も考えられるのではないだろうか。世代や経験、思想が異なる人々が集っている活動だからこそ、各々が同じ立場で意見を交換でき、活発な議論をすることができれば、人間関係の軋轢が生じることを軽減するだけでなく、スポーツ指導の内容についても質が向上していくことが期待できる。労働への対価としての給料が発生せず、各人の自由意思によって多種多様な人が集まっているボランティア活動だからこそ、ビジネスライクな考え方を取り入れる必要があると考える。

第三に、大学生も視野に入れた積極的な勧誘について述べる。知的障害者のスポーツ活動は、ボランティアによって支えられておりマンパワーを必要とするため、地域のボランティアサークル、ボランティアネットワークに対してなど、できるだけ広く勧誘を行い、ボランティアを確保する必要がある。ただ、先行研究によると、これまでボランティア活動への参加者の多くが50代以上であり（全国社会福祉協議会, 2010）、若年層のコーチを確保することが課題となっていた（Weiss and Sisley, 1984）。そのため、大学生も対象として勧誘することによって、新たなボランティア層を開拓することができるのではないかと考える。特に大学生は、スポーツボランティアの実施率は低いものの、ボランティア活動に興味があるものは少なくなく、その参加を阻害する要因として、ボランティア活動についての情報の入手方法がわからないという現状が示唆されている（内藤, 2007）。よって、まずは団体・活動を知ってもらうということを前提にして、大学関係者に活動への協力を依頼したり、大学生が集まる場所にポスターを掲示したり、大学のボランティアサークルに活動紹介をさせてもらったりなど、積極的に大学生に対してPRしていくことが効果的なのではないだろうか。現在、知的障害者のスポーツ活動は、パラリンピックや車椅子バスケットボールなどの身体障害者のスポーツ活動と比べ、まだまだ市民権を得ているとは言い難い。地域における積極的な勧誘、特に今後の社会を担っていく若い世代に対する勧誘は、単純にPR活動としての役割も果たしうる。仮にボランティア希望者が見込めないとしても、団体・活動の社会的認知を高めることにもなり、ひいては知的障害者のスポーツ活動の啓蒙活動としても決して無駄になるものではないだろう。

大学生ボランティアの有用性としては、単純にマンパワーとしてだけではなく、「大学生」であること自体もメリットとなることも考えられる。第五章では、知的障害者の保護者は、バイタリティーや発想の柔軟性、知的障害者と友人的なかかわりができるといったことから、若年層のボランティアに対して期待感があることがうかがえた。また、若者にとって他者へ対する成功的な援助経験は教育的効果の高い行動であり（妹尾,2003）、大学生本人にとってもボランティア活動は有意義な活動となりえるだろう。倫理観や社会貢献の精神、公共性や社会性の意識の涵養などが社会に出る前に備えるべき資質として求められるなか、多様な能力の育成や地域貢献という視点から大学もボランティア活動を推進している現状もある（文部省高等教育局, 1999）。さらに藤田（2007）は、大学生の企画・運営による障害者スポーツイベントの実践について、準備に費やされる時間やエネルギー、精神的プレッシャー、不安感などが生じるものの、大学生が会計、企画、広報など役割を分担し、主体的に実施することで大きな学習効果が期待できると述べている。これらのことから、大学生が知的障害者のスポーツ活動にボランティアとして参加することの意義は認められ、積極的な勧誘の重要性が示唆される（図 7-1）。

大学生ボランティアの抱える課題としては、卒業・就職による活動からの離脱が危惧されることがあげられる。就職先が遠方地になってしまえば当然当該活動に参加することはできなくなるし、仮に近隣で就職したとしても、就職先の業務形態やボランティア活動への理解によって、参加できない場合が生じてくる。当該活動の活動日が出勤日となっている場合は当然参加できないし、就職して生活環境が変化する中で疲労も大きいことが予想され、休日を心身の休息に専念することも考えられる。第五章の保護者の意識においても確認されている通り、大学生ボランティアには、今は継続的に参加していてもいずれ離脱する時がくるかもしれないといった、「終わりがみえている」という課題があるといえる。

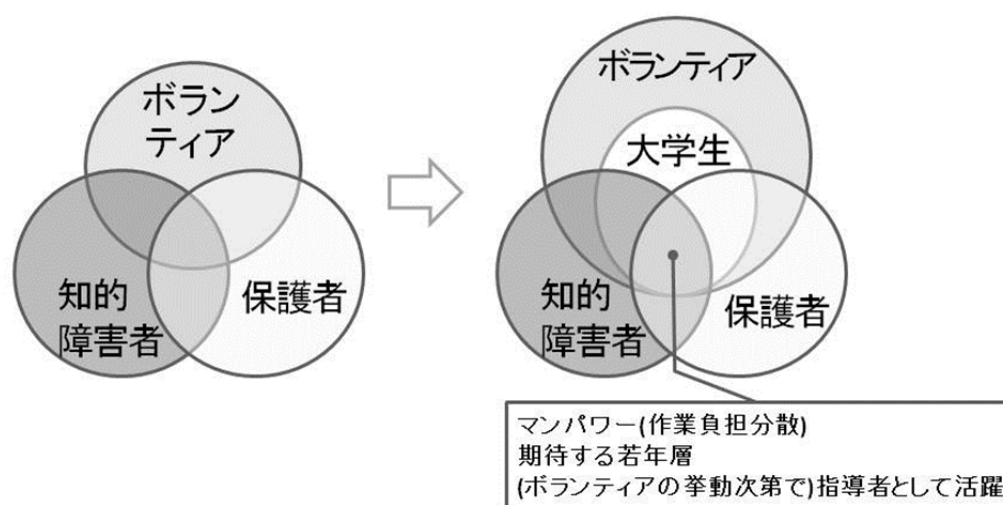


図 7-1 大学生ボランティア活用による改善点

しかし、大学生ボランティアの卒業に伴う離脱は、確かにマンパワーの減少という点からすればデメリットであるが、逆に、知的障害者にとって、仲間との別れや、新たな人との出会いを経験する機会と捉えることもできる。知的障害者がスポーツ活動を楽しむなかで、常に同じ顔ぶれではなく、様々な世代のボランティアとかかわることができれば、友人としてのかかわりはもちろん、時に親子のような、兄弟のようなかかわりをも可能とすることから、社会性を育むことにもつながるのではないだろうか。ボランティアの入れ替わりが生じることを前提にして構えることによって、先に述べた作業の明確化・分業化をより意識する必要が生じ、作業の明確化・分業化をできることで、大学生ボランティアに限らず、新たなボランティアがノウハウを学んでいくことになる考える。大学生ボランティアは常に循環するものであると捉え、既存の大学生ボランティアに活躍を期待しながらも、同時に新規の大学生ボランティアの獲得を考えていくべきである。また、第六章では、知的障害者にスポーツ指導をする際、自ら指示・指導をする姿を目に見える形で示すことができるかどうかということが、指示に納得してもらえるか、追従してもらえるかに影響を及ぼしていることが示唆された（第六章）。これはつまり、知的障害者本人にとっては社会的な地位ではなく、ボランティア本人の挙動によって、その人が信頼に足るかどうかを判断していると解釈できる。よって、社会経験が少なかったり年齢的に若いであろう大学生であっても、自らの挙動を意識することで指導者として十分活躍が期待できると考える。

他に考えられる課題としては、大学生ボランティアの抱える問題というよりはボランティアを受け入れる側の問題であるが、第四章で確認されたように、日常生活における社会的地位によって、本人の能力とは別に過小評価される現状があることも憂慮される。社会的な地位のあるボランティア・年齢の高いボランティアは、スポーツ指導者としての資質に関わらずボランティア活動内においても発言力が強いことになってしまえば、マンパワーを必要とする活動であるのに、ボランティアの裾野を狭くしてしまう危険性があると考ええる。広く、大学生をはじめとする若年層をも取り込み活動を展開しくためには、積極的な勧誘だけでなく、前述した作業の明確化・分業化、ビジネスライクな考え方の共有といった受け入れ体制の確立も求められる。

積極的な勧誘をする際の留意点として、当該活動の趣旨や理念について正しく提示することに注意を払わなければならないことを挙げる。ボランティアの人数を確保したいからと、活動の趣旨すら聞かされていない人でもとりあえず参加させるというのは、時に、参加後に問題を生じさせる可能性がある。知的障害者のスポーツ活動といっても、団体によって、例えば競技性を重んじるものから、レクリエーション的な要素が強いもの、または、競技の結果を最優先させるものから、結果よりも過程を大切にするものまで、様々であろう。活動場面において、他のボランティアの理念からかい離した行動は負担感を生じさせることが第三でも確認された。また、理念や使命、つまり団体として目指すものが違えば、スポーツ指導の方針も変わってくる。それによる食い違いは、ボランティア間の軋轢を生じさせる可能性がある。実際に参加してみなければ楽しさはわからないというのはその通

りだが、ボランティアが参加した後のことも考慮し、細かな点を逐一確認する必要はないが、リクルート活動にあたっては大元の理念については伝える必要があるだろう。

最後に、本研究における今後の課題を述べる。今回は、知的障害者のスポーツ活動におけるボランティアの実態と参加者のニーズ・意識を把握することから、ボランティア環境向上への示唆を得ることを目的とし、研究を進めた。しかし、継続的に参加しているボランティアを対象としているため、すでにドロップアウトしたボランティアや、経験年数は長いが参加頻度が少ないボランティア、1度だけ活動に参加してみたボランティアについては、実態の把握が困難であった。より、活動の基盤を安定させるため、参加頻度の高いボランティアと様々な参加形態のボランティアとの協力体制についても検討される必要がある。今後は、知的障害者本人、保護者、ボランティア本人の他に、元ボランティアとして活動に参加していた人、1度だけ参加してみた人、当該活動に籍をおいているが活動頻度の低い人などについても焦点を当て、その意識やボランティア参加時に置かれていた状況、継続的な参加に至らない原因についても把握したい。

引用・参考文献一覧

- 阿部美穂子、廣瀬真理（2008） 軽度知的障害児の安心、自信、自己肯定感の獲得に関する研究—児童福祉施設併設特別支援学校における実践から— 富山大学人間発達科学部 紀要 3（1） 55-66
- Amato,P.R.（1990） Personality and Network Involvement as Predictors of Helping Behavior in Everyday Life. *Social Psychology Quarterly*, 53(1), 31-43
- 荒井弘和、上田暁史（2008） 知的障害のある者とその親が参加したアダプテッド・スポーツプログラムの恩恵の探索的検討 障害者スポーツ科学 6（1） 33-39
- 荒井弘和、中村友浩（2006） 知的障害のある者の親がアダプテッド・スポーツプログラムに参加することによる感情の変化 体育学研究 51 793-799
- 荒井弘和、中村友浩（2009） 知的障害者の親における身体活動・運動実施の阻害要因と促進要因 体育学研究 54 213-219
- 朝比奈一男（1985） 運動が脳・神経機能にあたえる効果 体育の科学 35（10） 763-766
- 浅野勝己（1985） 運動が心肺機能にあたえる効果 35（10） 747-759
- 我妻則明、伊藤明彦（2002） 知的障害児の肥満に関する研究の展望 特殊教育学研究 39(4) 65-72
- Block,M,E. Zeman,R.（1996） Including Students With Disabilities In Regular Physical Education: Effects on Nondisabled Children. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 13, 38-49
- Brekamp,S（1992） What Is “Developmentally Appropriate” and Why Is It Important? The journal of physical education, recreation & dance, 63, 31-32
- Carter,E.W. Hughes,C. Guth,C.B. Copeland,S.R.（2005） Factors Influencing Social Interaction Among High School Students With Intellectual Disabilities and Their General Education Peers. *American Journal on Mental Retardation*, 110(5), 366-377
- 長ヶ原誠、山口泰雄、野川春夫、菊池秀雄（1991） スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2)—ボランティアの継続意欲の視点から— 鹿屋体育大学研究紀要 6 69-75
- Clary,E.G. Orenstein,L.（1975） The Amount and Effectiveness of Help: The Relationship of Motives and Abilities to Helping Behavior. *Personality & social psychology bulletin*, 17(1), 58-64
- Clary,E.G. Snyder,M. Ridge,R.D. Copeland,J. Stukas,A.A. Haugen,J. and Miene,P.（1998） Understanding and Assessing the Motivations of Volunteers: A Functional Approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74(6), 1516-1530
- 太宰由紀子（2003） ゆっくりゆっくり笑顔になりたい 9-19.60-81 スキージャーナル株式会社

- Dykens,E.M. Cohen,D.J. (1996) Effects of Special Olympics International on Social Competence in Persons with Mental Retardation. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 35(2), 223-229
- 遠藤愛 (2008) 発達障害児の保護者がボランティアに向ける余暇支援ニーズの検討—個別の活動報告による支援結果のフィードバックの効果— 立教大学心理学研究 Vol.50 1-9
- 遠藤雅子(2004) スペシャルオリンピックス 10 集英社新書
- Farrell,R.J. Crocker,P.R.E. McDonough,M.H. Sedgwick,W.A. (2004) The Driving Force: Motivation in Special Olympians. *Adapted physical activity quarterly*. 21, 153-165
- Fitch,R.T. (1987) Characteristics and Motivations of College Students Volunteering for Community Service. *Journal of College Student Personnel*, 28(5), 425-431
- 藤島仁兵、岡田猛、鬼塚幸一、山下孝文 (1981) 量的データ分析によるスポーツ少年団の指導者に関する研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編 32 275-302
- 藤田紀昭 (2000) 障害者と地域スポーツ 体育の科学 50 213-217
- 藤田紀昭 (2003) 障害者スポーツの授業が大学生の態度に与える影響に関する研究 日本福祉大学社会福祉論集 108 45-54
- 藤田紀昭 (2004) 地域における障害者スポーツ大会および教室の実態に関する研究—障害者スポーツ指導者の活動の活性化の視点から— 日本福祉大学社会福祉論集 111 73-90
- 藤田紀昭 (2007) 大学生の企画・運営により障害者スポーツイベントの実践事例 日本福祉大学社会福祉論集 117 123-140
- 藤田紀昭 (2008) 障害者スポーツの世界 アダプテッド・スポーツとは何か 角川学芸出版 第二章 わが国の^{アダプテッド}障害者スポーツの変遷と現状 13-60
- Gary N.Siperstein ,Jay Gottlieb. (1977) Physical Stigma and Academic Performance as Factors Affecting Children's First Impressions of Handicapped Peers. *American Journal of Mental Deficiency*, 81(5), 455-462.
- Goodwin,D.L. Fitzpatrick,D.A. Thurmeier,R. Hall,C. (2006) The Decosion to Join Special Olympics:Parents' Perspectives. *Adapted physical activity quarterly*. 23(2) 163-183
- 郷間英世、藤川聡、所久雄 (2007) 知的障害者の余暇活動についての調査研究—通所授産施設に就労している人を中心に— 奈良教育大学紀要 56 (1) 67-70
- Granofsky,J. (1955) Modification of attitudes toward the visibly disabled: an experimental study of the effectiveness of social contact in producing a modification of the attitudes of non-disabled females toward visibly disabled males. *Dissertation Abstracts*, 16, 1182-1183
- Grigal,M. Neubert,D.A. Moon,M.S. Graham,S. (2003) Self-Determination for Students

- With Disabilities: Views of Parents and Teachers. *Exceptional Children*, 70(1) 97-112
- 箱井英寿、高木修（1987） 援助規範意識の性別、年代、および、世代間の比較 社会心理学研究 3（1） 39-47
- 浜口弘（2006） 知的障害児（者）の肥満の治療と支援 小児看護 29（6） 719-724
- 花田道子、信田よしの（2008） 地域スポーツ活動支援を通じた指導者育成—知的障害児者対象の「ニコニコ体操教室」参加学生の自己概念に着目して— 九州共立大学スポーツ科学部研究紀要 2 33-37
- 橋本公雄、堀田亮、山崎将幸、甲木秀典、行實鉄平（2009） 運動・スポーツ活動におけるメンタルヘルス効果の仮説モデル—心理・社会的要因を媒介変数として— 健康科学 31 69-78
- 橋本公雄、斎藤篤司、徳永幹雄、磯貝浩久、高柳茂美（1991） 運動によるストレス低減効果に関する研究（2）一過性の快適自己ペース走による感情の変化 13 1-7
- 橋本好市（2000） 障害者に対する意識と接触経験の関係—社会福祉系専門学校生の「障害者に対する意識調査」結果から— 福祉研究 88 25-32
- Harada, C.M. and Siperstein, G.N. (2009) The Sport Experience of Athletes With Intellectual Disabilities: A National Survey of Special Olympics Athletes and Their Families. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 26(1), 68-85
- 原美智子、江川久美子、中下富子、山西哲郎、下田真紀（2001） 知的障害児と肥満 発達障害研究 23（1） 3-12
- 原光彦（2006） 運動療法の考え方と実際 小児看護 29（6） 708-713
- Henderson, K.A. (1981) Motivations and Perceptions of Volunteerism as a Leisure Activity. *Journal of leisure research*, 13, 208-218
- 平岡公一（1986） ボランティアの活動状況と意識構造—都内 3 地区での調査結果からの検討— 明治学院論叢 394・395 29-61
- Holroyd, J. McArthur, D. (1976) Mental Retardation and Stress on the Parents: A Contrast between Down's Syndrome and Childhood Autism. *American Journal of Mental Deficiency*, 80(4), 431-436
- Hughes, C. Rodi, M.S. Lorden, S.W. Pitkin, S.E. Derer, K.R. Hwang, B. and Cai, Xinsheng. (1999) Social Interactions of High School Students With Mental Retardation and Their General Education Peers. *American Journal on Mental Retardation*, 104(6), 533-544
- 細谷一博（2008） 知的障害児・者の居住形態からみた余暇活動の実態と余暇活動支援機関の機能—青少年の休日を楽しむ会の実践を通して— 発達障害支援システム学研究 7（1） 1-7
- 細谷一博、大庭重治（2009） 知的障害児・者を対象とした余暇支援事業におけるボランティアの役割 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要 15 11-14

- 稲浪正充、小椋たみ子、西信高（1994） 障害児を育てる親のストレスについて 特殊教育学研究 32（2） 11-21
- 石黒久美子、中村攻、木下勇(1999) 知的障害者の余暇生活環境整備に関する基礎的研究—知的障害者の余暇生活行動の実態把握とその規定要因の分析— 千葉大学園芸学部学術報告 第53号 39-45
- 石倉健二、坂口愛（2009） 知的障害等のある児童生徒の肥満と行動特徴の関連についての検討—ある特別支援学校での調査を通して— 兵庫教育大学研究紀要 35 59-63
- Jones,T.W. Sowell,V.M. Jones,J.K. Butler,L.G.(1981) Changing Children's Perceptions of Handicapped People. *Exceptional Children*, 47, 365-368
- 甲斐裕子、永松俊哉、志和忠志、杉本正子、小松優紀、須山靖男（2009） 職業性ストレスに着目した余暇身体活動と抑うつとの関連性についての検討 体力研究 107 1-10
- 金子勝司、南條正人（2007） 知的障害児（者）のスポーツレクリエーション活動と生活の質（QOL）に関する研究—性別による活動群と非活動群からの比較検討— 共栄学園短期大学研究紀要 23 111-125
- 加藤潤三、藤原武弘、野波寛、安藤香織（2004） 学生ボランティアと一般ボランティアの比較調査 日本社会心理学会大会発表論文集 演題番号 376
- 川間健之介(1996) 障害をもつ人に対する態度—研究の現状と課題— 特殊教育学研究 34（2） 59-68
- 川元克秀（2000） 福祉教育・ボランティア学習活動参加後の学習者のボランティア活動意欲の変容 社会福祉学 41（1） 121-133
- 河内清彦（2006） 障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度、友人関係、援助行動、ボランティア活動を中心に— 教育心理学研究 54 509-521
- 河添博幸(2007) 非営利組織におけるリーダーシップ—類型的研究に関する一考察— 熊本大学社会文化研究 5 77-94
- Khoo,S. Engelhorn,R (2011) Volunteer Motivations at a National Special Olympics Event. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 28, 27-39
- 木下康仁（2003） グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い— 弘文堂
- 桐原宏行（1999） ボランティア活動の経験が障害者に対する態度に及ぼす影響 障害者理解研究 3 15-20
- Kishi,G. Teelucksingh,B. Zollers,N. Park-Lee,S and Meyer,L. (1988) Daily Decision-Making in Community Residences: A Social Comparison of Adults With and Without Mental Retardation. *American Journal on Mental Retardation*, 92(5), 430-435
- 木谷秀勝(1997) 「スペシャルオリンピックス」の現状と今後の方向性に関する一考察—ス

- ペシャルオリンピックスの活動と”1997 World Winter Games”の報告を中心として—
九州女子大学紀要 第34巻 1号 9-14
- 北村尚浩、松本耕二、國本明德、仲野隆士（2005） スポーツ・ボランティアの組織コミットメント 体育学研究 50 37-57
- Klavina,A. Block,M.E. (2008) The Effect of Peer Tutoring on Interaction Behaviors in Inclusive Physical Education. *Adapted physical activity quarterly*, 25, 132-158
- 近藤充夫、杉原隆、落合優、松田岩男（1976） 幼児の知覚運動経験が知的能力に及ぼす影響 体育学研究 21 (3) 155-163
- 今野和夫（2007） 障害者親の会の研究—「秋田すずめの会」の21年— 秋田大学教育文化学部研究紀要 62 53-63
- 厚生省（1995） 障害者プラン～ノーマライゼーション7か年戦略～ 障害者対策推進本部
- 厚生労働省（2007） 平成17年度知的障害児（者）基礎調査結果の概要
- 草野勝彦（2004） 障害者スポーツ科学の社会的課題への貢献 障害者スポーツ科学 2 (1) 3-13
- 松田岩男（1985） 運動の精神的効果 体育の科学 35 (10) 736-740
- 松田哲（1993） 青少年のボランティア活動に関する調査研究—特に活動の阻害要因を中心に— 日本教育社会学会第45回発表要旨集録 247-248
- 松本耕二（1999） スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究—障害者スポーツイベントのボランティアに着目して— 山口県立大学社会福祉学部紀要 5 11-19
- 松本耕二、北村尚浩、國本明德、仲野隆士（2004） スポーツ・ボランティアの参加動機、組織コミットメントと継続意欲 山口県体育学研究 13-22
- 松本耕二、田引俊和（2009） 障がい者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度 山口県立大学学術情報 第2号 社会福祉学部紀要 27-38
- 松村孝雄、横川剛毅（2002） 知的障害者のイメージとその規定要因 東海大学紀要文学部 第77集 101-109
- 松尾哲矢（1996） 少年スポーツのボランティア指導者におけるドロップアウトに関する日米比較研究—福岡市とUrbana-Champaign市の事例を中心に— レジャーレクリエーション研究 35 10-20
- 松尾哲矢（2004） スポーツ・ボランティアとその専門性～【ボランティア—専門職】指導者システムの再構築～ 体育の科学 52 (4) 270-276
- 松尾哲矢、多々納秀雄、大谷善博、山本教人（1994） ボランティア・スポーツ指導者のドロップアウトに関する社会学的研究：指導への過度没頭と生活支障の関連及びその規定要因について 体育学研究 39 163-175
- 松岡宏高、小笠原悦子（2002） 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機 体育

の科学 Vol.52 No.4 277-284

松岡佐智、本郷秀和（2009） 福岡県立大学社会福祉学科学生のボランティア意識に関する調査研究—福祉ボランティアを通じた経験型実習導入の可能性— 福岡県立大学人間社会学部紀要 Vol.17 No.2 119-131

松下雅雄（2005） 学生のスポーツボランティア活動の支援事業へスポーツの実践的指導力を持った学生を“地域とともに”育て、地域のスポーツ活動を活性化する～ 大学と学生 18 32-36 独立行政法人日本学生支援機構編

Mayer,B.W. Fraccastoro,K.A. McNary,L.D. （2007） The Relationship Among Organizational-Based Self-Esteem and Various Factors Motivating Volunteers. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 36(2) 327-340

McEvoy,J. O'Mahoney,E. Tierney,A. （1990） Parental attitudes to friendship and use of leisure by mentally handicapped persons in the community. *International Journal of Rehabilitation Research*. 13, 269-271

溝口紀子、岩田香織（1999） 全国知的障害児施設におけるスポーツ活動の実態調査 静岡県立大学短期大学部研究紀要 13（2） 239-246

望月浩一郎（2007） 日本の障害者スポーツと法をめぐる現状と課題 身体教育医学研究 第8巻 第1号 1-11

文部省高等教育局（1999） 大学教育におけるボランティア活動の推進について 大学教育研究会監修 大学資料 143.144 合併号 43-68

森秀樹（2003） カウンター・カルチャーとしてのボランティア 大学生とボランティアに関する実証的研究 第二章 23-98 佐々木正道編著 ミネルヴァ書房

南條正人、仲野隆士、小池和幸（2005） 知的障害児（者）の余暇活動と生活の質（QOL）に関する研究—スポーツ・レクリエーション活動の活動群と非活動群— レジャーレクリエーション研究 55 26-29

（財）内外学生センター（1999） 「学生のボランティア活動に関する調査」結果について 大学と学生 409 56-61

内藤正和（2007） 大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究 愛知学院大学心身科学部紀要 3 21-29

中佳久（2006） 養護学校における肥満指導 小児看護 29(6) 725-729

中山考之（2000） 知的障害児の余暇と地域生活—余暇の実態調査より— 情緒障害教育研究紀要 19 239-246

文部省高等教育局（1999） 大学教育におけるボランティア活動の推進について 大学資料 143・144 合併号 43-68

守田香奈子、七木田敦（2004） 知的障害児のスポーツ活動への参加を規定する要因に関する調査研究—保護者への調査を通じたニーズの把握— 障害者スポーツ科学 2（1） 70-75

- 内閣府編(2007) 障害者白書 平成 19 年度版 110
- 内藤正和 (2007) 大学生におけるスポーツ・ボランティア活動へのニーズに関する研究
愛知学院大学心身科学部紀要 3 21-29
- 中佳久 (2006) 養護学校における肥満指導 29 (6) 725-729
- 中村真、川野健治 (2002) 精神障害者に対する偏見に関する研究—女子大学生を対象にした実態調査をもとに— 川村学園女子大学研究紀要 第 13 巻 第 1 号 137-149
- 中山孝之(2000) 知的障害児の余暇と地域生活—余暇の実態調査より— 北海道教育大学
情緒障害教育研究紀要 第 19 号 239-246
- 仲澤眞 (2002) スポーツ・ボランティア活用の現状と課題 体育の科学 Vol.52 No.4
266-269
- 生川善雄 (1992) 精神薄弱児 (者) に対する態度と接触経験・ボランティア経験との関係に関する研究—福祉保育教育系女子大生の場合— 発達障害研究 13 (4) 302-309
- 生川善雄 (1995) 精神遅滞児 (者) に対する健常者の態度に関する多次元的研究—態度と接触経験、性、知識との関係— 特殊教育学研究 32 (4) 11-19
- 生川善雄 (1998) わが国における知的障害児 (者) に対する態度研究の現状と課題 特殊教育学研究 35 (4) 67-72
- 難波久美子 (2002) ボランティアグループへの同一性がその活動に与える影響について—メンバーシップへの同一性とメンバーへの同一性の 2 側面に注目して— Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University, 49, 77-82
- 西川正之 (1997) 主婦の日常生活における援助行動の研究 社会心理学研究 13 (1) 13-22
- 野村一路 (2002) 障害者スポーツにおけるボランティア～長野パラリンピックを通して～ 体育の科学 Vol.52 No.4 299-303
- 能村藤一 (1998) 知的障害者スポーツの現状と課題 臨床スポーツ医学 15 (2) 149-153
- 於保真理 (2004) 10 代の知的障害児の余暇活動に関する研究—172 人の親からのアンケート調査を中心に— 湘北紀要 25 15-21
- Okolo,C. and Guskin,S.(1984) Community attitudes toward community placement of mentally retarded persons. *International Review of Research in Mental Retardation*, 12, 25-66.
- 小野三嗣 (1985) 運動が骨格筋にあたえる効果 体育の科学 35 (10) 741-746
- Orelove,F.P. Moon,M.S. (1984) The Special Olympics program: Effects on retarded persons and society. *Institute for Sport and Social Analysis*. 8(1), 41-45
- 大谷博俊 (2002) 知的障害児 (者) に対する健常者の態度に関する研究—大学生の態度と交流経験・接触経験との関連を中心に— 特殊教育学研究 40 (2) 215-222

- Place,K. Hodge,S.R. (2001) Social Inclusion of Students With Physical Disabilities in General Physical Education: A Behavioral Analysis. *Adapted physical activity quarterly*, 18, 389-404
- Riggen,K. Ulrich,D. (1993) The Effects of Sport Participation on Individuals With Mental Retardation. *Adapted physical activity quarterly*, 10, 42-51
- 佐々木正道 (2003) 大学生のボランティア活動と受け入れ施設・団体の対応に関する意識と実態 大学生とボランティアに関する実証的研究 第六章 221-298 佐々木正道 編著 ミネルヴァ書房
- Schalock,R.L. Brown,I. Brown,R. Cummins,A. Felce,D. Matikka,L. Keith,K.D. and Parmenter,T. (2002) Conceptualization, measurement, and Application of Quality of Life for Persons With Intellectual Disabilities: Report of an International Panel Of Experts. *Mental Retardation*, 40(6), 457-470
- Selznick,P. (1963) 組織とリーダーシップ 北野利信訳 ダイヤモンド社
- 妹尾香織 (2003) 援助成果経験状況の予備的検討—若者の援助成果経験の事例— 関西大学大学院人間科学：社会学心理学研究 59 205-219
- 妹尾香織、高木修 (2003) 援助行動経験が援助者自身に与える効果：地域で活動するボランティアにみられる援助成果 社会学・心理学研究 18 (2) 106-118
- 妹尾香織 (2008) 若者におけるボランティア活動とその経験効果 花園大学社会福祉学部研究紀要 16 35-42
- Shapiro,D.R. (2003) Participation Motives of Special Olympics Athletes. *Adapted physical activity quarterly*, 20, 150-165
- 宋美英 (2009) ボランティア活動の継続・発展とボランティア組織の構造—福祉ボランティア活動を事例に— 北海道大学大学院教育学研究院紀要 109 51-80
- Special Olympics,Inc. (2001) Promoting Health for Persons with Mental Retardation —A Critical Journey Barely Begun
- スペシャルオリンピックス日本 (2006) ゼネラルオリエンテーション標準テキスト
- 特定非営利活動法人スペシャルオリンピックス日本(2005)
- スペシャルオリンピックス日本 (2004) 10周年記念誌
- Storey,K (2004) The Case Against the Special Olympics. *Journal Of Disability Policy Studies*, 15(1), 35-42
- 陶山哲夫 (2006) 障害者スポーツの最近の動向 理学療法学研究 21 (1) 99-106
- 田引俊和 (2005) 知的障害者のスポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究 医療福祉研究 第1号 85-93
- 田引俊和 (2008) 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究 医療福祉研究 第4号 98-107
- 高木修、妹尾香織 (2006) 援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性—行動経験

- が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究— 関西大学社会学部紀要 38 (1) 25-38
- 高畑床蔵 (2004) 知的障害者本人参加を重視した青年学級のより豊かな実践を求めて—T市「みんなの青年の会」における 13 年間の活動内容の検討— 発達障害支援システム学研究 3 (2) 56-64
- 高畑庄蔵、武蔵博文 (1997) 知的障害者の食生活、運動・スポーツ等の現状についての調査研究—本人・保護者のニーズの分析による地域生活支援のあり方— 発達障害研究 19 (3) 235-244
- 高沢晴夫 (1985) 運動が骨・関節にあたえる効果 体育の科学 35 (10) 760—
- 田中淳子・須河内貢 (2004) 知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究 岡山学院大学・岡山短期大学紀要 27 59-67
- 田中共子、兵藤好美、田中宏二 (2007) 高齢者援助ボランティアにおける活動の動機と効果—ソーシャルサポートの交換の視点を中心に— 岡山大学大学院社会文化科学研究科 文化共生学研究 5 51-69
- 丹後直子、杉山紗織、坂本裕、岩田玲子、前田晴美 (2006) 養護学校におけるボランティア養成に関する現状と課題—肢体不自由教育部門・知的障害教育部門併設養護学校 2 校と知的障害養護学校 1 校における実地調査を通して— 岐阜大学教育学部障害児教育実践センター年報 13 59-71
- 土屋美穂、山西哲郎、中下富子、横尾尚史 (2004) 知的障害児における代謝と肥満と運動 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 39 115-124
- 薄羽哲哉 (2006) リーダーシップ—フォロワーから見たリーダーシップ— 横浜国際社会学研究 10 (6) 135-156
- VanYperen, N.W. (1998) Predicting Stay/Leave Behavior Among Volleyball Referees. *The Sport Psychologist*, 12, 427-439
- 安井友康 (1998) 障害者の冬季身体活動に関する研究—障害者歩くスキー大会参加者の調査から— 年報いわみざわ 19 57-65
- 安井友康 (2004) [1] 知的障害者の身体活動の意義 アダプテッドスポーツの科学 矢部京之助、草野勝彦、中田英雄 (編著) 市村出版 160-163
- 安井友康 (2004) 車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響 障害者スポーツ科学 2 (1) 25-30
- 渡邊浩美 (2006) 障害者スポーツの社会的可能性 21 世紀社会デザイン研究 5 135-144
- 渡邊和弘 (2001) 休日・放課後における障害のある子どもの地域活動促進の展望—東京都の先進例をふまえた全知 P 連の地域活動促進・ボランティアの養成事業を通して— 発達障害研究 23 (2) 85-95
- Weiller, K.H. (1992) The Social-Emotional Component of Physical Education for

- Children. *The journal of physical education, recreation & dance*, 63, 50-53
- Weiss, M. Sisley, B.L. (1984) Where Have All the Coaches Gone? *Sociology of sport journal*, 1, 332-347
- Winnick, J.P. (1992) Early Movement Experiences and Development: Habilitation and Remediation 小林芳文、永松裕希、七木田敦、宮原資英（訳）子どもの発達と運動教育－ムーブメント活動による発達促進と障害児の体育－大修館書店 186-216
- Winniford, J.C. Carpenter, D.S. Grider, C. (1995) An Analysis of the Traits and Motivations of College Students Involved in Service Organizations. *Journal of College Student Development*, 36(1), 27-38
- Winniford, J.C. Carpenter, D.S. Grider, C. (1997) Motivations of College Student Volunteers: A Review. *NASAPA Journal*, 34(2), 134-146
- 谷田勇人 (2001) 福祉ボランティア活動をする大学生の動機の分析 社会福祉学 第 41 巻 第 2 号 83-93
- 徳田克己 (1988) 障害者に対する一般人の態度構造と態度変容に関する文献的研究 東京成徳短期大学紀要 21 63-74
- 土屋美穂、山西哲郎、中下富子、横尾尚史 (2004) 知的障害児における代謝と肥満と運動 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 39 115-124
- 山田力也 (2007) 障害者スポーツボランティア活動者の意識変容と役割構造に関する研究 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要 37 11-18
- 安井友康 (2004) 車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響 障害者スポーツ科学 2(1) 25-30
- 横川剛毅 (2002) 知的障害者のイメージとその規定要因 キリスト教社会福祉学研究 35 82-88
- 由谷るみ子、渡部匡隆 (2007) 知的障害養護学校における夏季休業中の余暇支援に関する検討－保護者へのニーズ調査と余暇支援活動の事後評価から－ 特殊教育学研究 45(4) 195-203
- 全国社会福祉協議会 (2010) 全国ボランティア活動実態調査報告書

資 料

1、ご自身のことについてお伺いします

1-1 あなたの身分を教えてください

- 1、学生（学業のみに専念している）⇒1-2に回答後、引き続き1-4からご回答ください
 - 2、社会人（就労をしている）⇒1-3に回答後、引き続き1-4からご回答ください
- ※1-4からは全員お答えください
-

1-2 1-1で「1、学生」と答えた方のみにお伺いします

●現在どのような学校に通っていますか

- 1、高校
- 2、短期大学
- 3、専門学校
- 4、四年制大学
- 5、大学院

●学年を教えてください

年生

●現在専門として学んでいる内容はS0の活動に関連していますか、関連していればどんな内容ですか

- 1、直接関連してはいない
- 2、障害児教育関係
- 3、障害者福祉関係
- 4、スポーツ関係
- 5、リハビリテーション医療
- 6、その他関係領域()

●あなたが将来就きたいと考える職はS0の活動に関連していますか

- 1、関連している（障害児教育、障害者福祉、スポーツ、リハビリテーション医療など）
 - 2、関連していない
-

1-3 1-1で「2、社会人」と答えた方のみにお伺いします

●現在どのような職に就いていますか

- 1、会社員
- 2、団体職員
- 3、公務員
- 4、自営業
- 5、主婦（主夫）
- 6、パート・アルバイト
- 7、その他

●最終学歴を教えてください

- 1、中学校
- 2、高校
- 3、専門学校
- 4、短期大学
- 5、四年制大学
- 6、大学院

●現在、または過去にS0の活動内容と関連する職に就いていたことはありますか

- 1、関連した職に就いたことはない
 - 2、障害児教育関係
 - 3、障害者福祉関係
 - 4、スポーツ関係
 - 5、リハビリテーション医療
 - 6、その他関係する職()
-

1-4 S0以外でのボランティア活動頻度を教えてください

- 1、していない
- 2、年数回程度
- 3、月に1～2回
- 4、週に1回程度
- 5、週に2～3回
- 6、ほとんど毎日

1-5 S0での活動経験を教えてください

- 1、1年未満
- 2、1年以上3年未満
- 3、3年以上5年未満
- 4、5年以上7年未満
- 5、7年以上10年未満
- 6、10年以上

1-6 現在競技者として何かスポーツをしていますか

- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1、していない | 2、年数回程度 | 3、月に1～2回 |
| 4、週に1回程度 | 5、週に2～3回 | 6、ほとんど毎日 |

1-7 S0 の場以外であなたの身近に障害者はいますか

- | | | |
|----------------|-----------|------------|
| 1、家族にいる | 2、親族にいる | 3、友人・知人にいる |
| 4、面識はないがよく見かける | 5、たまに見かける | 6、いない |

1-8 現在までに部活動や地域のクラブなどでスポーツをしていましたか

- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1、していない | 2、年数回程度 | 3、月に1～2回 |
| 4、週に1回程度 | 5、週に2～3回 | 6、ほとんど毎日 |

1-9 現在もしくは過去に S0 で責任者としての役職についたことがありますか。兼任している場合はより大きな枠組みでの役職でお答えください

- 1、県組織単位での責任者（県の SP 委員長、県のボランティア委員長など）
- 2、支部・地域単位における責任者（支部の SP 委員長、支部のボランティア委員長など）
- 3、県単位でのイベント・競技会における責任者
- 4、支部・地域でのイベント・競技会における責任者
- 5、各スポーツプログラムの主任コーチ
- 6、その他
- 7、ない

2、スペシャルオリンピックスに参加した「きっかけ」についてお伺いします。以下のあ～への項目の中で、あなたの考えと最も近いものから順に最大3つまで選んでお答えください。

①	②	③
---	---	---

もっとも近い

2 番目に近い

3 番目に近い

- | | |
|------------------------------|---------------------|
| あ.誰かの役に立ちたいから | い.活動を通して社会の役に立ちたいから |
| う.ボランティア活動に興味があるから | え.プログラム運営に役立ちたいから |
| お.スペシャルオリンピックスを盛り上げたいから | か.自分の知識や経験を生かしたいから |
| き.ボランティアの必要性を他の人に理解してもらいたいから | く.スポーツに関心があるから |
| け.スポーツ活動を支援したいから | こ.身に付く技術や経験を得たいから |
| さ.多くの人と出会いたいから | し.社会的な視野を広げたいから |
| す.自分自身成長したいから | せ.ストレス解消になるから |
| そ.気分転換になるから | た.楽しい活動だから |
| ち.余暇時間を有効に活用したいから | つ.活動を通して自分を表現できるから |
| て.アスリート(知的発達障害)に関心があるから | と.障害者スポーツに関心があるから |
| な.アスリートと交流できるから | に.アスリートの活動を支援したいから |
| ぬ.他の人から認められたいから | ね.S0 グッズが手に入るから |
| の.組織から勧誘されたから | は.友人から誘われたから |
| ひ.先輩（上司）から誘われたから | ふ.交友関係が広がるから |
| へ.異性との出会いを期待したから | |

3-1、コーチとして活動を継続するにあたり、過剰に「負担に感じる」ことはどんなことですか。以下の各項目で「5…とても負担に思う」「4…負担に思う」「3…どちらとも言えない」「2…負担に思わない」「1…まったく負担に思わない」、のうち当てはまるものに○をつけてください。

3-2 あなたはSOを辞めたいと思ったことがありますか

- 3-3 コーチとして継続参加している理由としてもっとも当てはまるもの1つに○をつけてください

- 3-4 3-3で「1、積極的な理由（続けたい）」か「3、両方」に○をつけた方にお伺いします。

1、アスリートに会いたい	2、アスリートの成長を見たい	3、楽しい
4、他のコーチと会いたい	5、スポーツが好き	6、体を動かしたい
7、活動がためになる	8、その他（ <input type="text"/> ）	

分析ワークシート

概念名	個人的興味
定義	参加の動機が利他的なものではなく、利己的な要素が強いこと。あくまでも自身の興味や関心があり、積極的に参加を決意しており、「当該活動であること」が欲求を満たしうること。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.2</p> <p>「最初友達と一緒にいこうと言ってたんですよ。そういうボランティア系探したので、ラージ（サークル名）と SO を見つけて、とりあえず行ってみようみたいな感じだったんですけど。」</p> <p>「スポーツ好きだったんで行ってみたいと思ってたんですよ。で、ラージにフッキーさんいたんで聞いたら一人で来てもいいよ～みたいな感じだったんで勇気を出していったみたいな（笑）」</p> <p>「やっぱ福祉系の大学きたんで。障害のある子たちに興味があるとかではなくて、スポーツがっていうのと、ボランティアっていう感じの（笑）それで入ったんですけど。」</p>
	<p>Info.3</p> <p>「高 3 のときに、学校の講演で大学の先生が講演に来てくれて、SO についての話をしてくれて、それで知りました。タイトルが『少しの支援』かなんかで、すごい面白かったんですよ、普通に写真とかも見せられて、それでそういうのあるんやって知って。HP とか見て、大学生になったらやりたいと思ってたんですけど、青森きたからないのかなと勝手に思っちゃって（笑）」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「きっかけは小中特別支援教室があって、子どもが学級活動とか授業以外で普通学級にくることあって、そのクラスが自分のクラスで、自閉症の男の子と、9 年間一緒だったんですよ。それで興味あって。」</p> <p>「高校入ってすぐにもう福祉に興味あるっていうか、そういう道に進みたいって思ってたんで、障害児者とか関係なく広い範囲で興味あったんで、G（大学名）のそのパンフレットにスペシャルオリンピックスのこと書いてあって、全然何するかわかんないんですけどそこで初めて名前知って、O 先生の授業で STさんと TK さんがきてて、あと入学式のときのビラ配りでもらって。」</p>
	<p>Info.8</p> <p>「いや、Y さんとか C さんに元々話聞いてて、楽しそうだなって思ってた。子どもとか障害系の興味あったんで行ってみたかったんですよ。」</p>
理論的メモ	知的障害の興味。スポーツの興味。ボランティアへの興味。かなり広い。それぞれ、目的は違えど、自らの意思（積極性）を含んでいる。誘われた系もある。←情報の仕入れ先であっただけで、参加の決定は自らの意思。←強制力が働いてい

	<p>る場合（先輩からの強要など）があればどうか？←強制力が働いていても、活動内容にも自らの興味・関心の矛先が向いていれば包括できる。ボランティアに興味あって、そのくくりの中で適当に SO 選んだのはどう扱うか？←そもそもボランティア活動に興味があって、ボランティア活動ができる団体の中から選択されたのだから、自らの興味関心は明確にあると判断できる。内容も分からず連れてこられる、まったくのランダムのように選ばれたのとは違うのではないか。活動内容に関係すること（SO、知的障害、スポーツ、ボランティア、自閉 etc）に興味元々あって参加するということで括れるのでは。自らの欲求を SO だから満たせる状態である。SO じゃなきゃダメというレベルまででなく、SO 活動ならば満たすことができる（知的、スポーツ、ボラ）。</p>
--	--

分析ワークシート

概念名	目的意識・興味なし
定義	参加にあたって、最初から活動の趣旨や理念に賛同していたり、活動のキーワードとなる「知的障害者」や「スポーツ活動」、「ボランティア」などについて興味をもっていたのではない。積極的な意思、当該活動である必要性が認められない状態で参加していること。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「ボランティアがやりたいとかでなくて、バドサーとか運動系を考えてて、フォークギターとかも考えてたんですけど。正直障害児教育に入ったけど障害についてわかんなかったですし、興味ももてず、むしろ偏見もってたくらいなんで。」</p> <p>「(参加を決めた理由として) 他におもしろそうなサークルなかったのもあるんですけど (笑)」</p> <p>「SO とか知らなかったですね。オリンピックとの違いもわかんないくらいの (笑)」</p>
	<p>Info.5</p> <p>「授業で ST さんと TK さんとが SO の紹介にきてて、SO ってなんだろうって思ってた。説明会行って。深い意味はなかったんですけど、実際に行ってみてそれで入ろうと思いました。入ってやるまでは実感持てなかったんですけど。最初から SO とかではないです。」</p> <p>「とにかくサークルに入ってみたかったんですよ、ボランティアとかも関係なく。」</p> <p>「なんとなくです (笑)」</p>
	<p>Info.6</p> <p>「S さんとか先輩が 1 年生いる前で説明したのがきかっけで、とりあえずみんなで行ってみよかって。」</p>
	<p>Info.7</p> <p>「最初から SO とかじゃないというか、聞かされてなくて。O さんがいきなり『人手足りないから来てくれ』って言ってたので、その日予定ないんで行きますって行ってみたら SO で (笑)」</p>
理論的メモ	<p>まったくの興味なし。結構いるものだ。一度行ってみるのはわかるが、なぜ明確な意思がないのに継続できているのか。SO への参加が自ら積極的に選択したものであっても、その背景に SO に関連すること (知的障害、スポーツ、ボランティアなど) に対する関心がなければ、「選んだ」のはほぼランダムと解釈できるのでは。＝いわば何でもよかった。「SO」じゃなきゃダメな理由が見つからない場合。理由があっても「単純に仲間が欲しかった」→ならサッカー部でも、漫画研究会でも何でもいい。「知的障害に興味がある」→サッカー部、漫画研究会じゃ難しい。</p>

	<p>SO である必要性がないにもかかわらず、SO に参加した場合。少なくとも、SO という知的障害者のスポーツ活動を選択した合理的な理由が見当たらないケースを一つの傾向として考えてみる。次も行ってみようと思わせる要因があると考えられる。いきなりアスリートと信頼関係築けるようなことは考えにくいから、アスリートとの関係性に関することではない要因も考えられる。</p>
--	---

分析ワークシート

概念名	楽しい体験
定義	当該活動に関連する人とのかかわりや、実際の活動場面において、本人が楽しい・感動したなどポジティブに感じる事ができた経験。また、スポーツ活動以外の場においても、活動仲間とのかかわりに楽しさを見出すこと。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「1 回行ってつまんなかったら辞めよかな思ってたんですけど、1 回行ったら。ま、1 回だけじゃそこまで楽しいとは感じれなかったんですけど、かかわりが楽しかったというか。」</p>
	<p>Info.2</p> <p>「うれしかったのは交流会で T ちゃんとかすごいいハイテンションで、今までにないアスリートの姿見れて、自分もすごい楽しかった。そんなとき Y ちゃんと一緒に写真とったんですけど、30 日くらい待ち受けにしました。」</p> <p>「SO 以外にも、アスリートと、例えば運動会行ったりとか東中とか行ったりとかしたとき、日常生活のふとした瞬間に出会えるのが、『おおっ』ってなります。SO 以外のときに普通にみんなと話せるのうれしいし、みんなとかかわってるの楽しいです。」</p>
	<p>Info.3</p> <p>「スキーのときに、M ちゃんリフトであげたときあるじゃないですか、それで降りてきたときにお母さん待ってて、周りの、M ちゃんのお母さんじゃない人も待ってて、『あ～よかったね～』って、なったのが、いいなって。』」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「やっぱり・・・楽しい。アスリートと触れ合うの好きだし、先輩方との触れ合いもすごい楽しいし。学部で、意外にボランティア参加してる人少ないんですけど、SO に参加してるのはほんと M さんくらいだったんで、プログラム終わった後とか今日 Y ちゃんこうでさーとか会話を M さんしたり。」</p>
	<p>Info.5</p> <p>「毎日やるけど休憩とか始まる前とか終わってからの、その SO 以外でのコミュニケーション、焼き肉行ったりとか。普段話す機会ないアスリートともからめるのは楽しいってか、はい、嬉しいですね。」</p> <p>「毎回のプログラムで言うと、そのファミリーの方と話すのが楽しいし、あと、話しかけられるとか。特定の人とかってじゃなく、幅広く、あれ？この人から話かけられたって感じの、なんか、そういうのがすごい嬉しかったり。あと最近でいったら、アスリートの兄弟で、赤ちゃんいるじゃないですか。そういうなんだろう、家族じゃないけど、嬉しさ、みんなでこう『あーいいですね～』みたいに話してるのが、すごいいいなっていうふうに感じますね。」</p>

	<p>「そうやってアスリートも含め、みんなでその、『よかったねー』っていうの、親戚じゃないですけど（笑）。なんか当たり前なのかもしれないですけど、そういうのが地味に。家族じゃないけど喜ぶとか、一緒のことに、一つのことに关してみんなで喜ぶっていうか。あとは、なんだろう、みんなで喜ぶっていう部分で、自分のその、子どもじゃないアスリートがゴールした時でも、関係なく『あーよかったよかった』みたいな感じ、応援も含め、その後の言葉掛けとか。なんか嬉しいですね。」</p>
	<p>Info.6</p> <p>「SO とは直接関係ないんですけど、先輩たちとご飯行ったり、バスケして遊んだりするのとかは楽しいです。人とかかわるのが好きなんです。」</p> <p>「(また行きたいって思う理由はなんだろう?) 今が楽しいから。バスケ自体も好きなんです。あと Jさんと仲良くなりたいし、まだかかわったことない人多いからみんなと仲良くなりたいです。」</p> <p>「先輩がいいひととかじゃないですか (笑) ここで言うの恥ずかしいですね (笑)」</p> <p>「根本的な話バスケが好きなん、てか、運動が好きなんです。運動するのが楽しいし。うーん、楽しいこと…。バスケ…してる時…んー何が楽しいって言われたら SO の活動が楽しいってなっちゃう。」</p>
	<p>Info.7</p> <p>「いや、正直最初はアスリートとか、ファミリーさんとかと話したことなかったんで、何したらいいのかなって考えてたんですけど、今は普通にすごい楽しいです。ほんと若干騙された感じで連れてかれましたけど、誘ってもらって良かったです (笑)。」</p>
	<p>Info.8</p> <p>「先輩方皆いい人で、飲みとか楽しいから。」</p> <p>「バスケ全然できないですけど、超楽しいです。最近 M とかと仲良しなんですよ。」</p>
理論的 メモ	<p>活動内容自体は様々。楽しい、感動した、嬉しい。必ずポジティブな経験をしている。←当たり前? ←ポジティブな経験こそ、継続への促進要因。興味もなにもないのに継続できているのには、楽しい経験が不可欠では。←逆に楽しくない(つまらない) 経験はどうか。知的障害者との接触がない場合、SO メンバーという括りの中での活動であればスポーツ指導場面でなくとも、飲み会であっても「SO での楽しい経験」との認識。仮に活動内容自体が楽しくなくても、SO 仲間と遊んで楽しかったら、結局また活動に行くことになるのでは。←参加するうちに、SO 活動自体の楽しさも理解する? 逆に嫌な経験の影響はどうか。楽しいことばかりとは考えられない。←比較検討必要。</p>

分析ワークシート

概念名	知的障害者とのラポール形成
定義	知的障害者との信頼関係が構築されること、または、親和的なかわりができるようになること。またそれを大学生自身が感じる事。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「やはりナショナルゲームの Y ちゃんですね。最初はまったく相手にしてくれなかったんですけど、少しずつラポール形成できて、最後はああやってゴールできたのが感動しました。ファミリーも泣いて喜んでて、その場面まで一緒に頑張ってたのがうれしかったですね。あと K も、最初は A 大学の（会場で練習した）ときだったんですけど、まったくもう、ものすごい拒否されたんですけど、スキーですっと一緒にやって A 大のときのようなことなく、普通に接せられたことですね。」</p> <p>「スキーの最後のときに自分で描いたしおりみたいな作ってくれて、お母さん『そのしおりは信頼してる人にしかあげないんです』とおっしゃってて、Y ちゃんもありがとうカードとかくれて、宝物ですね（笑）J も最初ナメた感じだったのに、昨日とかも「Info.1 と一緒！」とか言ってくれて。」</p>
	<p>Info.2</p> <p>「最近日常になってるんですけど、考えなおしたとき、M とか K とか、J さんとか最初覚えてもらえなかったけど、普通に「Info.2 さん」とか呼んでくれるようになったのとか。普通にいる相手になったのがうれしかった。いいかわかんないんですけど、1 年生ってまだ入ったばかりじゃないですか、慣れないからアスリートと距離感ある感じで、それでうまくかわれなくてアスリートも気まずい感じで、こう、助け求めてウチの方見てくるのとか、1 年生に申し訳ないんですけど、嬉しいです（笑）」</p>
	<p>Info.3</p> <p>「名前覚えてもらおうとすごい嬉しいです。前々回私 Y さんについて、機嫌悪くしてしまって、それで前回私つかないかったんですけど。それで、（自分が休んだ時に）この前、前いたお姉さんは？って聞いてみたいで、覚えてくれてた一みたいな。人伝えに聞いたんですけど。」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「やっぱり、アスリートとのふれあいが嬉しいです。名前呼んでくれたりとか、覚えててくれたりとか。すごいおっきいです。」</p> <p>「Y ちゃんが、去年とちょっと違うじゃないですか（笑）。ツンツン度が増えて（笑）。最近はずっとそっけない感じで距離置かれたりとかあったんですけど、その中でたまに自分から走ってきてくれたりとか、一瞬一瞬のちいさいこととかすごい嬉しいです。」</p>

	<p>Info.5</p> <p>「アスリートとのやっぱりふれあいというか、かかわりが一番です。もちろん言葉はあるかたでお話しするのも楽しいし、あんまりなくても、ハイタッチするだけでも、楽しいというか。そういう部分での楽しさがあります。やっぱりなんか、1年生のときとかと違って、アスリートもその、『いつも来る人』ってわかってくれているというか、だからこそ話してくれる部分があるのかなって部分。楽しいし、嬉しいし。結構覚えてくれない感じもあったので。一番最初は、挨拶とかしてもすぐにどっか違うところ行ったりとかあったけど、今は、挨拶して、そこから話につながったりとか。」</p> <p>「前は冷たかったのに、今自分から走ってきてくれたりとか、挨拶とか、一瞬一瞬のちいさいこととかすごい嬉しかったです。」</p>
	<p>Info.6</p> <p>「あ、去年より楽しさを見いだせてるところはあると思います。アスリートとの関係がちょっとよくなったというか、普通に話せるようになったんで。自分の中では結構去年よりはいい感じだなんて思うことは。やっぱ最初の方緊張とか、どう接すればいいかわかんないとかあるじゃないですか、でなんかこう結構気張った感じで。気張ったてか緊張ってか、ずっと考えながらやってたんで、楽しむよか気遣うみたいな感じだったんですけど、今は慣れがでてきたんで。」</p> <p>「やっぱ去年に比べてアスリートと話せるようになったっていうか。名前ちゃんと覚えてもらって。ない、やっぱ1年いるんであれですけど、なんか、サブコーチになってからファミリーにもちょっと覚えてもらえて。『Info.6さん』て、『あ、はい』て。去年より関係がよくなったってゆうか。去年ただの、ただのお手伝いのお姉さん見たいな感じが、サブコーチのお姉さんにちょっと（笑）昇格した感じが。」</p>
	<p>Info.7</p> <p>「Hとか、最初全然言うこと聞いてくれなくて、いや言うこと聞くってか、なんかうまくサポートできなかつたんですけど。うまく伝えれないし。いやでも最近、挨拶とかもできるようになって、あ、覚えてもらったかなみたいな。嬉しいっすよね。」</p> <p>「H（知的障害者の個人名）に名前覚えてもらって、それがすごい嬉しくて（Info.7）」</p>
	<p>Info.8</p> <p>「SO 絶対辞めません。てか自分友達いないんでアスリートしか友達いないんで。最近普通にMと仲良しです。俺バスケ全然できないんで、Mいなかったらあんま行く気しないですもん。」</p>
理論的	実際に知的障害者が信頼しているかどうかは具体例などの話の内容からしか判断

メモ	<p>できないが、少なくとも本人はラポール形成されたと実感し、それを喜びに感じている。継続意欲に確実につながっていると思われる。「頼られている」よりは、「仲良くなれている」感じ。最初は嫌われている・忌避的な態度・覚えられていない→かかわり方が変化する。好ましい変化。だれしも最初からうまくかかわれているわけではない。もどかしい・気まずい・うまくいかないが仲良くに変化は、通過儀礼のようなものか。皆、だいたい特定の相手との関係において言及している←好き嫌い？相性が関係しているのだろうか。SO に参加して最初に会った相手だから、最初サポートした相手だからというわけではないようだ。個人的な Y の名前は複数から確認されることから、3 年生以上のボラに印象強いよう。→なぜ Y 人気？外見がかわいい？Y は子ども・ダウン←外見の何をプラスに感じるかは人それぞれだけれど、実際かわいい。他にもいる。←ただ人懐っこいだけでなく、好き嫌い・気分の浮き沈みが激しい性格な分、うまくかかわれたときの喜びが大きいのでは。Info.4 も言っていた。ツンツン→「嫌われてるのかな（心配・不安・悲しい）」→でれでれ→「うれしい」「かわいい！」。ボラの気持ちの振り幅が大きい分、ありがたさ増す。最初っからうまくコミュニケーション取れるのではなく、いいかかわりができるようになるまで、ある程度の努力？時間？が必要になることが、より大きな感動につながる←知的障害者相手ならではと言えそう。障害があっても、身体的な障害でコミュニケーション能力に難がなければ、また違った回答になりそう。→一般化できる概念じゃない。</p>
----	--

分析ワークシート

概念名	知的障害者の成長
定義	スポーツ指導をおこなっている知的障害者に成長した点を確認された、また、大学生自身が実感している状態。スポーツ技術に関してだけでなく、コミュニケーション能力や、身体的な面での発達についてもその成長を喜ばしく感じる事。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「楽しいことは毎回違うんですけど、(SO に携わって) 4 年目だから 1 年のとき見てたアスリートの成長が見れるし、学校とかだと、学校の間でしか見れないじゃないですか、プログラムとかイベントとか場面ごとでアスリートとかかわることができるのがいいなと思います。」</p>
	<p>Info.2</p> <p>「よく考えたらおっきくなったなとかあるじゃないですか。」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「その・・・成長みれるのも。プログラムスキー終わってバスケになって、背おっきくなったねーとかボラ同士で話してて。」</p> <p>「たいてい施設のイベントとか、その時だけのボラじゃないですか。継続的に触れ合っていけるのが、他のボランティアではあまり経験できないと。」</p>
	<p>Info.5</p> <p>「一応今まで、去年とかはそんなに回数的にもぼちぼちしか来ていなかったのに、今年は毎回来て、しかもその、私との関係の中でも、なんだろう、いい具合というか (笑)。けっこう拒否されることとかもあったんですけど、プログラム自体にも参加してくれないことが多かったんですけど、そういう部分でも、なんだろう、私だけの力でもないし、アスリートが毎回来てくれるようになったし、プログラムに対する姿勢が変わったっていうか。なんか、取り組んでる感じが。」</p> <p>「今までは、プログラムに対して楽しんでるのは楽しんでるんですけど、なんか本気じゃないっていうか、途中抜けたりとか、違う話したりとか、プログラムに集中して取り組んでるって感じではなかったんですよ。けど、その、アスリートの話を聞いてると、毎週のプログラムの話とかしてるし、他の帰ってる施設とかでも話してるみたいですし、リレーとかで勝ったら勝ったことその施設の人とかにお知らせしたりとか。あと、プログラムに真剣に取り組んでいる。そこでの取り組んでる中で楽しさがみえるようになってくれたっていうか。そういうのが嬉しかったです。」</p>

	<p>Info.6</p> <p>「えっと、なんか、この前のプログラムだったら、KY 君がシュート決めたの、見てました？とか。成長ってか、うまくなってるてか、アスリートの成長見てると嬉しいってゆーか、なんかうまくなったら、一緒に喜べるてか、うまく言えないんですけど（笑） めっちゃ嬉しくて『わ〜』って思ってる。」</p> <p>「KY 君だったり、他にもいっぱいいるんですけど、うまくなってるなってときに嬉しい。ウチ教えるのへたなんですけど、なんか、そういうのうまく伝わってたりしたら、で、できるようになってくれたときとか。」</p> <p>Info.7</p> <p>「最初と比べてめちゃめちゃうまくなりましたよね。前回とかも、(バスケットボールの) 試合前に O さんマーク誰が誰で、誰が誰でって言ってたじゃないですか、で、あ、ちゃんとディフェンス意識してるなって。」</p>
理論的 メモ	<p>実際に何がどのくらい成長した（例：100mが昔は 15 だったが、やっと 14 秒台になった）という、成長の幅に関しては、考慮されない。そこまで大きな成長でなくても実感して感動している。実際に技術面や取り組む姿勢などに向上がみられたかどうかの判断はこちらはできないが（もともとデキることだったけど、単純に環境設定が悪くて発揮できなかったとか、今までボランティアが見たことなかっただけとか考えられる）、大学生自身がそう実感し、感動している。1 年の回答の密度濃くない←継続性高い方がより気付く、より感じるのだろう。別段、教えているスポーツがうまくなっただけではない。←もちろん教えてるスポーツの成長も喜びになっているってかそこが主要だろうけど。身長が伸びたとか、身体的な成長に関しても喜んでる。←継続参加ならではの。単発のボランティアや一回二回参加してみただけでは感じることはできない。長期間参加しているからこそ気づける。←登録だけ長い場合は例外。「密度」が大事。4 年間でも月 1 でしか行かない人と、1 年目だけど毎週行っている人では、回数が同じになっても、密度の濃い方がより実感するだろう。毎回毎回見てる方が、スポーツ技術の成長とか身長の伸びとか、気付きににくいのか？←技術はむしろみてないと変化気付にくい。それにちょっとずつの変化を毎回確認してるのでなく、ふと、当たり前前に顔を合わせている状況で、昔を振り返ったときに違いに気づく感じ。←ギャップ大きいし感動大きい。</p>

分析ワークシート

概念名	参加者との人間関係
定義	知的障害者本人、保護者、他のボランティアなど、関係者との良好な人間関係をまだ築けていない状態。大学生本人がそう感じていて、心的な負担につながっていると思われる。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「最初はアスリートもそうですけど、先輩とかファミリーさんとかどういう方々なのかわからなかったの。探り探りですね。今はそんなことないですけど。」</p>
	<p>Info.2</p> <p>「打ち解ける前は怖かったですけど（笑）。別に何されたとかでないんですが。やっぱ最初は…みたいな。今は別に、ガーっていわれてもとりあえず、あ、はいはいって聞いて（笑）。基本いい方々なので。」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「嫌だなとか、これは悩むってことってある？」 あ〜…T さん（アスリート）の…。何て言ったらいいのかなって。」</p> <p>※Info.4 が参加当初、T（SO に参加している知的障害者）から過激な内容のメールが昼夜を問わず何通も長期間送られてくることがあり、それを暗に示した。</p>
	<p>Info.5</p> <p>「こっちからすると、なんか、SO に行ってファミリーの雰囲気っていうのがあるじゃないですか。で、最初のころは自分とは関係ない、ま、普通に自分の側もそう捉えてて、慣れてきた中でその雰囲気の中に入っていけるようになって、で、そこから。」</p> <p>「(参加者とのかわりで困ることはあるの?) 今は特にないですね、逆にそういうのは考えたって思いますし。一年生のときとかだったら、ファミリーの人との関係とかも考えたんですけど、もう関係もできてきたし、全然負担には感じないですが。」</p>
	<p>Info.6</p> <p>「あー、じゅんじ（知的障害者 J の名前記憶違い）さん…?（「J でない?）」 あ、でしたっけ? はい。その J さんに怒られたのがうわ〜ってへこんで。そのときいきなり S さんとか 3 人につかされたんですよ、A（友人の大学生ボランティア）もキモいとか言われてへこんで（笑）。私言ったこととかは文句とかすごいんですけど、Y さん（先輩の大学生ボランティア）とか先輩とはやりとりできて、あーやっぱ慣れかなーと。でも私はちゃんとしてる…って言ったらあれなんですけど、H ちゃん（友人の大学生ボランティア）は障害重い、あの何君でしたっけ? 手がこうグーってなってる（実際にやってみせる）、（あー、D ちゃんね）はい、についてたんで。何しゃべっていいかわかんなくて、変に話したら傷つけるかな</p>

	<p>とか、ほめた方がいいのか・・・。」</p> <p>「ファミリー・・・ま、ズバズバ言ってくるんで精神的に『うっ(胸に手を当てる)』てなるのは(笑) 例えば T さんのお母さんとか『連絡係誰?』とか言われて、『あ、あたしですよ』『ちょっと、メール来ないんだけど』って、『そうですね』とか(一人二役で演じて見せる)。だいぶ慣れましたけど。」</p> <p>「アスリートもファミリーも人見てますよね。ファミリーすっごい見てますよね。めっちゃ見られてて怖いときありました。(思い出を語ってもらっている最中であつたので) それ嫌なことに入りますよね(笑)。してなんか、陸上のときとか、あたし M さん(知的障害者) こなくてファミリーの近くで待ってるときとか、『あの人なんとかなだよ』とかって、あ〜見てるって。」</p>
	<p>Info.7</p> <p>「最初、自閉症とかダウン症とか、名前は知っててもどういう特徴があるのかわからなかったんで。でも O さんとか、M さんとか(いずれも先輩の大学生ボランティア)、このアスリートこうだからこうしてみるといいよって教えてくれたんで。(今はどうよ?) もちろん、全部わかるとかはで〜はないですけど、だいぶ最初よりは緊張しなくなったかなーって。」</p>
	<p>Info.8</p> <p>「正直、S さん(保護者) 怖いです。(確かにね笑、でも話したらそんな悪い人じゃないよ) あーマジですか。特に話す機会もないんでわかんないんですけど、とりあえず。」</p>
理論的 メモ	<p>負担にはなるが、時間ともに解消傾向。通過儀礼のようなもの。人間関係の構築が嫌でファーストコンタクトの段階で離脱する場合はあるのか? ドロップアウトしたメンバーについては現存のメンバーの調査からは確認できない。対アスリート、対ファミリーととバリエーション→要するに「SO のメンバー」になじめてない状態。誰でも最初っから場になじむやつはいないだろうと。保護者の威圧感。知的障害者とののかかわり方。が大きな二要素か。緊張とか不安がつきまといっている。</p>

分析ワークシート

概念名	保護者同士のいざこざ
定義	大学生自身と保護者の関係性においてではなく、保護者と保護者の間に軋轢がし ょうじており、それについて負担感が生じている状態。
ヴァリ エーシ ョ ン (具体 例)	Info.1 「あと負担・・・はファミリー同士の人間関係、いざこざ・・・ですね（笑）。」
	Info.2 「ファミリーとかも入ってきて、関係ない話とかもでてくるじゃないですか、そ っちの方が長いんで。たまにその愚痴が痛々しいみたい。やっぱり言いたいら しくて。やっぱなんか、イベントの会場の話もそうですけど、いろいろやりづら い。」
	Info.3 「〇〇さんと××さん（保護者の個人名）めっちゃ仲悪いじゃないですか。なん でなんみたいな（笑）」
	Info.4 「フレイアフェスティバルの式典で、T 君のお母さんと一緒なんですけど、今フ ァミリーめんどくさくってさとか聞くと・・・。」
	Info.5 「あーファミリーさん同士のいざこざっていうか確執が聞こえるのがちょっと。 会議のときとかでもそういう話になるときあって。」
	Info.6 「ファミリーがファミリーの悪口言ってるみたいのとかもあるんで。」
理論的 メモ	大学生と保護者の関係性は概ね良好なもの、かわいがってもらっているよう。軋 轢は活動年数が長い保護者同士において、より生じやすいようだ（参加経験長い 分、思い入れ、独自の思想が生まれてるのでは）。最初大学生は気づけないし、保 護者も嫌な面を見せないようにしていると考えられる。実際 1 年生からは確認で きない。←保護者同士ではかなり露骨にしているようなので知っているかも？あ る程度心的距離が縮まってから、保護者が愚痴ったり、自分の考えに取り込もう としたりすることがある。物理的接触を避けた方がいい犬猿の仲になっている関 係もある。考え方の違いもあるが、もはや個人的な感情がほとんどなのではない か。最初の衝突は活動内容についての食い違いだったのだろうか。←回答からで は確認できないし、当然本人になんか聞けない。皆端的に話す、話してるし隠す わけではないがあまり掘り下げない。←保護者同士の関係性の悪さについては陰 口になってしまうし掘り下げないのは理解できる。第三者が介入したところで改 善するもんでもないし、そもそも介入すべきじゃない問題かもしれない。←であ

	<p>れば、かなり重大な問題。解決は本人たち同士でしかできないだろう。←解決でなくても、なんとか表面化しない、心の中ではよく思っていなくとも、活動場面では隠すことになるような環境作りができたらいいい。そもそも人前、しかも何回りも年下の前で関係者の否定的な発言をする（できる）環境についてまず考察すべきか？←地域性は考えられるか？長く参加している分、みんなの場というより、自分のテリトリーのように認識しているのかもしれない。大学生にとっては、大学生から触れることができないし、解決してくれない、ストレスフルな状態と推測できる。←明らかに嫌なこと。でも継続的に参加している。</p>
--	---

分析ワークシート

概念名	時間的余裕の減少
定義	直接のスポーツ指導や、そのための計画・準備、その他スポーツ活動以外のイベントなどに時間がとられ、自身のプライベートな時間が減少すること。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「最初の頃は時間よりも気持ちの面での負担が大きかったんですけど、今は逆ですね。」</p> <p>「時間の負担大きくなりました。」</p>
	<p>Info.3</p> <p>「会議とかあると、一週間けっこう潰れることあるじゃないですか、準備とか、たとえば陸上が始まったら会議多くなるし、それで日曜日プログラムなんでちょっと時間が…って（笑）。」</p> <p>「(リーダーってやること多くて大変じゃない?) それはそれでいいんですけど、レポートとかが詰まってくると、時間的につらいかなと。」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「三年生になって、実習とか入ってきて。フォーラム (大学の行事) とかもやってるじゃないですか。バイトもあって。けっこう時間とれないのはあるんですけど。」</p>
	<p>Info.5</p> <p>「最近思うのが、運営?にかかわることになって、でも自分はほとんどかかわってないんですけど、プログラム当日の楽しさの他のことの難しさとかが。会議とかも増えたので。そういう直接アスリートと関わってない時間が多いのは、勉強にはなるけど、やっぱり当日のプログラムに比べて苦しいみたいな。(それは自分の時間的にきつってこと?) はい。昨日はたまたま時間長かったってのあるんですけど、終わったら『あっもう 5 時』と思って。」</p>
	<p>Info.6</p> <p>「ただ、勉強とか追いつかないときはたまに陸上犠牲にして、その間にレポートガッてやってってことを、実はしてました。あとはバイトとか夜バイトだったらきついなとか。たまにあります。」</p> <p>「あとテストがあると時間が…。テスト前は勉強ですね笑 なんか日曜日って勉強に使うじゃないですか、がっつりバスケやったあと夜やろうと思ったらねちゃったとか笑 みんなが思うことですね。」</p>
理論的メモ	<p>皆負担であると認識しながら継続できている。聞けば、「～とかがあって、○○だから、それが問題」のように、具体的に分析もでき、負担を自覚している。嫌なら作業を引き受けない、最悪 SO を辞めればいいのかはとも思えるが、なぜ辞めなかったのか。←過去辞めた人いるかも (確認できない)。あくまでも『時間』が負担である、それが作業内容の多さや手間の大変さからきているのに、『時間』</p>

	<p>が問題と捉えている。労働内容・時間としてはきついものがあるが、それが「アスリートのため」「SO のため」なら忙しくなるのはしょうがない⇒自覚してるだけの状態から、意識的に乗り越えて・受け入れている。←これは一緒に括るの不適切、次の段階だろう。</p>
--	--

分析ワークシート

概念名	果たすべき責任
定義	スポーツを指導する者として、背負わなければならない、ついてまわる責任があると自覚している状態。指導者として果たすべき役割を認識している。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「ボラの何人か、責任者での話し合いでものごとが決まってしまう負担みたいな、プレッシャーみたいのはありますね。」</p> <p>「あと、学生側にも運営にも関わらねばならない、プログラムに参加してない人たちに、現場のことを伝えるときに考え方とかギャップが大変ですね。」</p> <p>「キレイゴトという、アスリートと接せられるってうのがあるんですけど（笑）、自分は全部がそうとは言えなくて、義務感、責任ていうのもあります。6:4 で 4 が義務です（笑）。組織として考えて義務として今提供しているサービスの質を落とせない、なのでやらなきゃならない。残りは純粋に楽しいからです。アスリートに会いたい会いたいだけだと 2 時間の内容を適正に判断できないんで、確認するための残りの 4 割です。最初は 8:2 だったんですけど、組織にかかわってきて割合が変わりました。でも楽しさが減ったんじゃなくて、ただ義務的な部分が増えたから割合が変わっただけで。」</p>
	<p>Info.3</p> <p>「例えばケガさせてしまったときに、いくら保険入ってるっていてもやっぱり責任感じるじゃないですか。」</p> <p>「ファミリーと、ボランティアっていう立場が違うから、違うよって（保護者に）言われてもそれはファミリーの意見として受け入れられるけど、ボランティアとしてだと、ボランティアとしての意見として一つにまとめなきゃいけないじゃないですか。」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「1 年間やってみて、この子にはこの障害があってって全員のちゃんと知らないんで、知りたい。知らないとできないってわけじゃないんですけど、1 年やったからこそ、だんだんアスリートのこと知ってきて…。やっぱりちゃんと知らないといけないと思いますし。」</p>
	<p>Info.5</p> <p>「あとその、他の L の活動（大学のボランティアサークル）とかは、その施設の方がいて、そこから不足してお願いしますってくるので、最悪その施設の方だけでやっていけるじゃないですか。なので、そういう部分は SO は行かなきゃできないし、人がいた方がいいってのわかってるので。（SO は施設とどう違うの？）結構その、施設の職員がいてとかじゃないじゃないですか。自分たちがいてプロ</p>

グラム進めるって意味で。おこがましいんですけど、自分が、いなきやプログラムできないみたいな、なんか変に思ってる部分もあるので（笑）。」

「今はまわしていってますけど、責任…ですかね。責任というか…。」

「なんかもう、しょうがないし、そこをもう、使命感とか、感じてるけど、感じちゃいけないっていう風には思わないし。もうどうしょうもないから、そういう自分もいて、あともうひとり、もうボランティアとして、そのぶんもっとアスリートとも接して、なんか楽しもう、自分で楽しもうっていうふうには考えるように、同時になりますね。義務感…ではないですね。いや、義務感、あるのかな。義務感、10 だとしたら 1 割義務感で 9 が…なんなんだろう『もっと楽しもう自分みたい』な（笑）今までだったらきっと、たぶん義務感ってのを大きくとらえ過ぎて、なんかもう、たぶん SO やってても楽しむまでの余裕、力がなかったと思うんですけど。今は義務感という自分もいて、いても、そこ考えてもしょうがないって思えるようになって、実際楽しいし、そこは純粋に楽しもうと思うし。」

Info.6

「会議とかあるじゃないですか、なんか、自分の言ったことでこうなんか、ちょっと変わるような場でもあるじゃないですか、て思ったらなんか責任があるなって思っで。」

「なんか、ただアスリートのことをそんな知らなかった面が多かったんですけど、会議中あの子はこういう面があるからとか、なんかそういう裏事情？てか、どういう障害持ってるとかそゆ話でるじゃないですか、で知ったらなんかこう、アスリートのことを知れたっていうか。情報が増えたっていうか。やっぱ知ってないとちゃんと指導できないじゃないですか。」

「（もし転居した場合）こっちではこうだったのに、あっちでは、ま、こっちの SO で結構ガッチリてかちゃんとやるじゃないですか。でも違う方行ったらただ遊んでるだけで楽しさを見出せなかったりとかしたら、やんないかもしれないとか。（あまり真剣につてか、しっかりやってない地域だと嫌てこと？）嫌だつてか、参加したいって思えない。」

Info.8

「Y さんとかに比べたら全然軽いんですけど、なんか認定コーチ（SO におけるスポーツ指導者の資格認定）の話とか聞いて、何も知らないでコーチクリニック（資格認定のための講座）受けてたんですよ（笑）。いやーもっとちゃんとしようって思いました。（軽いつては？）あー、責任とか、意識とか。」

「ナショナルゲーム（SO の全国大会）コーチで行きたいです。次いつでしたっけ？（2012 年の福島）福島？実際コーチ少ないんですよ？はい、自分でよければ行きたいんで。」

理論的 メモ	<p>不安があるのか。自分の指導内容や立場上の問題に責任感をもっている。安全管理はできたか、適切な指導、運営はできているか、など内容は様々。ただ「ボランティアしてる」のではない。主体性ある。意識高い。役職経験が関係？←役職ない人でもしっかり責任感じてやっている。自分がやらなきゃだめとかではないけど、自分もしかりやらなきゃいけないという自覚。かといって、楽しさを一切排除しているとは思えない。楽しいのは前提で、やることはしっかりやらなきゃだめという感じ。ボランティア活動という「行為」ではなく、その「質」に意識が向いていると思われる。自分の感情や都合を優先させるのではなく、知的障害者のために、SO 活動全体のために何ができるか、何をすべきかという行動原理。←全員が「利己的動機（興味ない・知的への興味・ボラへの興味・スポーツへの興味など）」だったのに、意識に大きな変化が生じている。利他的。</p>
-----------	--

分析ワークシート

概念名	当該活動の優先
定義	私生活におけるプライベートな予定よりも、SO 活動を優先する意識でいること。 SO に参加できる状況をあらかじめ作っておいたり、活動美の前後に他の予定があっても、よほどのことがない限り SO に参加するつもりでいること。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「やってないですね。アレコレ手出すのはちょっとあれなんで、今は SO やってるので。」</p> <p>「学年が上がってきからなんですけど、後輩も増えるし、ボランティア委員長という役職にも就いたので、どうしても避けられない場合とか以外は、『義務化』というか参加しなきゃいけない感じはありますね。」</p> <p>「仕事を始めると SO 以外の場でも仕事の責任が生じるので、職種によるとは思いますが、休日が普通と違った場合とか。でもなるべくなら参加したい。(青森離れる?) 青森からは離れます。でも日本中でできるので、その地区で参加できたらいいのかなと。」</p>
	<p>Info.2</p> <p>「今はもう SO しかやってないです、新しい 1 年生とかが行きたいって言うので (笑)、やっぱ (大学のボランティアサークルへの依頼は) 土日が多いんで。」</p> <p>「他のボラと比べては〜…基本は SO です。SO があるからっていうので。」</p> <p>「就職しても、続けたいと思います。でも卒業した先輩結局みんな来てないんで、実際のところどうなんだろうとかは思いますが、自分では参加できる気でいます。」</p>
	<p>Info.3</p> <p>「(例えば彼氏ができて「SO いかないで遊ぼうぜ」とか言ったらどうする?) いや、それは、それ (SO への参加) を理解してくれてる人じゃないと (付き合えない)。」</p> <p>「(SO は生活において大きい?) はい、一番中心です。ただ、授業とか差し障るのは嫌だけど、同じくらい大事ですね。」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「去年は土曜日が授業あったんで、日曜日は So で、2、3 回は T 園の運動会とか日曜日に重なったんで、そっち行ったんですけど、今は土曜日にそういうボランティアとか探してます。日曜は SO ですけど。」</p> <p>「就職しても続けたいです。」</p>

	<p>Info.5</p> <p>「基本は SO が一番初めにきて、でも SO ははじめてから予定がわかっているんで、先に SO の予定は先に入れて、サークルとかでどうしても、とか実習先とかそういう部分で、あ、こういうのはこっち行っておきたいってのはそっちには行くんですけど。基本的には SO は、一番最初にきて、あとは入れないようってか、考えてないです。」</p> <p>「私は、その、優先順位もあるんでしょうけど、SO が一番に来ててって。」</p> <p>「県内で就職考えてるんで、はい、来れたらいいなと。」</p>
	<p>Info.6</p> <p>「バスケだったら、一応サブとかやってるんで、すごい優先してます。ただ、勉強とか追いつかないときはたまに陸上休んで、その間にレポートガッてやってってことを、実はしました。」</p>
	<p>Info.7</p> <p>「日曜日は SO ですね。一回 T 園の運動会どうしても人足りないって言われたんでそっち行ったんですけど、あ、あと実習で休んじゃったときとか。実習とかそういうの以外は SO 行きます。」</p>
	<p>Info.8</p> <p>「日曜は SO のための日なんで。SO 大好きですもん。SO ないとつまんないです。」</p>
	<p>理論的メモ</p> <p>他のボランティア活動よりもまず SO。SO は日曜にあるのがわかっているからすでに予定に入れている。バイトも勉強時間もずらしている。強制力？←でも皆進んで選択している。「そうしなければならない」という気持ちに駆られているし、「そうしたい」と明確な意思も感じる。逆に「絶対 SO 避けたい」的な発言は一切ない。SO に参加して当たり前という認識がうかがえる。役職経験があることが影響しているのではないかな。←サブリーダーだからとか。←役職ない人も。←間違いなく役職経験は、(良いか悪かは別にして) ちょっとした強制力を生んでいる。←役職経験が影響を及ぼしているもよう。そもそも、常に参加することが前提となっていないから、「SO を休む」という表現をしている時点で、帰属意識高い。不参加であることは悪いことではないのに、申し訳なさそう。</p>

分析ワークシート

概念名	ネガティブな経験の受容
定義	負担感を生じさせる事象があっても、それから避ける、嫌悪しただ否定するのではなく、活動の中で当たり前に生じうるものであると受け入れている。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「でも大変ですけど嫌じゃないですね。」</p> <p>「青森だからかもしれないんですけど、自分が誘う側になったとき、1 年を育てる側になったっていうのが大変ですね。入った時 1 年にどう楽しさを伝えるか、導く側になったときはそうですね。今の 3 年がごそっと抜けたときとかもう…（笑）。結局受け入れないとだめなんで、ま、やらないとだめやなと思いますけど。」</p> <p>「(保護者同士の人間関係の問題について) 実際僕らアスリートと接してるのはプログラムの 2 時間だけなので、アスリートの一生を見ないといけないファミリーさんの気持ちは、ま、理解することは不可能ですけど、熱くなるのはわかるというか。」</p>
	<p>Info.2</p> <p>「(やることいっぱいだし、実際大変?) それはいい、別に気にはしない。別に SO のことがあって動くのはかまわないんですけど、負担でも何でもなんですが…。」</p> <p>「そんなとかでないんですけど、学年が上がるにつれて陸上のヘッドコーチとかふれあいフェスティバルの企画とか、負担にもなるけどやる気にもつながるんで。ヘッドコーチとか去年楽しかったし。大変だけどそんな負担ではないです。」</p>
	<p>Info.3</p> <p>「ミーティングすること自体が苦…では、ないです。」</p> <p>「負担で思うのは、それは楽しい事のためだし、負担とは言ってるけど、それは最後には楽しいことに変わってるんで、そんなに苦ではなくて。」</p>
	<p>Info.4</p> <p>「スキ一の記録会のときには、運営側に初めてやらせていただいて、会議とかでも座ってるだけで、何一つ想像も出来ない事に向かって…行くのが、私は何もできなのが、ってときあったんですけど…辞めようとかではなかったです。」</p>
	<p>Info.5</p> <p>「あ、なんか、みんなが、なんだろう、こうしていきたいって気持ちあるじゃないですか、SO に対しての気持ちとして。みんなが同じ気持ちでやってるわけじゃないし、なんでしょう、ボランティアの意識として、私は、ま、みんなもそうかもしれないんですけど、活気あるみたいな（笑）。楽しみながらも、その中で皆で話し合っ、その、こうしていった方がいいよねって話とか、例えば反省とか。あと私がよく 1・2 年ときとかは、仲間内でも、どういう対応したらよかったかな</p>

	<p>とか、話すこと多かったんですけど。そういう部分で、その、後輩とか、あ、後輩ですね（笑）ともそういう話もしたいし、そういう意識持ってなんか、やっていけたらすごくいいなって思うんですけど。でも、みなさんそういうふうに乗ってるわけではないし。っていう部分で、なんだろう、そういう気持ちを伝えたいってのもあるんですけど、でもいえないというか（笑）。なんでしょうね、そういう、苦しさ的なのは、ちょっと、いっこいっこの部分で感じます。気持ちの違いというか。しょうがないとは思うんですけど。」</p> <p>「本当に切羽詰まったときに少し嫌だになってありますけど。別に普通にプログラム行ってやるまではいいんですけど、ただ、行くまでが、ああやだなやだなって考えるときがありますけど（笑）。なのでそんな負担っていうのは、そんなないですね。」</p>
	<p>Info.6</p> <p>「(辞めようとか考えたことある?) 辞めたいとは思ってないです。先輩も皆さん大変な中やってるんで。きついときも仕方ないですね。普通に楽しいんで、これからも続けたいと思ってます。」</p>
	<p>Info.7</p> <p>「(遊んだり、他にボラあったりで SO 毎週あればきつくない) 確かに、いやでも、レポートとかあると大変ですけど、嫌とかは別に。いい経験させてもらってるんで。むしろ行きたいかなって。」</p>
	<p>Info.8</p> <p>「ぶっちゃけ陸上とか午前中なんで、朝かきついんですけど、楽しいんで大丈夫です。」</p>
理論的 メモ	<p>時間的余裕なくなるけど仕方ない。体力的にはそもそも余裕。皆「負担だけど負担じゃない」＝作業内容としては質・量的にきついものがあるが、それが皆のためになるのであれば、心的な負担に直接的にはつながらない。←無意味に大変なもの（誰にとっても有益でないと思えるもの）は、はっきり嫌である。皆にとって有益であるなら頑張れる。キーは「参加者の実益」「活動の発展」と思われる。明確な目的意識があって、行動が伴っている。活動経験長いほど、思い入れあるのか、あきらめなのか「仕方ない」感がある。</p>

分析ワークシート

概念名	当該活動における役職経験
定義	SO 活動において、何らかの責任ある役割を担っており、その役職は大学生内で便宜上設定したものではなく、SO 業務において定められているポストに就いた経験があること。また、そのことが意識に何らかの影響を与えていること。
ヴァリエーション (具体例)	Info.1 「学年が上がってきからなんですけど、後輩も増えるし、ボランティア委員長という役職にも就いたので、どうしても避けられない場合とか以外は、『義務化』というか参加しなきゃいけない感じはありますね。」
	Info.2 「学年が上がるにつれて陸上のヘッドコーチとかふれあいフェスティバルの企画とか、負担にもなるけどやる気にもつながるんで。ヘッドコーチとか去年楽しかったし。」
	Info.3 「サブリーダーになってからなんですけど、これるときに来ればいっかっていう人との熱の差を、サブリーダーやってから感じます。普通に SO 日曜あるって知ってるのに「日曜空いてる？」とか聞かれると（笑）。なのに、別に予定ないのに SO にも来ないのは何でなんみたいな。で来たときはすごいいっぱいメンバーの顔するってか、何もわかってないのにすごい色々話するのとかは、イラッときます（笑）。」

	<p>Info.5</p> <p>「ボラ委員長ってのもありますし、今まではただプログラムに取り組んでいるだけってのもあったんですけど、けど今は、ボランティアのこともみながら、どうしていこうっていうふうに考えること。ですかね、大きく変わったってのは。自主的になりました。自主的、積極的。」</p> <p>「やっぱりおっきいのはもちろんそのボラ委員長、に自分になったっていうのがひとつと。あと、前にいた先輩方、えっと、二個上の方が、ま S さんとか A さん（先輩の大学生ボランティア、卒業し就職した）とかそのへんが働いて、毎回は来れないってなったときに、うん、ちゃんとしっかりしなきゃって自分で思いますし。」</p> <p>「どうしても先輩後輩ってあるじゃないですか。私も三年生って立場になって、いろいろその、自分のそういう、SO の中でもボランティア委員って立場もあるので、そう思うのかもしれないですけど、後輩がどう思っているのかっていうのは。後輩って言わずに、もちろん私より年上の人入ってきてても、ただ、なんか若干やっぱ後輩の方に目移るっていうか（笑）そういう先輩目線で見たくはないですけど、そういう目線で見ってしまう自分が嫌です（笑）はは。なんか、よくないってか、マイナスな面で見てるってわけじゃないんですけど、なんか、「できてる」「成長してる」って部分で。それも先輩目線なのかよくわかんないんですけど、なんか、自分の中では、先輩後輩関係なくっていうふうには考えてはいるんですけど、でもどっかで自分でそういうふうに見ていて。」</p> <p>Info.6</p> <p>「サブコーチになって、プレッシャーってかそこまでズシッて感じじゃないんですけど、ちょっと。前よりはちゃんとやらなきゃな見たいな。」</p>
理論的 メモ	<p>重要な役割につくから責任感が生まれるのか、責任感がある人だから重要な役につかされるのか。大人もいるのに大学生が主要な役を占めている。役職に就くことで意識が高くなり、今まで考えなかったことを考えたり、気付けなかったことに気づけたりする。イチボランティアだった私（受動的）から、組織における私（主体的・主動的）に変化している？←無役の状態から主体的で、周囲のことをよく見てる例普通にある。+役職経験は全員じゃない（無役の人もある）←でも全員しっかりした意思・目的意識・責任感もって活動している←でも使命感・義務感に影響してるのは間違いない。役職に就くことが指導者意識を強化・促進する模様。必須条件ではないが、役職に就くことが意識に大きな影響あたえる。</p>

分析ワークシート

概念名	学生というレッテルで評価されることへの不満
定義	大学生ボランティアのスポーツ指導者としての挙動・姿勢・実績ではなく、「大学生」であるという、SO 内における身分とは関係ないことから評価されることに、不満を生じさせている状態。
ヴァリエーション (具体例)	<p>Info.1</p> <p>「(大学生の) デメリットは、「信頼」。社会人、外の企業からの信頼は低いと思います。学生には任せられない、同じことやってても学生だからと信頼されないのが悔しいです。」</p> <p>「社会人でだけで評価変わってくると思いますね。同い年でも、参加歴違っても。最初から信頼得られると思います。他に(学生の) デメリット面は、プログラムとか SO そのもの以外の部分で、運営とか、外とのかかわりになったら出てくるのかなと。あと、大人の暗黙のルールみたいな、社会のマナーとかは経験不足だと思います。」</p> <p>「現場、実際のプログラムの場面では差がないと思いますけど、ファミリーの KY さんみたくプログラムにも参加されてる方いらっしゃるんで、逆に学生でもバイトしてたら日曜参加できないんで、どちらかとは言えないです。」</p>
	<p>Info.2</p> <p>「ファミリーの人たちが『本当に自転車で毎回いいの?』みたいな。こっちは全然気にしてないのにすごい気にされるじゃないですか、別に苦には思わないんですけど、なんかちょっと・・・ひっかかるっていうか。」</p> <p>「やっぱり学生というと甘く見られる、学生だから子ども扱いされる、とかはあります。同じ 22 の人で同じ学生でも話すまい人とそうでない人とだと、同じ学生だけどうまい人を扱い上にするのとか。同じ年でも社会人来たら扱い上になるだろうし。」</p> <p>「昼もらえたりとか、いいか悪いかわかんないんですけど、学生だからって言われて「ホッ」とするときと、「ん？」って思うときがありますね。時と場合によって。助かるときもあるけど悔しい時もある。遠くとか、外行ったときとかも、学生だから一般のボラより勝手に来れるでしょみたいな (笑)。」</p>
	<p>Info.3</p> <p>「外、外部とかと SO を知らない人とか、学生主体でやってるんだと思ったら、あ、サークル的なノリなのかなと思われる。親戚の人とかにこういう組織があるんですって説明しても、へー楽しくやってんだねーみたいな、ぴんどこないみたいで、ああ・・・って (笑)。」</p>

	<p>Info.5</p> <p>「あ、なんか、何かを決めるときに、若干、学生だからっていう部分で引け目感じるし、『なんか学生言ってるし』っていうふうな感じで捉えられる気がして。昔であれば上の人の立場に言うときとか、もし自分が社会人だったら、もっと受け入れてくれるのかなって感じがします。たぶん言い方もあるのかもしれないんですけど、でも、学生だからってふうにみられているような気がして。そういう部分では『クソっ』って思ったりしますね（笑）。なんですかね、立場が結構見られるというか。」</p>
	<p>Info.6</p> <p>「学生とか社会人とかって、SO 来るかどうかはその人の性格次第ってか、じゃないんですかやっぱり。」</p> <p>「大人の人でなんかモジモジしてる人だったら子どもにも人気ないし、ま、大人にもちょっとかかわりづらいつてか。あんま学生とか関係ないですよ、その人次第だと」</p>
理論的 メモ	<p>学生だけど学生扱いは嫌。←「学生」扱いされることに侮蔑的なニュアンスを感じ取っている。←侮蔑よりは軽視？個性を無視するステレオタイプが嫌？←過小評価されているという認識。褒められたい？←ボランティア活動をイイことと思っているから、称賛されないことについて苛立ちを。←だったら大学生云々とか関係ないはず。むしろ「学生さんなのにえらいねー」とかなりそう。←却下（逆に過剰に称賛されることを疑問視する例確認）。社会人より信頼低いという認識。社会人よりも意見が通りにくい経験。実績に対する評価や権限が大学生という立場によって公正さを欠くことへの苛立ちか？＝正当に評価されたいと考えている。「正当評価」とは？←コーチとしての実績に対する評価。指導者としてやっているのに、大学生という関係ない要素が評価に影響与えることが嫌。かなり強い憤りを感じる人も。そういえば保護者の中にも「何だ大学生かという空気があって、そうじゃないでしょと感じる」と言っている人いた。ニュアンスとしては、同じだけの売り上げ上げてきたのに、女だからって昇進が他の人より遅れるのはおかしい！みたいな。仕事内容で評価してほしい。←『私は指導者である』＝指導者としての働きにおいて評価してほしい。プライベートとビジネスのオン・オフの問題。大学生は指導者スイッチを on してしっかり役目果たしてるのに、周囲は大学生という off 状態のことで過小評価してくる、これが嫌なのだ。</p>